西祥郎さんの著作の「ヌサンタラのイタリア人」「ヌサンタラのポルトガル人」「ヌサンタラのフランス人」「ヌサンタラのスエーデン人」「ヌサンタラのドイツ人」、「ヌサンタラのスイス人」「ヌサンタラのイギリス人」「ヌサンタラのロシア人」の8編の作品を一挙にまとめて掲載します。脚注と挿絵は編者が追加したものです。(編者)

目次

ヌサンタラのイタリア人	2
ヌサンタラのポルトガル人	10
ヌサタンタラのフランス人	
ヌサンタラのスエーデン人	120
ヌサンタラのドイツ人	122
ヌサンタラのスイス人	133
ヌサンタラのイギリス人	139
ヌサンタラのロシア人	

1

「ヌサンタラのイタリア人 (1)」 (2020年07月24日)

VOCが地域支配を開始する何百年も前から、ヨーロッパ人はヌサンタラを訪れて見聞記を書き残した。歴史を通して見るなら、やはり支配者民族の見聞記がマジョリティを占めるのが当然であり、オランダ人・イギリス人・ポルトガル人の数が圧倒的だ。その中にイタリア人が混じっている。

フランス東洋学界の重鎮デニス・ロンバール氏の著作 Nusa Jawa Silang Budaya によれば、西暦紀元前からヌサンタラとローマ帝国の間に交通があったようだ。カエサル・ティベリウス・クラウディウスの時代は元より、もっと古いカエサル・アウグストゥスの時代から始まっていた可能性が氏の視野に入っている。ヌサンタラから出発した使節はセイロン島経由でローマに達したようだ。

大プリニウスが紀元一世紀に著わした博物誌には Mons Maleus の話が掲載されている。「その地では、寒い時期に6カ月間、影は北に伸び、暑い時期の6カ月間は南に伸びる」というのがモンスマレウスについての説明だ。

マレウスという語はタミール語で山を意味する Malai に由来し、それはタミール人の ヌサンタラに関する限られた知識の中で、赤道に近い唯一の山、西スマトラ海岸のイン ドラプラ Indrapura 山¹を指していた。

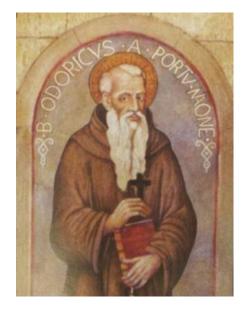
クラウディオス・プトレマイオスの作品「地学」には黄金半島 Chryse Chersonesos がムラユ半島を指して示され、更にギリシャ文字で記された Iabadiou という名称も見つかるが、これはサンスクリット語の Jawadwipa が翻字によってそうなったものと見られている。

_

¹ 西スマトラ州とジャンビ州の州境にある Kelinci 山の別名

イタリア人のヌサンタラ見聞記の事始めは偉大なるマルコ・ポーロによる。かれはヨーロッパ人がアジアへの道程を探りはじめた初期の時代に属すひとりだ。ヴェネツィアの商人だったかれは元王朝に仕え、故郷と中国間を往復してアジア域内の旅行記を残した。ただし、出版されたのはマルコ・ポーロが1324年に没してから二百数十年後の1550年代で、やはりヴェネツィア人のジョヴァンニ・バティスタ・ラムジオが行った。

マルコ・ポーロの見聞記には、実態にそぐわないものも混じっているとはいえ、現実に即して詳細に記述されたものも見られる。その長い道程で通過したたくさんの国々についての見聞をかれは記した。かれが中国からヨーロッパに戻るために海路を利用したとき、船はスマトラ島のサムドラパサイ Samudra Pasai²に寄港している。ジャワ島に足を踏み入れたことはなかったにせよ、ジャワという土地に関する伝聞も書いている。



続いてヌサンタラを見聞したイタリア人の記述は、フランシスコ修道会の修道士オドリコ・ダ・ポルデノーネ Odorico da Pordenone の手になる。かれはローマ法王の命によって1318年にアジアに旅立った。当時カトリック教団はアジアの各地に拠点を既に置いていたから先駆的な動きということではないが、それぞれの土地で少数の布教者たちが生命を賭けた布教宣教を行っていた時代だ。

オドリコはパドゥア Padua の町を発って黒海に向かい、更にペルシャへ進んでからカルカッタ~マドラスを経てセイロンに達した。そこから海路ニコバル諸島を通り、スマトラ島に到着した後ジャワ島に行き、続いてカリマン

² アチェ州南東部の Lhoksmawe 郊外にあった王国で、遺跡としては墓石のみが残存している。

タン島のバンジャルマシンを訪れた。更にチャンパ³に進んでから中国に入り、132 4年に北京に到着している。1327年にかれは北京を去り、イタリアへの帰途に着い た。西方へは内陸部のルートを取り、1330年ごろに帰国したようだ。かれは133 1年に故郷で没した。

オドリコの見聞記も、ヴェネツィアのジョヴァンニ・バティスタ・ラムジオが157 0年代に出版した。もちろん元になった記録や報告書はオドリコが存命中に提出したも のであり、パリやローマの文書館に収められている。出版されることによって、社会に とっての共通知識が育まれて行くのである。[続く]

「ヌサンタラのイタリア人(2)」(2020年07月27日)

オドリコのジャワ島見聞記の中には、かれが訪れたとある国の王は七つの王国を従えた大王であり、そこの島々ではクローブ・ナツメグ・コショウや他のスパイスが豊富に産出されている、と述べられている。その王は広大で豪華な宮殿に暮らし、階段や屋内装飾は黄金と銀で飾られていて、屋根も黄金で葺かれている。そしてモンゴルの王はこの国を何度も征伐しようとしたが成功せず毎回撃退されたという話も。それらの話から、オドリコが訪れたのはマジャパヒッ王国だったのではないかと推測されている。

オドリコの見聞記にたくさんの地名が登場するが、オドリコが本当にそれらの土地を 自身で訪れたのかどうかについては疑問であるとの声が強い。そうではあっても、出版 されたこの書物が当時の地理学者たちの重要な資料とされたことは疑いがない。

_

³ 現在のベトナム中南部にあった貿易で栄えた王国。

オドリコが残した記録がイタリア語・フランス語・ドイツ語・英語で書物になった。 最初の出版物はペサロで出され、1866年にユールが Cathay and the way Thither というタイトルの英語版を作った。2006年にはシンガポールの書籍店で Travels of Friar Odoric というタイトルの古書が見つかっている。

その次に登場するのは、ヴェネツィア商人ニコロ・コンティ Nicolo Conti の物語だ。ニコロ・コンティは 1 4 1 9 年にダマスカスに移ってアラブの言語と文化を習得してから東方への旅に立った。アジア西部地方の通商交易はアラブ人が勢力を誇り、アラブ文化が浸透していたから、そのエリアを渡るのに必要なツールをかれはまず身に着けたわけだ。当時 2 4 歳前後のかれが西から東へと旅していたころ、中国から鄭和が西方への航海を行っており、鄭和の航海に従った馬歓 Ma Huan が 1 4 3 3 年に著わした瀛涯勝覧⁴や費信 Fei Xin が 1 4 3 6 年に出した星槎勝覧⁵に記されている情報との突合せが可能になっている。

ニコロ・コンティはダマスカスから砂漠を越えてバグダッドに至り、ペルシャを横断してインドに達した。インドからスマトラ北岸のペディール Pedir⁶に渡り、かれはそこで一年間暮らした。かれはペディールで黄金の精錬法やスパイスに関する知識を吸収した。そこからマラヤ半島に渡って諸国各地を訪れ、最後にミャンマーへ行ってからジャワ島に下った。

ジャワで9カ月を過ごした後、かれは海路ベトナムに向かい、そこから陸路でイタリアへ戻った。ニコロ・コンティの大旅行記を世に著わしたのは、その当人ではなかった。かれが1437年にイタリアへ帰国する直前のシナイ山で、スペイン人貴族で旅行家のペロ・タフル Pero Tafur がかれの体験談を聞いて書き留めた。

5

⁴ えいがいしょうらん

⁵ せいさしょうらん

⁶ アチェ州の Sigli と Bieruen の間の海岸沿いの町



もうひとりはローマ法王庁の国務枢機卿ポッジオ・ブラッチョリーニ Giovanni Francesco Poggio Braccioliniで、ポッジオはニコロの話に強い興味を示し、ニコロから事細かに話を聞き、それを De varietate fortunae と題する書物にまとめた。タフルが書いた物語よりも、ポッジオがまとめた内容の方がはるかに地理学的価値を持っていたようだ。当時ヨーロッパにあまり知られていなかったアジア南部の状況にこの書物が光を当てることになった。ポ

ッジオはそれを意図してニコロの話をその方向にまとめたのかもしれない。この書物は 1492年にクリストフォロ・ダ・ボラーテ Cristoforo da Bollate が公にした。

ニコロ・コンティはジャワについて、ジャワはふたつの島から成っていると語ったことから、16世紀に作られた地図には大ジャワ Iava Maior と小ジャワ Iava Minor が描かれている。それらの島の住民はたいへん残虐で、他の地の原住民とはくらべものにならず、またネズミやネコなどの汚らしい動物を食べている。借金をした者が借金を返済できなくなると、金を貸した者の奴隷になる。住民の娯楽のメインは闘鶏で、闘鶏用の鶏飼育を職業にしている者がいる。などというのがニコロのジャワ評だ。

アジア南部の情報に飢えていた当時のヨーロッパで、ポッジオの書籍は引く手あまたとなった。言うまでもなく、そのイタリア語版が英語・ポルトガル語・スペイン語などに続々と翻訳された。[続く]

「ヌサンタラのイタリア人 (終)」 (2020年07月28日)

だが、中世にアジアを旅したイタリア人がかれらのみだったとは考えにくいことだ。 もっとたくさんのイタリア人が旅行記を書き残した可能性は大きいのだが、それらの手 記は各地方の古い文書館や図書館にひっそりとしまい込まれているのかもしれない。古 いインドネシアの情報がもしもそんな中に見つかったなら、インドネシアの歴史学をも っと発展させる重要資料になるだろう。

言うまでもなく、そこに書かれた情報がバイアスのかかっているものである可能性もある。反対に、われわれが既に共有している上述のひとびとの見聞記がバイアスから免れているという保証もないのだ。資料が増加することによって、バイアスは平準化されていくことになる。そのためにも、もっと多くの資料が発見されることが期待されているのである。

もっと最近、とは言っても百数十年前のことなのだが、イタリア人人類学者が蘭領東インドのニアス島で調査を行った。1886年4月22日から9月15日までの146日間、フィレンツェ出身の人類学者で動物学者でもあるエリオ・モディリアニElio Modigliani がニアス島に暮らして調査研究を行ったのである。

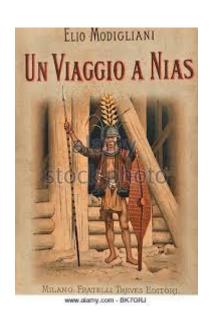
7



当時のニアスでは首狩りなどの伝統的慣習がまだ行われていたが、今では文明化されたためにその慣習は姿を消してしまった。モディリアニは人間の頭骨26個を含むニアス原生種の動植物標本多数をイタリアに持ち帰った。それらの資料はジェノヴァの自然史博物館 Giacomo Doria とフィレンツェの人類学民族学博物館 Antropologia ed Etnologia に今でも保存されている。

ヌサンタラのイタリア人

モディリアニはその時の体験記を Viaggio a Nias と題する著作にして1890年に出版した。イタリア語で書かれたその書籍には、ニアスのひとびとが歩んだ文明史が詳細且つ包括的に記されていて、内容は手工芸品・伝説・伝統歌謡・戦争技術・伝統医療など広範囲に及んでいる。さらにかれはニアス語=イタリア語の辞書まで作成した。



Tanah
Para Pendekar
PETUALANGAN ELIO MODIGUANI
DI NIAS SELATAN TAHUN 1886
VANNI PUCCIONI

モディリアニの著書「ニアスへの旅」の原書の一冊がシトリ Sitoli 山の博物館に長期間保管されていたのを、2004年の 津波と2005年の地震のあと、罹災復興とリハビリのために 派遣された国際機関作業者ヴァンニ・プッチオーニが知った。 かれにそれを教えたのはカプシン修道会のヨハネス牧師だった。

かれはモディリアニの業績を跡付けることを決意して調査を開始し、Tanah Para Pendekar - Petualangan Elio Modigliani di Nias Selatan Tahun 1886 と題する376ページの大作をものした。インドネシア語のこの書はジャカルタで製作され、イタリア文化センターが発行者になった。

当時首狩りの風習をたっぷり残していた南ニアスに入り込み、調査を果たして無事に 文明社会に戻って来ることのできたモディリアニの前代未踏の業績は人類が持った多様 性に対する人類の知的好奇心のたまものだったと言えるにちがいあるまい。

プッチオーニによれば、ニアスから戻って来たモディリアニはその後スマトラ北部の バタッ Batak 族や母系制社会のエンガノ島の調査を行い、ニアスを再訪することはなか ったそうだ。モディリアニは1892年と1894年にTra i libri Batacchi (自由なバタッ族の間で) と Lisolla delle donne (女たちの島) と題する著作を出している。[完]

西祥郎著

9

「ヌサンタラのポルトガル人 (1)」 (2020年07月29日)



テジョ川(Rio Tejo 英語名はテイガス川 Tagus River) に向かって立っているアフォンス・ドゥ・アルブケルケ Afonso de Albuquerque の像はリスボン市内ベーレム Belem のアルブケルケ庭園にある。15世紀後半からアジアに向けて続々と出帆して行った船隊の旅立ちの出発点をアルブケルケの像は永遠に見つめ続けているのだ。

ポルトガル船隊は大西洋を縦断し、喜望峰を回ってイ

ンド洋を渡った。何カ月もかかる航海の末に、かれらはインドのゴア Goa に達し、更にマラッカ Malaka、そしてマルク Maluku のスパイス諸島にたどり着いた。

アルブケルケ庭園から北西に5百メートルほど離れたサンジェロニモ礼拝堂 Capela San Jeronimo で旅立つすべての船と乗組員にカトリック司教と国王が祝福を与えた。 1502年に建てられたその礼拝堂は今、考古学博物館と海洋博物館になっている。国 王マヌエル1世がヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama の東方航海に合わせて建てたものだそうだ。

海洋博物館 Museu de Marinha がオープンしたのは1863年で、国王ルイス1世の時代であり、ポルトガルの大航海時代の歴史がそこにたっぷりと集められている。この博物館にもアフォンス・ドゥ・アルブケルケの肖像画が飾られ、「1509-1515インド総督、オルムズ・ゴア・マラッカを基軸にしてインドにおけるポルトガル王国の基盤を築いた。

海洋政策を王国の発展センターに据えた先駆者。」という説明が添えられている。そ してポルトガル船隊がアジアから運んできたさまざまな物産もこの博物館に展示されて いる。 あるデータによれば、1500年から1635年までの間にアジアに向けて出帆した 船の数は912隻で、目的地に到着できた船はそのうちの768隻、目的地での用向き を終えて故国に帰還しようと出帆した船は550隻で、祖国の土を踏むことができた船 は470隻だったそうだ。

ポルトガルがアジアに向けて進出した動機は、単一ではない。ポルトガル人はそれを 三つにまとめて説明した。feitoria 通商、fortaleza 征服、igreja 宗教がそれだそう だ。つまり物産や富による支配、軍事力による支配、宗教による支配がその意味すると ころだろう。国威発揚が戦争と支配によって行われていた人類史の一ページなのであ る。

アフォンス・ドゥ・アルブケルケは第二代インド総督としてゴアに赴き、スパイス交易で当時最大の中継港だったマラッカを攻略するために自ら大型軍船15隻を率いて1511年7月初めにマラッカへの侵攻を開始し、翌8月10日にマラッカ王国を陥落させてしまった。続いてその年の12月に三隻から成るマルクへの船隊がアントニオ・ドゥ・アブリウ Antonio de Abreu の指揮下にマラッカを出帆する。フランシスコ・セハウン Francisco Serrao が中の一隻を指揮し、フェルノウン・ドゥ・マガリャエンス Fernao de Magalhaes (マゼラン) はこの遠征隊の一員として船隊の中にいた。

船隊はマラッカを出てスマトラ島⇒ジャワ島⇒バリ島⇒ロンボッ島⇒スンバワ島⇒フローレス島の海岸線をたどり、北上してバンダ島に達したのが1512年半ば。この遠征隊は更なる航海の任に堪えないと判断したアブリウはマラッカへの帰還を決断する。目的地とされたテルナーテ訪問は次の機会に譲ることにした。ところが皮肉なことが起こったのである。

フランシスコ・セハウンの船がアンボン湾まで漂流したあげく、そこで沈没したのだ。セハウンと乗組員を救出したのはアンボン島のヒトゥ Hitu 王国の民衆だった。セ

ハウンー行はヒトゥの賓客として遇せられ、更に一行の希望を聞き入れたヒトゥ王国が かれらをテルナーテに運んでくれた。

テルナーテのスルタンは一行を受け入れた。テルナーテが行っていた周辺諸国との間での地域覇権を争う戦争でポルトガル人の助力が大きな効果をあげた結果、テルナーテの優位が域内に確立されるようになり、セハウンはスルタンの公私にわたる助言者となって絶大な信頼を得、スルタン宮廷内での最大の実力者にのし上がる。このテルナーテとポルトガルの合作が、テルナーテ王国最大の敵、ティドーレ Tidore 王国にスペインとの合作を誘うことになり、四勢力が入り乱れての北部マルクの動乱へと発展していく。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (2)」 (2020年07月30日)

マゼランは南米南端を回って太平洋を西向きに進めばテルナーテにアクセスできるヒントをセハウンがマラッカ宛に送った手紙からつかみ、マゼランの世界周航という偉業の種が蒔かれることになった。

マゼランはポルトガル王が拒否したそのアイデアをスペイン王国に持ちかけて最終的に承諾させ、スペインの事業としてポルトガル人が総指揮官になるという異様な形式下にその壮途に就いた。マゼランが連れて行った多数のポルトガル人はスペイン人に入れ替えられたため、かれの航海はさまざまな障害に出会うことになる。

結局フィリピンまでたどり着いたマゼラン船隊は、地元セブ島の王が行っていた戦争に助力を与えることになり、マゼラン自身はその戦争の中で生命を落とした。残された船隊はほうほうの態で西への航海を続行し、何とかテルナーテまでやってきた。しかしポルトガルが握っているテルナーテ王国のセハウンと渡りを付けられる唯一の人間マゼ

ランはもういない。おまけに、その数カ月前にセハウン自身も、かれが東ジャワのグルシッ Gresik で船の修理を行ったときに娶ったジャワ人の妻とふたりの混血の子供を残して、世を去っていたのである。

そんな状況の中でスペイン船隊を拾ったのがティドーレ王国だった。こうしてティドーレとスペインの関係が築かれ、後にスペインがフィリピンを支配下に置くまで、スペイン軍はメキシコのアカプルコから遠路はるばるティドーレ支援(スパイスの土産は言うまでもあるまい)のために何度も派遣されてきている。

ティドーレ王国がマゼラン船隊を拾わなければ、マゼランによるスペイン船隊の世界 初周航が実現しなかった可能性は小さくないように私には感じられる。マゼランの大成 功を支えた要因のひとつに、この北マルクの地域内動乱が貢献していたことがもっと語 られてよいのではあるまいか?マゼラン船隊の惨憺たるありさまは、

「マゼラン世界周航五百年(5)」(2018年11月02日)

http://indojoho.ciao.jp/2018/1102_1.htm

「マゼラン世界周航五百年(6)」(2018年11月05日)

http://indojoho.ciao.jp/2018/1105_1.htm

に詳述されているので、ご参照ください。

1511年から1526年までの15年間、ヌサンタラの各地はポルトガル人にとっての重要な中継港になった。ポルトガル船は定期的にスマトラ、ジャワ、バンダ、マルクを目指して航海した。その間、インドネシアの各地にはポルトガル人が滞在し、かれらがそこで暮らしながら通商と布教を行うことでプリブミの生活にヨーロッパ文化の影響が混じりこむようになっていく。

ヨーロッパ勢力として初のポルトガル人が東インド諸島と呼ばれていたこの海域にやってきたころ、この諸島では林立する諸王国間の覇権争奪があくことなく繰り返されていた。その状況がヨーロッパ勢力の牙をその地に打ち込ませることに大いなる助力を与えたことは言うまでもあるまい。

ポルトガルがマラッカを奪取してマラッカ海峡を自分の池に変えたとき、東インド諸島一帯の地域交易を支配していたイスラム商人はマラッカ海峡をボイコットしてスンダ海峡からインド洋に出、スマトラ島西岸部を北上してベンガルやインドシナ地域に向かう航路を新設した。そのおかげで、バンテンとアチェという新興勢力が育まれることになった。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (3)」(2020年07月31日)

ジャワ島では、ヒンドゥブッダ文化のスンダ王国が東に興ったイスラム王国⁷からの 侵略を受けて苦境に立たされており、ポルトガルマラッカと軍事同盟を結ぶことは相互 にメリットのある話だった。軍事同盟を結ぶことが通商関係を深化させるのは当然過ぎ る話だろう。

ましてや昔のマラッカの賑わいの一部が、通商路が変化したことでバンテンに移った のなら、ポルトガル人がバンテンでの交易に参加し、あわよくばそこを支配下に組み込 むことで得られる富を最大化させようと皮算用するのも無理はあるまい。

ジャワのイスラム勢力が指をくわえてそれを見ているわけがない。ドゥマッ Demak と チルボン Cirebon のイスラム連合軍が大軍を海路バンテンに向けて進発させ、バンテン

_

⁷ Demak 王国。

港とその後背地をスンダ王国からもぎ取ったのは、当時の政治軍事情勢に対して最大の 効果を発揮する戦略だったにちがいあるまい。

あるいはスマトラ島では、ラムリ王国の辺境の地でしかなかったアチェがその支配下から脱して新興中継港に躍り出た。昔はラムリが中継港の位置を占めていたのだが、イスラム通商ルートがマラッカ海峡ボイコットによってスマトラ島西岸に移って来たことから、そのルート沿いにあるアチェに棚ボタ効果が降って来たのだ。

国力を強めたアチェは南に向かって支配権の拡大に取り掛かる。現在のアチェダルッサラム特別州であるスマトラ島北端部を伐り従えたアチェは続いてバタッ Batak 族の北スマトラ州とミナンカバウ Minangkabau 族の西スマトラ州へと南下して行く。それに対抗するために、バタッもミナンもマラッカのポルトガル人に軍事支援を求めた。

北マルクと同じようなことがヌサンタラの各地で展開されたことになる。問題はポルトガルがヨーロッパのマイナーな国でしかなかったことだ。至る所からポルトガル人に 軍事支援の話が持ちかけられたにもかかわらず、かれらはそれらの要請に逐一応じられるだけの余力を持っていなかった。つまりは、スンダ王国も滅亡し、バタッやミナンカバウもその後、それぞれの領土を蚕食された上に通商支配権をアチェに握られてしまう時期を余儀なくされたのである。

ともあれ、地元プリブミの世界でそのような状況が起こっている一方で、マラッカからやってくる宣教師や兵士、あるいは商人などの集団は各地に取りついて一時期を過ごし、地元民の暮らしの中に混じりこんだ。アチェとポルトガルマラッカが敵対関係にあり、戦闘が頻繁に起こったものの、ゴアからポルトガル使節がアチェを訪れたこともあれば、ポルトガル商人がアチェの町に住み着いて物産買付を行っていたこともある。敵民族は見つけ次第皆殺しという現代感覚とは異なる空気が昔は流れていたようだ。国家

主義民族主義下の民族団結が成立するための社会条件がきっとまだ確立されていなかった時代なのだろう。

異文化間の接点で相互の言葉が影響し合うのは自然なことだ。既に上で挙げたポルトガル語 igreja (教会) はグレジャ gereja となってインドネシア語に入り込んでいる。 教会へ行く日である日曜日は domingo というポルトガル語が Minggu というインドネシア語を生んだ。

1970年代に駐インドネシアポルトガル大使を務めたアントニオ・ピント・ダ・フランサ氏が在任期間中に調査してまとめた「インドネシアにおけるポルトガルの影響」と題する書物には、歴史の中でポルトガル人がインドネシアに持ち込み、残したものがいろいろ取りまとめられている。

トマト・キャッサバ・セロリ・レタス・唐辛子・パイナップル・パパヤ・サツマイモ などはポルトガル人がブラジルからヌサンタラに持ち込んだものだ。「続く〕

「ヌサンタラのポルトガル人 (4)」 (2020年08月01日)

言語もそうだ。16世紀にはヌサンタラの各地でポルトガル語がリングアフランカのひとつになった。いや、もっと広く東南アジアでの、と述べても過言ではあるまい。オランダ人がヌサンタラにやってきた初期のころ、各港で有利な交易を行うためにかれらはポルトガル語を学ばなければならなかった。バタヴィアは最初から人種のるつぼとして建設された町であり、18世紀ごろまでバタヴィアでのリングアフランカはムラユ語とポルトガル語が使われていた。オランダ語はオランダ人が関わっている場でしか使われなかったようだ。

だからたくさんのポルトガル語彙がヌサンタラ居住民の語彙の中に浸透した。氏は80個近くのインドネシア語を確実にポルトガル語源だと見なしている。その一方で、面白いことに、インドネシア語のBelandaというオランダの国名がポルトガル語 Holandaに由来しており、またインドネシア語 Inggris というイギリスの国名も Inglez というポルトガル語に由来しているという定説をかれは確信が持てないとしている。

理由が書かれていないので同氏の見解が分からないのだが、日本語のオランダもイギリスもポルトガル語源が定説であるという話を聞いたら、かれはどう反応するだろうか?インドネシアではオランダの国名が

Holanda→Olanda→Wolanda→Bolanda→Belanda と変化した

とされており、最初の Holanda はポルトガル語だというのが定説になっている。

同じポルトガル語彙がインドネシア語になり、また日本語にもなったと見られるものがいくつかある。

ポルトガル語 ⇒ インドネシア語 : 日本語

bolo ⇒ bolu : ボーロ

caldeira ⇒ kaldera : カルデラ

sabao ⇒ sabun : シャボン

tabaco ⇒ tembakau : タバコ

veludo ⇒ beludru : ビロード

インドネシア語の大砲 meriam がポルトガル語源であるのは有名な話であり、その語がマリアのアラブ語マリアムを強く連想させるために、大砲を撃つときにポルトガル人がマリアの言葉が入った何らかの句を叫んでいたのではないかということが推測されて

いた。フランサ氏もこのインドネシア語は戦争時にポルトガル人が行った雄叫び por Santa Maria に由来しているのではないか、と推測している。

何世紀も昔にポルトガル人が足跡を印した地方を巡って祖先が残した遺産が地元文化にどれほど生き残っているかについて調査したフランサ氏のこの論文からわれわれは、ポルトガル人がそれぞれの地方にどれほど深く関わったかということを知ることができそうだ。

それはたとえば、それぞれの種族語/地方語の中に残っているポルトガル語源の単語 の多さにも出現する。氏が挙げている語彙数は次のようなものだ。

ブタウィ	2
中部ジャワ	4
アンボン市内	7 7
アンボン市外	3 6
スラウェシ	2 7
フローレス	223

ブタウィの中にカンプントゥグ[®]は含まれていない。トゥグでは最初からポルトガル語がコミュニティの日常言語になっていたのだから、それを収録すれば辞書が一冊できあがる。

ただし現代のトゥグは種族色の消滅したインドネシア社会に変質しており、非ポルトガル系住民の大海にポルトガル系子孫の海流が混じっているようなありさまになっている。かれらはインドネシア人としてのアイデンティティを強く持ってインドネシア社会

⁸ タンジュンプリオク港の南東に位置する古い集落。クロンチョン発祥の地といわれている。

の一部になりきっているため、かれらの祖先たちが使っていた言葉を使える人間は現在 ほぼいなくなっているのが実態のようだ。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (5)」 (2020年08月02日)

またスラウェシについても、歴史を見るかぎりその地へやってきたのはポルトガル人だけでなくポルトガルの文化を濃く受容したテルナーテのプリブミが大勢混じっていたわけで、おまけにポルトガル人がヌサンタラから引き揚げた後もテルナーテ人とマカッサルとの交流が消滅したわけでもなく、そういう長い時間のレンジと核から広がった周辺部分の動きを視野に含めるなら、マカッサルやマナドとポルトガル人の関わりを語彙の数で評価することは困難になる。

ならば、ポルトガル系の姓を名乗る人間がインドネシア人として各地に暮らしている ことを、そのかかわりを示す別の要素と受け止めるのはどうだろうか。氏の調査報告に よれば、その様相は次のようになっている。

南スマトラ	1
バンテン	1
アンボン及びスラウェシ	2 7
フローレス	4 9

ちなみに政府教育文化省の北ジャカルタ市トゥグにおけるポルトガル文化に関する説明(2018年)を読むと、インドネシア共和国成立直後のトゥグ村には150戸およ

そ1千2百人が居住し、25の姓で構成されていた。しかし今現存しているのは6姓で、アンドリース Andries、コルネリス Cornelis、ミヒュールス Michiels、キーコ Quiko、ポルトガルとドイツ混流のブロウネ Broune、ポルトガルとアンボン混流のアブラハムス Abrahams がその内容だ。

フランサ氏が他地方で使ったと同じ手法でこの実態に対処するとき、この中にポルト ガル系の姓だと識別できるものが果たしてどれだけあるだろうか?

く バンテン >

フランサ氏は、イスラム化したバンテンにポルトガル人が多数居住していたと書いている。ポルトガル人はバンテンのスルタンと契約を結び、商館開設の許可を得た。後になってスルタンは要塞を建てるようポルトガル人に要請したという話もあるが、真偽は不明だ。要塞建設場所は後にオランダが要塞を建てた所だったそうだ。ポルトガル人は毎年やってきて、少なくとも数十人が次の来航までそこに留まった。

フェルノウン・メンデス・ピント Fernao Mendes Pinto の書き残した記録によれば、 1546年1月に東ジャワのパスルアン Pasuruan に進軍するバンテン軍にポルトガル 人も40人加わるように、との命令をスルタンが出した。これは義兄弟にあたるドゥマッのスルタンがイスラム化していないパスルアンを征服するために行う出兵だったそうだ。しかしその戦争は失敗し、パスルアンは陥落せず、反対に同盟軍に加わったスラバヤスルタンの王子がドゥマッスルタンの生命を奪い、イスラム軍は解散することになる。現代インドネシアでその事件は仕組まれた陰謀だったと解釈されているが、ピントはそこまでの推理を行っていない。

1596年にハウトマン率いるオランダ船隊がバンテンにやってきて、スルタンと契約を結んだ。ポルトガル商館の命運は尽きることになる。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (6)」 (2020年08月03日)

く ジュパラ >

マタラム王国スルタンの支配下にあった中部ジャワ州ジュパラでは、1600年から 1640年まで多数のポルトガル人が滞在して栄えていた。その間ドミニコ会が布教と 宗教行事を行い、また1632年にはポルトガル要塞が建設されて軍隊が駐屯した。この要塞はクリン郡ウジュンワトゥ村の海岸にあり。、東縁33.5メートル、西縁37メートル、南縁28,5メートル、北縁20.3メートルの不等辺四辺形で、城壁は既 に朽ちていて南だけが高さ2.1メートル、他の面は70センチほどしか残っていない。残っている部分は依然として強固なままであり、砲座が海をにらんでいる。



1638年に東ヌサトゥンガラの ソロル Solor への赴任途上にあった フラーテル・マヌエル・ドゥ・サン タマリアの乗っていた船がジュパラ 港で沈没した。時のマタラム王スル タン・アグンはフラーテル・マヌエ

ルがジュパラの町に教会を建てて宗教活動を行うことを許した。フラーテル・マヌエルはスルタン・アグンに対し、バタヴィアでオランダ人に迫害されたカトリック教徒が逃れてきたらそれを受け入れ、あるいはかれらの行きたいところへの通行の自由を保証してほしいと求め、スルタン・アグンはそれも承認している。ところが1641年にオランダがポルトガルマラッカを陥落させて領土を奪いポルトガル人を追いはらったことで、スルタン・アグンにとってのポルトガルの価値は消滅してしまった。ジュパラもポルトガル人にとって安泰な土地でなくなっていく。

⁹ Ujungwatu, Donorojo, Jepara 6.403457S 110.918041E

く パナルカン >



ジャワ島東端の港町パナルカン Panarukan にもポルトガル人のコロニーができた。 1560年にドミニコ会がそこでの活動を開始している。ゴアのインド総督はこの地におけるミサのために、毎年ワイ

ンを1トン送って来ていた。1580年、地元為政者がポルトガル人に居住と交易活動 のための土地を与えている。だがここも最終的にイスラム勢力に屈したために、ポルト ガル人は居場所を失ってしまうことになる。

く バンジャルマシン >

テルナーテとマラッカ間の航路発見は最初フローレス諸島の東端から北上するルートだったが、テルナーテから北上してカリマンタンを通過する航路が発見されるにおよんで、この近道を取る方が好まれるようになった。ポルトガル船はカリマンタン島の北を回ってブルネイを中継港にし、あるいは南を回ってバンジャルマシン Banjarmas in を中継港にした。

バンジャルマシンにはポルトガル人コミュニティが作られた。イエズス会の牧師は地元スルタンから内陸部に入る許可を得て、6年かけてダヤッ Dayak 族への布教に励んだ結果、3千人をカトリックに受洗させたという記録が残されている。

く マナド >

スラウェシ島北端の地マナド Manado には、テルナーテのフランシスコ会からたくさんの布教者がやってきた。かれらは地元諸種族の首長と部下たちをカトリック教徒にしている。テルナーテとミナハサ間の交通は、こうして密度を増した。

昔、ヨーロッパ人がスラウェシ島の名称としたセレベス Celebes はポルトガル語源だったという説がある。ニコラ・デリオン Nicholas Desliens の 1 5 4 1 年製作の世界地図に描かれているスラウェシ島北端の名称が Ponta dos Celebres となっており、それが後にこの島全体の名称にされたというものだ。北スラウェシの海は難船事故が多い所として有名だったために、世界地図にそのように記載されたと考えられている。

ミハナサのケマ村から遠くない小島のひとつに、ポルトガル人の墓地があるという話もある。ミナハサにはポルトガル系の姓を持つ者も目立つし、地方語の中にもポルトガル語源と思われる語彙が見受けられる。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (7)」 (2020年08月04日)

く マカッサル >

スラウェシ島ではマカッサルとブギス Bugis 族の国々がポルトガル人の優先目的地になった。最初の訪問が行われたのは1525年だ。ポルトガルが前進基地を置いたテルナーテとマカッサルの交通が盛んになり、1536年にはブギス族の兄弟が洗礼を受けるためにテルナーテにやってきた。ふたりに洗礼を与えたのはテルナーテ行政長官(カピトゥン)アントニオ・ガウヴォン Antonio Galvao で、ふたりにアントニオ・ガウヴォンとミゲウ・ガウヴォンの名を与えている。

マラッカは1544年にアントニオ・ドゥ・パイヴァをマカッサルに派遣して白檀の木を探させたとき、マカッサルの北にあるスパ Supa 王国の王をパイヴァはカトリック教徒にした。プリブミの王侯たちから平民までを対象にして布教活動は熱心に行われ、カトリック教徒は増加した。

マカッサルは徐々に力を付けて域内の有力勢力にのし上がり、周辺諸国への商活動に加えてカトリック布教のセンターになる。それに対抗するかのようにイスラム布教も強まり、ゴワ Gowa の王は 1 6世紀初めにイスラム化した。とはいえ、この地域での宗教の自由は守られていたため、それぞれの信徒は自由な環境下に共存していた。ポルトガル人ももちろんその風の中にいた。

ポルトガル人はマカッサルに商館を持った上に、マカッサルの王がパナクカン Panakukang に要塞を作るように勧めた。この王はポルトガル語を話し、また読み書き さえできたが、1638年にかれの王子がその後を継いだ。この王子は父親に輪をかけ たようなポルトガルびいきで、ヨーロッパの歴史や現代事情を熟知し、ヨーロッパで作られる世界地図のコレクションが趣味だった。

1641年にポルトガルマラッカが陥落したとき、一大恐慌が各地のポルトガルコミュニティを襲った。マラッカから逃れたポルトガル人とムラユ人カトリック教徒の大集団が手を携えてマカッサルまでやってきた。その中にはマラッカ教会の司教と教団も混じっていて、かれらはマラッカの教会で使われていたさまざまな聖具を携えて来た。

1651年にマカッサルにいたカトリック教徒は3千人に達したそうだ。マラッカから来た教団、マカオのフランシスコ会、イエズス会の地域指導部、マラッカ風の組織になったドミニコ会のそれぞれの教徒の合計がそれだ。

マカッサルのカトリックコミュニティでの最有力者は王の姉妹のひとりと結婚したポルトガル商人フランシスコ・ヴィエイラ・フィゲイレドだ。かれの妻になった王の姉妹は以前からカトリック教徒になっており、ドナ・ジャシンタ・ダ・コスタの名をもらっていた。その妻が没したためにフィゲイレドは王のカトリック教徒になっている別の姉妹ドナ・カタリナ・ドゥ・ノロンヤを後妻にした。

オランダは1660年、マカッサルに支配の手を伸ばし、ポルトガル要塞を奪取して マカッサル王に条約を受け入れさせた。すべてのポルトガル人をマカッサルから追放さ せることがその中の一項に記されていた。マカッサル王は不承不承それを呑んだため、 ポルトガル人はマカッサルを去ることになる。

2千人のポルトガル人と多数のムラユ人カトリック教徒は新たな居住地を求めてマカオに、シャムに、そしてフローレス島のララントゥカ Larantuka へと旅立った。ララントゥカへ向かった一行のリーダーになったのはフランシスコ・ヴィエイラ・フィゲイレドで、ドミニコ会聖職者のひとりルカス・ダ・クルズ Lucas da Cruz が宗教面の指揮を執り、いくつかの聖具を運んで行った。フローレス島東部の数カ所にある教会には、そのときに運ばれた聖具とおぼしいものが今でも置かれている。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (8)」 (2020年08月05日)

く テルナーテ >

フランシスコ・セハウンがテルナーテの土を踏んだのは1512年で、1521年に マゼラン船隊がテルナーテ海域に姿を見せる前にかれは没した。最初北マルクの諸島で はテルナーテとティドーレが二大勢力を構え、他の域内諸国は合従連衡の中で揺れてい

 た。ポルトガル人の登場はテルナーテとティドーレの双方に、通商上のみならず域内覇権争奪の戦いの面でも大きな期待を抱かせた。テルナーテにやってきたセハウンにティドーレも誘いをかけたようだ。結局セハウンはテルナーテ側に付いた。

当時のテルナーテもティドーレも、王は既にイスラム化していたが、ティドーレのスルタンの方が信教の自由に寛大な姿勢を執り、テルナーテのスルタンはその点で狭量だったようだ。カトリック布教の面から見れば、セハウンはティドーレに移った方が良かったかもしれない。

マゼラン船隊の出現でポルトガルの威勢は減退した。威勢ばかりか、現実の力関係に も影響が及んだ。スペイン+ティドーレ連合はまだ潜在性でしかなかったが、現実化す る日が来るのは目に見えていた。その結果テルナーテスルタンが勧めていた要塞建設 に、ポルトガル人はいそいそと取り掛かった。

テルナーテのスルタンタバリジ Sultan Tabariji はポルトガル人カピトゥンのヴィセンテ・ダ・フォンセカ Vicente da Fonseca とそりが合わず、ことごとにいがみ合った結果、ポルトガルの敵と決めつけられて 1 5 3 6 年にインドのゴアに強制連行された。フォンセカは空席になった王座にタバリジの異母兄弟であるスルタンハイルン Sultan Khairun を就かせた。

スルタンタバリジはゴアでカトリックに改宗し、ドン・マヌエル Dom Manuel の名を与えられた。かれは更に洗礼の代父になった貴族ジョルダン・ドゥ・フレイタス Jordao de Freitas にアンボンの地を進呈したので、帰郷してよいとの許しを与えられた。しかしかれは帰郷途上にマラッカで病没した。

かれが残した遺言書の中にテルナーテの王位をポルトガル国王に譲ることが記されて あったものの、ゴアのインド総督はその遺言を拒否し、ジョルダン・ドゥ・フレイタス を牢に入れ、テルナーテの王位にはスルタンハイルンが就くことを再確認している。

く アンボン >

テルナーテを含むマルク全体のカトリック布教のために、多数のポルトガル人布教者がやってきてあちこちに住んだ。しかし組織立った布教活動が行われるようになるのは、フランシスコ・ハヴィエル Francisco Javier(ザビエル)の到着する1546年を待たなければならなかった。

ザビエルはセラム Seram やヌサラウッ Nusa Laut の島々まで精力的に巡遊し、テルナーテの王妃や民衆をカトリック信徒にしたが、スルタンハイルンを帰依させることはできなかった。ハイルンはザビエルにこう語ったそうだ。「神父、わたしがカトリックにならなかったことを気に病むことはない。われわれの神は同じものなのだから、われわれば必ず天国で再会するであろう。」

翌年マラッカに戻ったザビエルはマルクのイエズス会の礎石を作り上げた。1557年にアンボンでは9つのカトリック教団が活動し、テルナーテは別にしてアンボンで2万人、モロで2万人の信徒を擁する状況になっていた。

1562年、アンボンに初代カピトゥンが置かれてアントニオ・パイス Antonio Pais が初代の長官になった。1569年、ヒトゥに交易所が設けられ、アンボン湾の向かい側にハティウィ Hatiwi 要塞が建設された。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (9)」 (2020年08月06日)

1572年にアンボンのカピトゥン、サンショ・ドゥ・ヴァスコンセロス Sancho de Vasconce los がアンボン市内に要塞を作り、要塞の中には教会が三つ建てられた。15

75年、アンボンカピトゥンの甥がテルナーテのスルタンハイルンを殺害したため、ハイルンの皇太子がテルナーテ人を率いてアンボンの要塞を攻撃し、要塞は破壊された。 殺害犯人はゴアまで逃げたが、リスボンのポルトガル国王がテルナーテで裁きを受けさせるよう命じたため、手鎖を付けて海路テルナーテへ連行された。しかし護送途中のジュパラで闘争が起こり、犯人はそこで殺された。

この事件はどうやら、テルナーテから悪辣なポルトガル人が追放されたことに関連しており、その悪辣な一派は1578年にテルナーテの敵であるティドーレに入り込んで要塞を作り始めた。もちろんティドーレのスルタンと渡りをつけて行われたのは間違いがない。

しかしそのごたごたは長続きすることなく終わってしまった。1601年、オランダはヒトゥのハティウィ要塞を奪取した。1605年にはアンボンとティドーレの要塞も陥落して、ポルトガルのマルク防衛軍はオランダVOC軍に降伏してしまう。

オランダ人からポルトガル人への降伏勧告の中には宗教の自由を保証する一項が入っていたものの、実態は大違いであり、アンボンの支配権を手に入れたオランダは重要政策のひとつとしてアンボン人のプロテスタントへの改宗を強力に推進した。その結果、ポルトガル人の布教によってカトリック教徒になったひとびとの子孫で、今日いまだにカトリックであるという人間は存在しなくなった。

アンボンの町から去る意志をまったく持たずに最後まで残っていた32家族のポルトガル人はその強制に耐えかねて終に町を去ることを決意したが、かれらはアンボン島から出ず、ソヤ王がかれらに与えた山中の土地を目指して去って行ったという話が残されている。

しかしかれらは何代も世代を重ねる間にその地の地元社会の中に溶け込んで、最終的にはすべての家族がプロテスタントに改宗して今日に至っているそうだ。

く ヌサトゥンガラ >

ヌサトゥンガラへのポルトガル人の初来航がテルナーテを目ざすアントニオ・ドゥ・アブリウ船隊の寄港だったことは上で述べた。それ以来ポルトガル船は頻繁にこの島嶼部に寄港して、水や新鮮な食糧の供給源として利用し、加えて白檀の調達も行った。東ヌサトゥンガラを構成する四大島のひとつフローレス島は花を意味するポルトガル語に由来しているというのが定説になっている。元々はポルトガル人が島の東部を cabo de flores と呼んだことに端を発しており、1636年にオランダ人(VOC)が島全体の名称としてFlores と呼ぶことを決めた。

しかしわれらがレミ・シラド氏は例によって、「Flores をみんなが花に結び付けているのだが、その語源が floresce, florescer, floresta のどれであったのかをいったい誰が立証できるというのか?その最後の語彙でなかったことを誰が証明できるのか?」と世の常識なるものへの安住をいましめる言を放っている。

1522年にはカトリック布教者がティモールやソロルに何年も滞在して大きい成果をあげている。1561年にマラッカ司教はドミニコ会宣教師4人を派遣して、恒久的宣教組織を現地に作らせた。

1566年、アントニオ・ダ・クルズ神父はマカオからの寄金を元に、ソロルで要塞の建設を開始した。イスラム界はジャワで既に強い勢力を築きあげ、またスラウェシでは強力な布教活動を行っている状況から鑑みて、かれらがソロルに矛先を向けて来たときの安全保障に、というのがその要塞建設の目的だった。

要塞の中には教会が四つ作られ、要塞の防壁沿いに地元民が集まって来て居住した。 この要塞の軍事力はすべてが傭兵で賄われた。要塞防衛軍司令官も傭兵であったが、さ すがに司令官の人選だけはマラッカの承認を得なければならなかった。

1577年にヌサトゥンガラのカトリック教徒は5万人に達している。アントニオ・ダ・クルズ神父はララントゥカの町の外に神学校を設けた。1596年には50人の生徒がそこで学んでいる。その同じ1596年にはエンデ Ende で要塞が建設された。要塞の中には教会が三つ作られている。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (10)」 (2020年08月07日)

ポルトガル人の居留が始まると、シッカ Sikka とララントゥカの王族は学習のために マラッカへ送られ、カトリックに入信すればドンの称号の付いたポルトガル貴族の姓を 与えられた。その子孫は現代までその姓を名乗り続けている。

1613年にオランダはムスリム勢力と連合してソロル要塞を陥落させたため、ポルトガル人はララントゥカに逃れた。1629年にオランダの占領軍司令官が脱走してララントゥカに入り、カトリックに改宗してポルトガル側に付いた。それからほどなく、オランダ軍はソロルから撤退した。ソロルには商業価値のある物産が何もないことが明白になったため、ソロルの占領は無意味だと判断されたからだ。

1630年にソロルのポルトガル要塞は回復され、12人の宣教師が新たに到着した。しかしエンデではポルトガル防衛軍の暴動が発生したため、宣教組織は崩壊した。 エンデで起こったその暴動というのは、傾城の美女がからんだできごとだったように伝えられている。

フローレスでよく知られた伝説によれば、要塞防衛軍司令官がフローレスの美少女に 心を奪われた。しかしこの娘は神父のひとりを恋慕していた。嫉妬心から、司令官はそ の神父が娘に言い寄っているのだと地元民と軍内に言いふらした結果、教団と神学校生 徒に対する虐殺へと発展した。事件の展開に恐れをなした娘とその家族は別の地方へと 逃れたが、娘は生きる気力を失って死んでしまった。この娘の墓は多数のフローレス島 住民にとって、参詣するべき場所になっている。しかもどうやら、異なる部族が異なる 場所をその娘の墓としているようだ。

1636年、ソロルの宣教組織はソロルでの活動を永久放棄することを決め、全員が ララントゥカに移住した。1660年、ララントゥカにたくさんのポルトガル人家族が やってきた。フランシスコ・ヴィエイラ・フィゲイレドの率いる、マカッサルを追われ たポルトガル人たちだ。かれらは先にマラッカから逃れてここに来ていたひとびとと合 流し、ララントゥカ、コガ Konga、更にアドナラ Adonara 島のヴレ Vule に居住地を広 げて行った。地元民はそれらを Kampong Malaio (カンプンムラユ) と今でも呼んでい る。

1679年の記録では、その地方で活動している宣教師は15人になっている。既に 長期にわたってこの地方に対する組織的なミッショナリー活動推進は途絶えてしまい、 政治的軍事的な後ろ盾を持たない個人の動きだけになっていた。

ある場所では、二十年間たったひとりの神父が宗教活動を行っていただけで、かれが 没した後は二十年間神父不在の場所になり、そしてまたやっとひとりの神父がやってく る、という状況だったそうだ。

そのような時期にやってきた神父はたいていひとりの軍人がガードとして随行した。 階級は軍曹レベルだった。軍人は神父の身辺の安全警備を任務にして、神父に付かず離 れずの保護を与え続けた。軍人は聖職者でないから妻を持つ。地元の女性を妻にして、 最終的にその子孫が地元民として今日まで続いている家系が、この地方には少なくな い。言うまでもなく、かれらはポルトガル系の姓名を名乗っている。

1856年、オランダとポルトガルが条約を結んだ。それによれば、ポルトガルがララントゥカー帯の領有権を含む一切の権利を放棄する条件として、その地方に築き上げられた人間を含むカトリック文化の維持保存、つまり地元民の信教の自由を侵さないことにオランダ側が責任を負うという合意だ。

その内容はポルトガル側が地元民に徹底的な情報公開を行った。ディリ Dili のカピトゥンロペスがシッカ王に書簡を送って、事の成り行きに関する詳細な説明を与えているのがその一例だ。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (11)」 (2020年08月08日)

フローレス島東端に位置するララントゥカの東側に連なるアドナラ島。マラッカがオランダに征服されたためにマカッサルに落ちのびたポルトガル人やムラユ人らが、オランダが更にマカッサルを支配下に置いたために再びララントゥカへと落ちのびて行ったことは先に触れた。

既にポルトガルのコロニーになっていたララントゥカが突発的な人口増を受け入れきれなかったのは明白で、かれらは周辺諸地域を開拓してコロニーを増やして行った。そのひとつがアドナラ島のウレ Wure 村だ。だからこの村はアドナラ島原住民の村と違っている。

住民の中には、ダ・コスタ、フェルナンデス、ドゥ・ロサリなどポルトガルの姓を持つ人たちがいる。たいていはポルトガル人がマラッカで地元民女性に産ませた子供の子孫であり、かれらはポルトガル人とムラユ人の遺伝子を受け継いでいる。いや、もっと複雑であるのかもしれない。

かれらとフローレス人を自称する地元アドナラの人々との外見的な違いはほとんど見つけることができない。黒っぽい肌の色、黒い直毛や縮れ毛の頭髪。かれらがポルトガル人と呼んでいるマラッカ住民だった先祖が既に、アフリカやインドやムラユとの混血者であった可能性はきわめて高い。オランダ人はかれらを純血ポルトガル人と区別してブラックポルトガル Zwart Portugezen と呼んだ。

ポルトガル人が政治的宗教的な目的を遂げるために航海で訪れた先の各地でメスティーソ作りに精を出したことは、セックスもしくは生殖がそれらの目的達成のための効果的な手段であるとかれらが見なしていたことを赤裸々に示すものとえることができる。

自分と家庭を作った女、そして自分の子供たち。かれらにポルトガルの国益へのオリエンテーションを注入することで、それらの土地におけるポルトガルへの傾倒が促進されて行く。これはまるでSF並みの構想ではあるまいか。

「わたしらはこの島の住民ですが、アドナラの地元民じゃありません。わたしらはアドナラ語を使わず、ムラユ語で生活してます。わたしらの先祖はマラッカのポルトガル人で、17世紀にここへ移って来たのです。だからアドナラやフローレスの慣習であるブリス belis をわれわれは行いません。わたしらの婚姻プロセスはもっと簡素で、西洋人のやり方のほうに近いですよ。」東フローレス県西アドナラ郡ウレ村の村長ヨセフ・フェルナンデス氏はそう述べた。

ブリスとは結納のことで、婚姻儀式の前に果たされなければならないことがらだ。東ヌサトゥンガラでは一般的に、女性の側が男性の側にブリスの内容を決めて要求する。果たせなければ婚姻はお流れになる。アロル島ではモコと呼ばれる銅鼓、マウメレでは巨大な象牙、スンバではマモリ/マムリと呼ばれる装身具などがブリスとして使われる。

ウレ村の長老のひとりが物語ったかれらの祖先の縁起譚はゴンザレス王に関わる伝説だった。17世紀はじめごろ、ポルトガルのコロニーだったマラッカがオランダ人の侵攻で陥落し、ゴンザレス王とそれに従う1千人の民衆がオランダ人の捕虜になるまいとしてシンガポールに逃れた。その1千人は軍人・宗教者・商人をはじめさまざまな階層と職業から成っていた。

10隻の帆船とコラコラと呼ばれる櫂漕ぎ木製ロングボート5隻でシンガポールまで達したものの、オランダ人の追跡が続いたために再びマカッサル、そしてアンボンへと逃れた。しかしそれらの地も安泰でなく、最終的にフローレス島までやってきた。そしてひとびとは1603年にアドナラ島西海岸部にあるウレに定住した。

ウレを見出したゴンザレス王とひとびとはその地を気に入り、そこに自分たちの生活 基盤を建設した。村を作り、教会を建て、生きて行くための活動に便宜をはかった。何 世代も経過したあとの今日、この村の住民はウレ族と呼ばれてアドナラ人と区別されて いる。現在のウレ族はたいていが漁民であり、また一部はコプラ・コーヒー・カシュー ナッツ農民になっている。

この話は史的事実と合致しない部分がある。ポルトガルマラッカの陥落はもっと後なのであり、17世紀はじめにゴンザレス王がマラッカを逃げ出す必要はまるでない。更にポルトガルマラッカの最高執政官はカピトゥンであり、マラッカカピトゥン名簿の中にゴンザレスという名前の人物は見当たらない。ましてやカピトゥンを王と表現する神経がマラッカ生活者たちの間にあったのかどうか?

住民の姿を目にするかぎり、ウレ族がフローレス人と違っている印象は特にない。違いが顕著に見受けられるのは、宗教上の慣習だ。ポルトガル人が行ったセマナサンタの 儀式はララントゥカで継続的に行われている一方、ウレでも同じ儀式が独自に行われて いる。ウレの教会や礼拝所の名称も、カペルセニョール、カペルクルスコスタ、グレジャサンドミンゴのようにポルトガル語が使われている。

だがウレ族の日常生活からポルトガル風生活習慣の香りは希薄になっている。ウレ村 長の話によれば、19世紀に大幅に減退したのだそうだ。ポルトガル系の子孫だと自認 するひとも、今では7百人ほどしかいない。[続く]

「ヌサンタラのポルトガル人 (終)」 (2020年08月09日)

フランサ氏は中部フローレスのマウメレ Maumere を訪れて、現存するシッカ王に面会した。インドネシア共和国には、独立以前に各地を支配していた王たちが大勢存在する。かれらはいまだに王統の系譜を守り続け、第何代目の王という形で先祖伝来の一族の資産である王宮に暮らしている。だが、共和国独立時に領土領民をインドネシア共和国に提供したかれらに、住民に対する支配権はない。かれらはただ、誇るべき王家という家系を維持するために王位に就いているのである。

シッカ王ドン・センティス・アレイス・ダ・シルバ Dom Sentis Aleixu da Silva は 先祖がカトリックに入信して以来ポルトガル人にもらったさまざまな衣装とシンボルを 身に着けてフランサ氏と対面した。それらは何百年もの間、相伝されて来たものなの だ。

1607年の年号が記された黄金の兜、大粒の黄金球を繋ぎ合わせたネックレス、支配者の象徴である黄金の指揮杖。王家一族の宮殿であるその屋敷には、象牙で作られた子供姿のキリストの像が置かれている。

シッカで祝われるクリスマスは、ポルトガル文化そのものだ。朝からポルトガル語の 芝居が上演される。フランサ氏がもらったその脚本は、全編がポルトガル語になってい るのは疑いようがないのだが、正しいポルトガル語表記から外れている綴りの単語や、 あるいは文全体がブロークンなものになっていて、意味がつかめないものなどが入り混 じっている。

数百年間、何世代にもわたって継承されて来た芝居のセリフに文化的な癒着が起こったことは想像にあまりある。長期に渡ってポルトガル人がやってこなければ、言語が崩れても修正されることがない。だがそんな枝葉のことよりもっと重要なのは、シッカの民衆がポルトガル文化をうち捨てることなく、伝統として維持し続けていることだ、とフランサ氏はこの事実を受け止めている。

芝居の内容は、ひとりの娘がどのような男を夫に選ぶべきかということを風刺的に描いたものだ。娘を妻にと申し込んでくる男たちが入れ替わり立ち代わり登場する。画家・貴族・船乗り・酔いどれ・金細工師・ギャンブラー・王子・・・娘は最後にやってきた商人を夫に選ぶ。「楽しい人生を送るために、わたしはお金を持っているひとの妻になるのよ。」が幕閉めのセリフだった。

シッカ王の王位継承が行われるとき、民衆はひとつの長い決まり文句を口にする。 Viva Altissima Senjhor Don Alexius Alexoe Ximones da Silva El Rei sei boa saudi El quam Deus nosa Senjhor de longa wida permanosa El Rei reinjho da Sikka. Da blaixo de Lisboa.

フランサ氏はこれを、リスボンのポルトガル王がシッカ王に宛てて書いた手紙の一節ではないかと推測している。一生の間に何度も起こるわけでない王位継承儀式の際に口にするために、民衆はその文句を覚え込むようだ。

ララントゥカやアドナラでも、フランサ氏はたくさんのポルトガル文化の遺産を見出している。16~17世紀にかけての150年間にひとつの勢力としてアジアにやってきたポルトガル人が、アジアにとって初めての西洋文明をもたらした。そんな形で始まった西と東の融合が、数百年かけてひとつの遺産を作り出した。

しかもポルトガル人をヌサンタラから駆逐したオランダ人が、ポルトガル人が植え付けたものを徹底的に消滅させようと努めたにもかかわらず、それらの疾風怒濤の数世紀を越えた今日、われわれの目に映っている姿はこのようなものなのであり、それは文化を仲介にした人間同士のつながりが産み落とした遺産であるとフランサ氏は論説を締めくくった。

「完]

「ヌサンタラのフランス人 (1)」 (2020年08月10日)

フランスという国が海外覇権競争に出て行くことにあまり熱心でなく、また貪欲でもなかったのは、その国が持った体質だったようだ。フランスの国家支配者は陸続きの土地で覇権を打ち建てればそれで十分だったように見える。

確かにパリの地理的位置はリスボンやアムステルダム、あるいはロンドンに比べて港からあまりにも遠く、海洋関連活動を指揮するのに困難であるのは確かだ。だがそれを言うのであれば、マドリードの姿勢は絶賛されるべきものになる。もちろん国としてどう関わるのかという点に立脚した場合、地理的位置などは山なす諸条件のひとつでしかないと言うこともできるだろう。

フランス民族がそういう体質を持ったのは、食うに困らない農業国であったこと、国 政決定者の恣意が統治行政に方向性を容易に持たせないような統治システムになってい たことなどの要因をフランス人が説明している。

かと言って、マクロ的様相がどうであれ、だからフランス人が海に出ることを厭う人種だったなどというものの見方はパンドラの函に押し込んで鍵をかけ、海の底深く沈めるべきだ。スペイン王が仕立てたポルトガル人マゼランのスパイス島を目指す地球一周大航海で、その船隊に乗り組んだ270人の船乗りの中にフランス人が19人いたそうだ。ひょっとしたら、自分が連れて来たポルトガル人船乗りがスペイン人に変えられたため、マゼランはスペイン人を減らそうとしてフランス人を加えたのかもしれないのだが。

フランス人がフランス船でスパイス諸島を目指した最初の航海は1526年のことだった。かれらの方がオランダ人よりはるかに先行している。ヴェラザヌ Verrazane が指

揮する2隻のフランス船が1526年6月15日、ノルマンディ海岸のオンフルール Honfleur 港を出帆した。

ヴェラザヌはフィレンツェ出身のイタリア人であり、イタリアではヴェラザノ Verrazano と称したが、フランスのリヨンに移住して名前をフランス風の発音にしている。ヴェラザヌ兄弟はフランスのルオン Rouen 港から 1 5 2 4 年 1 月 1 日に帆を上げて 西に向かい、アメリカ大陸北東岸を発見した。ハドソン湾に至り、マンハッタン島そし てロードアイランドなどに足跡を印している。ロード Rhodes という島の名称はかれら が付けたもので、ギリシャのロドス島に似ていたのがその由来だと説明されている。またニューヨーク市の橋のひとつにヴェラザノという名前が使われている。

さて、スパイス諸島を目指したヴェラザヌ船隊は1520年にマゼラン船隊が発見したマゼラン海峡を通って太平洋に出てから、太平洋を横断してスパイス諸島へ行こうともくろんだのだが、マゼラン海峡を探し回ったあげくそれを見つけることができなかった。仕方なく船首を東に向ける方針に変えたところ、相当くたびれていた乗組員たちはこの航海が失敗に終わるかもしれないと考えて、これ以上進みたくないと隊長に反抗した。少なくとも一隻は帰国させろという話になり、ピエール・クネイ Pierre Caunay 船長の船だけが単独航海することになった。

船はインド洋に乗り入れてマダガスカルの海岸線をはるかに望みながら東航し、1527年の夏にスマトラ島の海岸線を見出した。船が到着したのはアチェの西海岸であり、原住民は非友好的だった。乗組員らが上陸すると戦闘に発展して、船長をはじめ多数の乗組員が死んだ。残った者たちはスパイス諸島への航海をあきらめてインド洋を西へ引き返すことにした。

モルディブ諸島を経てマダガスカル島に達し、かれらがマダガスカルの土を踏んだ最初のフランス人になった。休養と食物を満喫してから1527年末にかれらが帆を上げて再度帰国の途に踏み出したあと、船は浅瀬に座礁して退き引きならぬ状態になってし

まう。生き残った12人は船を壊して筏を作り、海流に任せてそこから脱出しようとした。そして流れ着いたのがモザンビークの砂浜だったのである。着の身着のままのボロボロの衣服にほんな僅かな、まともには食えそうもない食糧を持った12人が再び陸地を踏んだのは1528年7月18日のことだった。かれらがポルトガルの現地守備隊に捕らえらたのは、避けようもない結末だったにちがいあるまい。それ以後、かれらの消息は闇に包まれた。

[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (2)」 (2020年08月11日)

ー旦フランスに戻ったヴェラザヌは、新たにフランス船ラマリーデュボンセクール号を雇ってピエール・クネイの後を追わせた。船長はジョン・ブルイリ・ドゥ・フュメ Jean Breuihly de Fumay、そしてポルトガル人水先案内人も乗船させた。ボンセクール号は大西洋を縦断し、喜望峰を回ってザンジバル島まで進んだ。そしてインドに接近しつつあったとき、海上でポルトガル軍船に拿捕された。乗組員と船中の資産資材は一切合切が姿を消した。

惨憺たる失敗に終わった捜索行に、フランスを代表する大型船主のひとりジョン・アンゴ Jean Ango が熱意を燃やした。かれは自分の負担で第二次捜索船を送り出した。



同じ1526年にジェップ Dieppe 港を出たセバスチアン・カボット Sebastien Cabot とパルモンチ―ル Parmentier 兄弟の船は好運だった。かれらはフロリダー西インド諸島→ブラジル→マダガスカルを巡航してからスマトラに到達した。かれらが上陸したのはミナンカバウ王国の支配下にある商港ティク Tiku だった。

かれらの報告によれば、「地元民は柔和で諍いを嫌う が商売には厳しい態度を取る」のだったそうだ。ポルト ガル人が海外のあちこちで行っている行動を観察したカ

ボットは次のような意見を書き残している。

ポルトガル人はまったく友好的な態度を示さない。各地でその地の主のように振舞っているかれらは通商面での利益獲得よりも宗教面での勝利者になろうと意気込んでいる。原住民の半分がキリスト教徒になったとしても、ポルトガル人は原住民に神学の深い知識を与えようとしない。そんなことをして地元民の愚かさを消失させては、ポルトガル民族にとってのメリットがなくなってしまうからだ。・・・

16世紀末に海外植民地に住むヨーロッパ人の人口は20万人を超えていたが、あれほどアジアの各地に基地を置いてヨーロッパ文明の優位を誇示していたポルトガル人のアジア居住者人口は1万人を超えたことがなかった。フランス人でさえ、1665年にはカナダに3千人超の植民をしていたというのに。

ジョン・アンゴと言えば、ルオン出身の海運王でフランソワー世にジェップ子爵の爵位を授けられたその当時の著名人のひとりだった。かれは海外雄飛の強い望みを抱き、新世界の探査発見や植民、イベリア諸国のスパイス独占貿易の打破などを行うために持ち船を駆使し、優れた航海者や海図製作者などと交わり、あるいは育成した。

1529年、かれは自分の船ラポンシLa Pensee とラザクルLa Sacre をジョン Jean とラウル Raoul のパルモンチール兄弟に使わせて香料諸島に向かわせた。三年前にヴェラザヌがレンタルした2隻よりずっと大型の船だ。

2隻は1529年4月2日にジエップ港を出帆した。マダガスカル到着はその年の7月26日、スマトラ到着は10月2日だった。当時の航海としては記録的な速さのものだった。当時、各船は水や食料補給と乗組員の休養のためにあちこちの港に寄り、ゆっくりそこで滞在するのが普通だったからだ。それを無視して突っ走ったために、乗組員がバタバタと病気で倒れた。

2隻はティクに着いて交易し、かなりのコショウを仕入れた。原住民との親善は最初 うまく進んだように見えた。贈り物を交換し、地元統治者がかれらを晩餐に招いた。だ がそこで、奇妙な原住民の風習に巻き込まれた。シリピナンを噛み、大麻を吸って酔っ ぱらったのだ。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (3)」(2020年08月12日)

翌朝目覚めてよくよく観察してみれば、ティクはまるで貧しい漁村のような町でしかない。家々は竹造りに海藻をまとわりつかせたような外装で屋根はヤシの葉葺き。家の中はがらんどうで木製の函があるばかり。煉瓦造りの棚に金属製の粗末な椀が並べられているだけ。ここでもっと多種のスパイスを大量に買いたいと言っても、地元統治者も港湾長も色よい返事をしてくれない。もっと大きな商港へ行かなければ無理だったことをフランス人は知った。

かれらが観察した原住民の姿はこのようなものだ。原住民は概して背が高く、やせ型だ。顔つきはひとを不安にさせる。話し方はきつく、声音は聞き苦しい。誰もが裸足で、履物をはいている者はひとりもいない。たいていのひとが赤・茶色・紺青の質素な木綿のシャツとカインを着ており、村長だけはサルンを肩に垂らし、重い黄金の腕輪をし、黄金の象嵌が入ったクリスを身に着けている。頭は布を巻くか、わら編みの帽子をかぶる。かれらの姿は薄汚く、穢れているように見える。村長の服だけは別にして、庶民の衣服は洗濯されていないようにしか見えない。

原住民の食事はフランス人にとってそんなに旨い物ではない。毎日毎日、飯と魚だ。 祝祭のときだけ、鶏肉が多少使われる。フランス人なら飽きてしまうだろう。

ひとびとが携えている武器はクリス以外に槍や弓矢、あるいは吹き矢だ。吹き矢は先に毒を塗った小さい矢を射る。かれらは攻撃用の武器と防御用の盾で戦う。盾には象や 野牛の厚い皮が使われ、更に蛇や魚の皮で補強したり装飾したりしている。

ムラユの女は、ヨーロッパで言われている通り、美しい。しかしスマトラに売春の風習はない。女たちは厳しく貞節を強いられていて、婚外で性行為を行うと男は死刑、女は体罰を与えられた上で奴隷にされる。そのような厳しい規律順守のために、原住民同士の間では正直で従順な交際が行われているものの、かれらは外国人に対してこの上なく狡猾で悪辣な人間になれる。

女たちは農作業を含む種々の仕事を行うよう義務付けられている。では、男たちの仕事は何か?男たちはみんな、なすべき仕事を持っていない。せいぜい闘鶏ばくちを行うくらいがかれらの仕事だろう。この地方は動物の宝庫だ。トラ・サイ・カバ・象・ワニ、そしてさまざまな色と形の鳥。

ティクの住民は排他的でなく、やってきたフランス人を友好的に遇したものの、取引においては歩み寄りの姿勢を少しも示さなかった。フランス人は結局、期待したほどの 仕入れができないままティクを後にして、インドラプラ Indrapura に向かった。

しかし1529年12月3日にジョンが病死し、5日後にラウルもその後を追った。 伝染病は船内に広がって、乗組員の半数が病死してしまう。結局この航海で得られたものはコショウ30樽がそのほとんどすべてをなし、そんなわずかな収穫を携えて1530年7月に、2隻は無事にジェップに帰還した。ジョン・アンゴにとって大損の航海だった。

乗組員のひとりはコメントした。「ムラユ人は態度をコロコロ変える。おべっか、愚 弄、狡猾、嘘、意地悪・傲慢・欲張り。商売相手としてスコットランド人よりもはるか に嫌気のさす連中だ。」

[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (4)」(2020年08月13日)

1601年5月18日、フランソワ・ピラル・ドゥ・ラヴァル Francois Pyrard de Laval の指揮するコルバン Corbin 号とフランソワ・ドゥ・ヴィトゥレ Francois de Vitre が船長のクロワソン Croissant 号がサンマロ Saint-Malo を出港した。行く先は東インドだ。

これはサンマロとヴィトゥレの商人と貴顕たちが企画した通商遠征団であり、遠征団の指揮は町の名士や貴族らが執った。スパイス流通をポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスのほしいままにさせてなるものか、という気概がサンマロに流れたようだ。

その年12月27日に2隻は喜望峰を目にして陸地に接近した。そこを出た後、16 02年2月4日にマダガスカル島の海岸に至ったが、7日に暴風雨に襲われてコルバン 号が姿を消した。5月23日にコモロ諸島に到着。7月2日、遭難したコルバン号が目 に映った。船は岩礁に乗り上げて動けず、波が甲板を洗っている。人間の姿はなかっ た。

7月8日、セイロン島を遠望しながら進み、7月14日にニコバル島、そして7月17日に待望のスマトラの島影が見えて来た。船は、陸地に近い島の脇で投錨する。その島は現在のアチェ州サバンのあるウエー島 Pulau Weh だった。

7月23日に小船が一隻、接近してきたので、クロワソン号も短艇をおろして接触する。アチェの港の役人が取調べに来たのだ。港にはイギリス船4隻、ベンガルから来たポルトガル船1隻、オランダ船1隻が入っている、と言う。「当方の水先案内人はここの港に入ったことがない」と言うと、「ならばパイロットを連れて来て、入港できるようにしてやる」と約束した。フランス人は8レアルコインをかれらに与えた。

夜になって、かれらはまたやってきた。パイロットを連れて来たと言うが、だれも船に上がって来ようとしない。人質を欲しがっているようなので、船中に監禁している犯罪者ふたりを役人の船に下ろした。するとやっとパイロットが上がって来た。

夜明けの一時間ほど前にクロワソン号は帆を張って、アチェの港に向かった。夕方6時ごろ、船は港内の水深10メートルほどの場所に錨を降ろした。しばらくすると、王の使いと名乗る男が身元を尋ねるためにやってきた。

7月26日、遠征団長であるサンマロの貴族のラ・バルドリエール la Bardeliere が上陸して王に面会した。王への贈り物はクリスタル製食器と銀製のポットとプレート。

フランス人をはじめて見た王は丁重に客を遇し、どのような航路を取ってここまで来た のかを質問した。

王はこの客人にアチェの衣装をプレゼントした。木綿の上着に金糸と絹糸で刺繍のほどこされたもので、客はその場でそれを着て見せた。王はさらにアチェで使われている黄金のコインを50個、客にプレゼントした。王はまた、自分の監督下にあるこの地の商品は何であれ、自由に交易して良いと許可を与えた。団長は象に乗って港に戻って来た。

その日から、水夫の数人が陸上で寝泊まりするようになった。かれらは鶏を買ったり、アラッ arak を買って飲んだ。アラッはサトウキビ・米・ヤシを陶器の装置で蒸留して作る飲み物で、かなり強い酒だった。

7月28日、団長は王の長男である皇太子に招かれた。皇太子への贈り物はクリスタルのグラスと紅色の布ナプキンで、そのお返しに短剣クリスを頂戴した。クリスには黄金と宝石で花の絵が象嵌されていた。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (5)」 (2020年08月14日)

7月29日、王がフランス人遠征団に家を一軒用意してくれた。船から陸に上がりた い者はだれでも自由にその家を使ってよいとのことだ。それから数日して、船から交易 用の積荷が陸上に下ろされた。

ここに住んでいるトルコ人は普段からコショウを農民から買って、港にやってきた商船に販売する仲介業を行っている。かれらがフランス人に熱心に売り込みをかけてきた。かれらのやり口は、下のコショウを濡らしてその上に乾いたコショウを置き、重さを水増しするスタイルであり、フランス人はその手に引っかからなかったから、トルコ

人は最終的にあきらめて、喉から手を出してほしがっているイギリス人に矛先を変えた。フランス人に対しては、トルコ人は売るのをやめて買う側にまわり、毎日やってきては鏡などの工業製品を買って行った。

9月17日、オランダ船が2隻入港してきた。1隻は喜望峰で見た船、もう1隻はサンロロン Saint-Laurent で見た船だ。その2隻はセイロンでシナモンと種々の宝石を仕入れて来ていた。

10月6日、アチェ王の部下である港湾長がやってきて、団長にコショウを売った。 10月18日から数日間、グジャラート Gujarat とナガパティナム Nagapattinam からの船が何隻も入港し、木綿布・サトウキビ・インディゴやさまざまな宝石貴石を売りに来た。

10月22日、ペディール Pedir 王国から象に乗ってポルトガル人が陸路をやって来た。かれらが海路を避けたのはイギリス船を怖れてのことだ。かれらはコルバン号の乗員25人が2隻のボートで海上を進んでいるのを見たという情報をもたらしてくれた。

毎日大雨が降り、川が氾濫して道を歩くことができない。外を移動するには、大木を くりぬいたカヌアと呼ばれる舟を使わなければどうしようもない。これは毎年同じ時期 に同じような現象が起こる年中行事になっていて、だから地元民は高床の家を作って暮 らしている。

10月28日、ペディールへ行く許可をもらうために、王に贈り物をした。ペディールはここから120キロ離れており、王の息子のひとりがそこを統治している。その統治者がわれわれの団長に黒水牛の肉四分の一頭分とマンゴの果実をたくさん送って来た。黒水牛の肉は他の肉よりも上等な物とされているようだ。

ペディール訪問団が編成されて、王への表敬訪問を行い、かの地で二週間ほど滞在して来るように命じられた。一行はペディール王の歓待を受けて、一緒にアラッを飲んだ。王はかれらに女が欲しくないかと尋ねたそうだ。王は男色相手を何人も抱えている

らしい。歓待の居心地の良さに呑まれた一行は予定日が来ても帰る気が起こらず、翌日になって嫌々ながらやっと重い尻を上げた。王は黒水牛一頭、砂糖、さまざまな果実をかれらへの土産に与えた。この若王はほとんど毎日、山地や森に象や虎を狩りに行くそうだ。

船長はまた、原住民の暮らしの様子を次のように記録している。およそ5カ月間の滞在でフランス人が実見したスマトラ島北部の原住民はそんな様子をしていたのである。 17世紀はじめのアチェ人の生活を、われわれはそこから垣間見ることができるだろう。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (6)」 (2020年08月15日)

原住民の体格は概して背が高く、中には素晴らしい体躯の者もいる。もちろん全員というわけではない。かれらの肌はギニア人のように真っ黒でなく、鼻がぺちゃんこでもない。かれらの肌の色は黄色や茶色であり、大嘘つきのペテン師だ。

男たちはたいてい、布を腰に巻き付けて性器を隠しているが、他の部分はむき出しにしている。王族や商人は綿や絹の布を巻き付けて膝まで覆い、幅の広い帽子のようなものをかぶっている。上衣も袖の幅広なものを着るが、前面は開いたままだ。女性はたいてい綿布で腰から膝まで覆い、別の布を一枚使って胸から腰までを覆っている。しかし胸を隠さない女性もいるし、布を肩から羽織って胸の一部を隠しているだけの女性もいる。髪を短くしているから、頭には何もかぶらない。

ここの王は年齢が63歳で、在位18年になる。かれは以前、ただの漁師だったが、 勇気があったので前の王の側近に侍ることになった。そしてしばらくしてから前の王を 殺して王位に就いた。だから今の王は自分が同じ目に会わないよう、側近をひとりも置 かない。王の警護に当たっているのは女の警備兵部隊だ。剣と火縄銃がかの女らの武器 で、その腕前は男と遜色がない。王の身の回りから業務一切の世話をするのはすべて女 性であり、男はひとりもいない。王の世話は一週間に2シフトで交代している。

王の正妻はふたりいて、子供を四人産んだ。男子二人、女子二人だ。長男は王位継承者であり、父王がいないときは代理を務めるが、父王がいるときは何の権限も持っていない。次男はペディールを治めている。

王は全国から娘を手に入れて妾にした。その数は三百人以上にのぼる。ただ、この王は妾を蓄えないで、伽をさせたら部下に下げ渡した。いくばくかの金をつけてやるが、財産になるほどのものではない。自分の支配下に金持ちがいるのを王は許せないのだ。だからどんな些細な手落ちでも、それを罪と言い立てて金持ちから財産を没収する。手落ちが見つからなければ罪をでっちあげて言い立て、「腕を切り落とす」「ウェー島やゴメス島に流罪にする」といった判決を下して財産を没収する。

王は闘鶏が好きで、王族や部下はみんな闘鶏用ニワトリを飼っている。闘鶏が行われるとき、王は勝ったニワトリに多額のほうびを与える。王族はステータスを示すために親指と小指の爪を長く伸ばしている。そうやって肉体労働などしない自分のステータスを誇示しているのだ。かれらが座る時は床に胡坐をかいて座る。かれらのあいさつは額の前で手を合わせる形だから、われわれは脱帽したことがない。

原住民の男は経済力があれば7人まで妻を持つことができる。結婚の祝祭を行うときに新郎は金を持ってきて新婦の親に渡す。結婚したら妻は厳重に監視されて、他の男と

会うことは許されない。新郎が新婦に愛想を尽かしたら、一週間以内に実家へ返して破 談にすることができる。

外国人がこの地方に住む場合、同じ方法で妻を持てる。外国人が居留をやめて引き払うとき、妻を実家に帰すのは問題がない。そのために騒ぎが起こることはないのである。妻たちは毎晩、夜になると木の撥で叩く太鼓のリズムに合わせて踊り、歌う。そのときに一番上手にできて夫が気に入った妻が、その夜は夫とふしどを共にする。

夫たちは家庭内で使う者をすべて買う。妻・使用人・奴隷。そしていつでも家から追い出すことができる。他に妾を持っている場合、妾は別の男に売る。家庭内で使う使用人には男もいるが、男の使用人はみんな去勢されている。そうしてはじめて、財産や妻の世話をかれらに任せることができる。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (7)」 (2020年08月16日)

娘たちは結婚前に、相手がだれであろうと好きな男に身を任せてよい。そのときに金 を取る。その婚前性交は娘を妻にと望む相手との結婚の障害にならない。

女たちは頭に何もかぶらず、頭髪を後で結ぶ。中には短髪の者もいて、男と見分けがつかない。そのときは胸を見ることになる。かの女たちは結婚したら、夫以外の男に絶対近寄ろうとしない。死刑もしくは鼻や耳を切り落とされるのが怖いのだ。不倫を犯した男女は、象に乗って操る者の命令一下、象に踏みつぶされるのである。

路上で女性に出会ったとき、われわれは婦人への敬意を示すことを控えなければならない。それを知らないでその女に近寄ったり、一緒に歩いたりすると、女はその者を罵り、唾を吐きかけてくる。

王の妻を見つめてはならず、王妃が乗っている場合はその象さえ見てはならない。そんなことをすれば、その男は目玉を繰りぬかれ、性器まで切り落とされてしまう。

女たちは耳朶に穴をあけて、指四本分の物をそこに通す。また耳の軟骨にも小さい穴をあけて、そこに花を挿す。かの女たちは銅・ピューター・銀の腕輪を着けている。薬指に指輪をしている女もいる。

食事は質素だ。主食は水だけ使って炊いた飯で、バナナとヤシが主要果実。それはバナナとヤシが一年中採れるからであり、他の果実は季節性があって同じように扱えない。そして水牛の肉を食べる。中でも黒水牛は力が湧くと考えられているようで、特に好まれているが、われわれ外国人には全然おいしくない。飲み物は一般的に水だ。かれらはアラッを作り、それを飲んで酔っ払う。食器はいつもきれいに洗ってある。

男たちは小便するとき、女のように地面にしゃがんで行う。われわれが違う方法で小便するのを見たかれらは、まるで悪事が行なわれているのを目にしたかのように怒声をあげた。まずいことが起こると困るので、われわれもかれらの方法に従うことにした。かれらは排泄が終わると左手で性器を扱い、左手を洗っている。大便のときも同じようにしていた。

かれらは川で水浴を行う。川の水は澄んでいて、きれいだ。かれらが傷を負ったり、 身体の一部が切られたときも、川の水で痛みを鎮めている。裁判の判決のせいで、身体 の一部が切られるのは、ここでは日常茶飯事なのだ。切られたあと、その部分を一時間 ほど川の水に浸す。そうしてから、薬効のある葉で傷口を覆う。そんなやり方で、傷は ほんの数日で癒える。

かれらは毎日、朝夕水浴する。川には常に、何人もの老若男女が素っ裸で水の中にいる。かれらにとっては当たり前のことで、気おくれや恥ずかしさなどはまったく見られない。楽しそうに水中で遊び、笑い声を立てている。気温が高いときは水から出て、小

さい柑橘類を半割りにしたもので体中をこすり、肌をフレッシュ且つきれいにしている。 時間に余裕のある女性たちは、長い時間を川水の中で過ごしている。

川の水はとても澄んでいる。多分、山から下って来た水は砂漠を通り、さまざまな木々の生い茂った森林を通ってここまでやってくる間に、森林の中にあるさまざまな樹種の影響を受けるのだろう。木々の中には乳香 kemenyan、樟脳 kamper、白檀 cendanaなどの香木もたくさん混じっている。それがここの水の品質を素晴らしいものにしているのではないだろうか。われわれは帰りの航海にここの水をたっぷり船に積んで使っていたが、5カ月間の航海で変質は起こらなかった。よその水は木の容器に入れておくと12日目に腐り始める。

女性たちは身体が良い香りになるように、アロエベラ lidah buaya、白檀 cendana、 コブミカン jerukpurut などの芳香性の植物をすりつぶして水に浸し、それで身体のあ ちこちをこする。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(8)」(2020年08月17日)

社会生活では、慣習であれ支配者が出したものであれ、だれもが決まりを厳格に守っている。法を犯した者には裁判が行われて、判決が下される。盗みは、些細な物を盗んでも、初犯であれば手を切り落とされる。再犯になれば、両足と残った手を切り落とされる。不倫を行えば、男は性器を切り落とされ、女は鼻を切られたり目をくりぬかれる。殺人者はその者が行ったのと同じ方法で殺されるか、あるいは象を使った死刑執行がなされる。象使いの命令で象は死刑囚を鼻で巻き上げ、口に持って行って歯ではさんでから、空中に放り出す。そして地上に落ちたその身体を踏みつけるのである。あるいは、殺人犯がトラの餌食にされることもある。

王は法を超越しており、裁判などなしに仕置きを与える。使用人が犯した些細な失敗事に怒った王は、すぐに手を切れ、足を切れ、と命じる。われわれが滞在中に起こったできごとがある。贈り物にもらった犬の世話をさせていた使用人のひとりが犬を連れて歩いていたとき、犬と水牛が喧嘩をしてその犬は殺されてしまった。その報告を聞いた王は即座にその使用人の手首を切り落とさせた。王の命令は絶対であり、だれにも反論は許されない。またその命令はすぐに実行されなければならない。

王の部下のひとりは港湾長で、軍司令官と同じ地位にあり、王国の統治行政の細部をかれらが取り仕切っている。今の港湾長は至って貪欲で、かれに何かを頼もうとしたら、かれへの代償がなしには絶対に実現しない。

ここの地は東インドの他の土地と同じように、ふたつの宗教が併存している。ひとつはおよそ30年前から始まったムハンマッの教えで、もうひとつは古い昔からの偶像崇拝だ。

ムハンマッの教義信奉者は、天地を創造した神はひとつしかないと信じている。この 地上に出現した偉大なる預言者はモーゼ、イエス、ムハンマッの三人だけであり、モー ゼは神の啓示を伝え、イエスは奇跡によって神の手となり、ムハンマッは神の啓示を解 釈した。

ユダヤ人がイエスを磔刑にしたのは、イエスが偉大な預言者だったからだ。かれらが 待っているこの世の終末における最後の審判では、モーゼの信奉者はモーゼと共に、イ エスの信奉者はイエスと共に去って行くことが信じられている。かれらはアルクルアン の命を実行し、モスクには大衆の礼拝を指揮する宗教指導者がいて、夜明けから日没ま で何度も「アッラー」という言葉を口にする。朝は長い時間宗教歌を唄い、夕方も同じ ようにしている。モスクに入る前はだれもが手・顔・足を洗う。モスクに入る12歩内 に水溜めがなければ、陶器の巨大な容器に溜められた水を使う。そこからモスクの入口

までは踏み石が置かれていて、洗った足を汚さないでモスクに入るようにしてある。かれらの生活には休日というものがない。ただ金曜日はわれわれの日曜日のような特別の日だ。

人が死ぬと、女の一団が故人の家にやってきて泣く。それは商売なのだ。女たちは悲嘆に満ちた表情で、大声で慟哭するから、われわれは悲しみの深さを思いやることになるが、泣くのを休んでときどき一緒に何かを食べたりしており、そのときは笑いながらふざけあっている。

仲間の死を悼む者は数日間、シリを噛んだりアラッを飲むことをやめるという社会通 念があるものの、たいていの者は自宅にいるときや町中を歩くときに、その通念に違反 する。悲しみに捻じられた腹を回復させて消化を良くするというのが言い訳だ。この社 会通念は、仲間たちが故人に向ける尊敬の気持ちを社会に表明することで調和を作り出 すための習慣だ。それに従っていれば多少の違反は構わないが、従わない場合はその者 が故人への恨みや憎しみを抱いていると世間から見られる。

偶像崇拝者は、朝家から出たときに最初に目にした動物がその日の運勢を決めると考えている。かれらは雄と雌の牛をとても神聖な生物と見なしているため、牛の屠殺は行わない。かれらは牛の排泄物が落ちている場所すら、神聖視する。かれらはパゴデ pagode と呼ばれる祭祀堂を持ち、そこに香料を捧げ、かれらが食べる前の肉を供える。食事で残った食べ物は鳥に与える。

かれらはキリスト教徒が使った水飲み容器を穢れた物として二度と使わない。あるときわれわれのひとりが原住民の陶器の器で水を飲んだところ、原住民はそれをすぐに地面に投げ捨てた。かれら自身もその種の器で肉を煮るときは、一回使ったら捨てるのだが。

「ヌサンタラのフランス人 (9)」 (2020年08月18日)

かれらの宗教儀式を率いる者はブラッマネ brahmane と呼ばれる。ブラッマネが亡くなると、その妻たちは夫の火葬の火の中に自らを投じる。それをする妻は忠実な妻であり、しない妻は不忠実な者というレッテルが貼られる。原住民たちの話によれば、その慣習は妻が夫を毒殺したという嫌疑を免れたいがために、自ら進んで行うものであるそうだ。ブラッマネは飯と野菜しか食べない。

かれらは何かを決意するとパゴデに向かって誓いを述べる。人間の霊魂が他人の身体 に移動することを信じていて、その理屈を語るのだが、まるで奇妙なロジックが使われ る。

父親と娘が、母親と息子が、兄弟と姉妹が、男女の交わりを行うことは少しも禁じられていない。それはたいへん大きな罪であるとわれわれが言うと、かれらはこんな説明をした。ひとはだれでも木を育てたなら、できた実を賞味したいと思うのは自然なことだ。妻に産ませた子供が恩を返そうとするようなことは、滅多に起こらないのだから。

東インドにはだれもが理解している美しい言葉がある。ムラユ語というその言語は、 ヨーロッパにおけるラテン語のようなものだ。

かれらの住居は、大人の背くらいの高さの柱の上にヤシやグラガの葉で作られ、屋根 もそれで葺かれているから、たいへん燃えやすい。われわれが滞在中に起こった火事で は、6時間経たないうちに3百軒を超える家屋が灰になった。 火を出した家の主は、当然自宅も灰になったのだが、裁判で腕を切り落とされた。王は民が石造りの家を建てることを絶対に許さない。謀反者の防御陣地に使われる可能性があるからだ。

内陸部に住んでいる者は食人種族だ。かれらは人肉を食べるとき、とても残忍な方法を使う。かれらは人間を捕まえると四肢を切り落として放置するから、被害者は長時間苦しみながら死んで行く。人肉を食べる時はコショウが使われる。白人よりも黒人の肉のほうが好まれているようだ。

町では、住民のための市場が昼間、数時間だけ開かれる。そこで野菜・果実・魚・緑の酸っぱい実や葉、ナス、ムンクドゥ、ドリアン、パイナップル、マンゴ、ナンカ、マンゴスチン、ランブタン、バナナ、ヤシ、その他ここに書ききれないくらいさまざまな果実類を買うことができる。

通り沿いにはトルコ風の服を着た商人たちの店がたくさんある。かれらはナガパティナム・グジャラート・コモリン岬・カリカット・セイロン・シアム・ベンガルなど広範は地域からやってきたひとびとであり、半年間ここに滞在して持って来たグジャラート製綿布や絹の敷物、植物製手工品、綿糸、焼き物、スパイス、伝統医薬品、宝石などを販売する。

かれらは頭にターバンを巻き、トルコ風の衣服を着ている。ここでの6カ月間の暮ら しのために妻を伴って来た者もあるし、現地妻を買う者もいる。6カ月後に帰国すると き、次にやってきた者と交代する。かれらだけがここで販売するために他の土地にコシ ョウを仕入れに行く。そのとびぬけた商売熱心さのために、かれらは東インドのあちこ ちへ旅することに臆さない。パサルのはずれには、大砲を作っている鍛冶屋があった。 中国で発明されたものだとかれらは吹聴していた。 われわれはアチェに5カ月間滞在し、自由な交易を許されてさまざまなスパイスや東インドの珍しい品物を入手した。われわれが錨を上げたのは1602年11月20日のことだ。われわれは8人の東インド人を同行させた。かれらはその後、ずっとサンマロに住んでいる。

残念なことに、遠征団長の貴族ラ・バルドリエールが12月1日に死去した。1603年3月3日、サンテレヌ Sainte-Helene 島に到着。そこまでの三カ月間にたくさんの乗組員が病気にかかり、多くが死亡した。生き残った者たちも疲労困憊していた。食糧は底をつき、島で捕まえた犬やネズミを食べた。

一週間後、われわれはベニスからやって来たオランダ船三隻に会い、積荷の一部を進呈するから乗船させてくれ、と頼んだ。するとオランダ人は積荷を全部取り上げた。つまり積荷を全部与えて乗船させてもらったことになる。そのしばらくあと、クロワソン号は浸水し始め、われわれの眼前で沈没して行った。われわれがオランダ船に乗っていたのはおよそ三週間で、7月13日にプリマスPlymouthに到着し、全員がそこで下りた。「続く」

「ヌサンタラのフランス人 (10)」 (2020年08月19日)

ヴィトレの訪問から20年後にアチェを訪れた別のフランス人は、また異なる体験を した。その20年間にアチェが大きな変貌を遂げたのは疑いがない。アチェがどのよう に変わったのか、東インド遠征団の団長が書き残した記録を読み返してみることにしよ う。

ルオンの商人たちがシャルル・ドゥ・モンモロンシ Charles de Montmorency 提督の 庇護下に東インド会社みたいなものを作ることを希望した。そしてできた団体にモンモロンシ船隊という名前が与えられた。東インド会社を名乗るにはまだまだ早かったようだ。

モンモロンシ船隊の立役者のひとりはオギスタン・ドゥ・ボーリウ Augustin de Beaulieu だ。かれは1617年に三隻から成るフランス船隊の一船の船長としてバンテンを訪れた。

そのときの航海では、バンテン港でオランダVOCがかれの船を含めて二隻を略奪した上に燃やしたため、帰りは5千8百袋のコショウを満載した最後の一隻に乗って16 18年8月6日にジェップに戻って来た経験を持っている。

ボーリウはモンモロンシ船隊の名のもとに、273人が乗り組んだ三隻の船を率いて 1619年10月2日、オンフルール港からスパイス諸島を目指す航海の途についた。

その時期、バンテンに商館を開いていたオランダVOCはバンテンの属領であるスンダクラパを武力征服してイギリスと組んだ統治者を追い払い、VOCの領地に変えた。 そこは後にバタヴィアという大都市に発展する。

一方、ポルトガル人はマラヤ半島のマラッカを東南アジアの拠点にし、域内通商に割り込んできたVOCと各地で争っている。更にスマトラ島北端にあるアチェ王国は1607年に即位したスルタン・イスカンダル・ムダがアチェの最盛期を形成しようとして強硬路線を邁進していた。スマトラ島北半分はおおむね、アチェの支配下に落ちている。その頃、アチェの王都は7~8千軒を上回る数の住居が町を埋めていた。

1620年12月1日にモンモロンシ船隊の三隻の船団がティクの港に入った時、その地の統治者はアチェ王の許しがないとフランス人にコショウは売れないという返事を した。ボーリウはアチェに向かわざるを得なかった。

アチェ到着は1621年1月23日。アチェの港には既に数隻のイギリス船とオランダ船が、交易許可が下りるのを何日も待って停泊している。かれらは互いに礼砲を交わし合った。すると何人も役人を乗せたアチェの船がやってきた。かれらは王の使者であることを示す王のクリス(黄金の鞘に入っている)を示して王の使者であることを名乗り、歓迎の辞を述べてから入港税を要求した。

ボーリウは80レアルと鏡を一枚、王に献上し、ランカヨラクサマナ Rangkayo Laksamana に別の鏡を一枚プレゼントした。ランカヨラクサマナは王の腹心であり、大きい影響力を持っている。

翌日、ボーリウが船から上陸すると、足に鎖をかけられているポルトガル人が数人やってきて、「オランダ人とイギリス人があんたを毒殺しようとしているのをわれわれは知っている。気を付けろよ。」と忠告してくれた。かれらはアチェ王の命令で鎖をかけられているのだ。

2月3日、ボーリウは港湾長に贈り物を献じた。火縄銃2丁、見栄えの良い商品ひとつ、鏡一枚、バラ水2瓶。港湾長はボーリウに、ティクに倉庫を作りたいなら、わたしが力になる、と約束した。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(11) I(2020年08月20日)

2月8日、ボーリウはスルタン・イスカンダル・ムダに謁見することになった。かれは前もって スルタンに献呈するために、フランス国王からもらっていた王章の付いた白紙用せんに国王か

らの手紙を書きこんだ。また贈り物としてドイツ製サーベル、長銃、槍などから成る騎馬兵の戦 闘装備のレプリカを用意した。レプリカは彫刻入りで、金箔で飾られて

いる。他には鏡やバラ水などだ。

やってきた港湾長と税関長は、スマトラ島最高の権力を持つアチェ王への贈り物としては物 足りない、と不満を述べた。フランス国王からの贈り物はこれで全部だ、とボーリウは反駁した。

港湾長は謁見の場に参上するプロセスについてボーリウに説明した。王はボーリウを迎えるために四人のランカヨと2頭の象を派遣する。かれらは王宮に向かうボーリウの行列に付き添う。

先頭を6人のラッパと6人の太鼓、そして6人の道化が賑やかに進み、その後ろに14~5人の男たちが王への贈り物をひとつずつ持って歩き、ランカヨとボーリウたちがそのあとに続く。 手紙を捧げ持つ者は象に乗り、ランカヨはアラブ馬にまたがり、そしてボーリウは象に乗る。その後を徒歩でフランス人警護兵14~5人が従い、最後尾を港湾長と税関の役人たちが徒歩で進む。宿舎から王宮までおよそ4キロの距離を行列行進するのだ。

その日、行列が王宮前のアルナルン Alun-alun に着くと、ボーリウは象から降りて大門をくぐった。フランス人警備兵はそこで待つよう命じられた。だれも中に入ってはならない。王宮に入ったボーリウとかれの腹心一名は、大門を通ってから、更にふたつの門をくぐった。そのあと、大きなバレ balai に案内され、そこで靴を脱ぐように言われた。

ふたりの王宮の者が両側からボーリウの手を持って宮殿の中を進み、王の部屋の前まで来た。銀箔を貼られた扉は閉まっている。しばらく待っていると宦官がひとり中から出てきて、今日スルタンは体調がよくないが、せっかくここまで来たのだから中に入ってよい、と言う。王は中にいて、ちょっと離れた位置にトルコ絨毯が一枚敷かれており、そこに座るように言われたから、

ボーリウは地元の慣習に従ってあぐらで座った。

王の使用人が出て行くと、ボーリウは地元の慣習にならって両手を額の前で合わせて少し頭を下げ、王にあいさつした。帽子は取らない。王は床から1メートルほど高くなった玉座に座っている。港湾長が王に代わって話し出した。

たくさんのプレゼントをしてくれたわが兄弟であるフランスの王に対して、スルタンは感謝の気持ちであらせられる。もし10バハル bahar の黄金コインを贈り物にもらったなら、あれらのたいへん素晴らしい武具に比べてどんなに喜ばしいことか。

ボーリウは港湾長の弁舌が長くなりそうなので、王に向かって言った。わたしの主人であるフランス国王の許しのもとに、わたしはスルタン陛下の手に口づけして、他の外国人が得ているのと同様の、陛下の支配地における通商の許可をお願いするものでございます。

港湾長の通訳を聞いてから王は述べた。

「わたしはそなたの来航を喜んで歓迎する。わが国はそなたに門戸を開く。通商の許可については、オランダとイギリスはそのような許可のおかげでコショウをとても廉価に手に入れた。ところがしばらく前からかれらは、以前からかれらを受け入れていたバンテン国王と敵対関係に入った。感謝の気持ちを持たないかれらの振舞いに対してアチェ国王は、問題の根を断つためにすべてのコショウの木を根絶やしにするよう命じた。今、コショウの売買は国王の命に従わなければならなくなっている。そのためにコショウ価格はバハル当たり64レアルに値上がりしている。だが、問題はそんなことではないのだ。東インドの資源を盗み奪って利益を漁り、東インドの通商をその手に握って支配しようとしているかれらの行いを思えば、高い値段で売ればよいということにはならないのだ。」

[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (12)」 (2020年08月21日)

ボーリウは王の話に対して、次のように答えた。「陛下のお話を聞けば、フランス人はだれもが不思議に思うことでしょう。もともとかれらは通商以外に生きるすべを持たない者たちでしたから。ところが今やかれらは、何という図々しさか、あらゆるものを我が物にしようとしています。フランス国王はかれらをスペイン国王の横暴から保護してきた歴史があり、かれらはフランス人を尊敬して当たり前であるにもかかわらず、今では知らぬ顔をし、見下し、愚か者扱いをしています。われわれフランス人がこの国を訪れるのは通商だけが目的であり、だれかを支配しようとか、どの土地に肩入れしようなどという目的はさらになく、商業上での売買だけが目的なのです。わたしはかれら両民族と一切関係を持たず、話もしないようにしなければなりません。」

それを聞くと王は黄金の器に置かれたカプルシリ kapur sirih をボーリウに勧め、銀の盆に載せられたアチェの衣装をボーリウにプレゼントした。ボーリウは即座にそれを着用し、フランスの盛装の上に着たアチェの衣装のまま、王の部屋を退出した。

だがそんなことで話がとんとん拍子に進むような土地でないのは明らかだ。フランス人はティクやアチェで自由に交易して良いという王のお墨付きをもらいたいのだが、王宮側を代表してフランス人に相対しているランカヨや税関長との話し合いは三回四回と持たれたものの、希望をスルタンに取り次ぐと約束してそのたびに贈り物を要求し、言ってくる価格は値上がりする一方であり、もしも弱気になって合意などした暁には、下に濡らしたコショウを置いて上に乾いたものを積む手口はまだいい方で、下には石を詰めて上にコショウを置いた樽を大量に持たされるのは目に見えている。かれらの仲介で取引するのであれば希望する価格を、さもなければ王のお墨付きを、とボーリウは粘った。

2月18日、午後に港湾長がやってきて、王のお招きであると言ってボーリウを宮殿に誘った。王は宮殿内の四角い部屋にいて、ボーリウは前回王に謁見したときに置かれていたトルコ絨毯にまた座らされた。

王がボーリウにヨーロッパのキリスト教の王たちの勢力図について質問し、ボーリウが答えていると、三十人ほどの女たちがそれぞれ黄金の大きい容器を持って現れ、王とボーリウの前に置いた。容器を覆っている布を開けると、中には多数の小さい黄金の器にさまざまな料理が置かれている。この招きは王の夕食の相伴だったのだ。

実に様々な料理と飲み物が供されて、何ひとつ不足のない王者の食事にボーリウは感心してしまった。もちろん、ヨーロッパ人には訳の分からない、不思議でおどろおどろ しい飲み物を飲まされたりもしたのだが。

そうこうしていると20人足らずの女たちが出てきて壁の前に並び、歌を唄い始めた。港湾長の説明によれば、それはスルタンがこれまでに勝利したさまざまないくさをほめたたえる歌であるそうだ。すると小さい扉からふたりの女、あるいは娘と言えそうな容姿端麗で優美な女性が入って来て、舞い始めた。かの女たちが身に着けている衣装はとても変わっていて、ボーリウはいまだかつてそのような姿の女性を想像したことすらなかったから驚いた。ふたりが身に着けているのはすべて黄金で作られた衣装だったのだから。

ふたりはまず王に両手を合わせてあいさつすると、ひざまずいたまま身体を立ててく ねらせはじめる。そして立ち上がってから音楽に合わせてたいへん美しく舞うのであ る。舞は半時間近くまで続き、ふたりは舞い終わるとまた王にあいさつをしてから下が って行った。

ボーリウはあの黄金の衣装が20キロはあるだろうと見積もり、それを着て半時間も 舞い続ければ相当な重労働だろうとかの女たちを気遣ったが、ふたりはそんなそぶりを 少しも見せなかった。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(13)」(2020年08月22日)

芸術についての造詣を人並以上に持っているボーリウも、衣装のことは別にしてその 舞を素晴らしいものだと感じた。フランスの舞踊批評家がここにいたとしても、かれら はそれを決して野蛮人の踊りとは考えないだろうという確信を抱いた。

夜のとばりが降り始めたのでボーリウは王にいとまを願って王宮を退出した。帰りの道すがら、「スルタンは外国人を招いて晩餐を共に楽しむことは普通に行っているが、その席で妻を踊らせたのはこれがはじめてのことだ。」と港湾長がボーリウに語った。王の妻がいれば目をつぶらなければならず、その姿を眺めたりすれば災難が降りかかって来るような風土で、王が自分にはその禁を解いた謎をボーリウは、アチェ王の偉大さをヨーロッパ文化の最高峰のひとつであるフランスに伝えるように仕向けているのだと解釈した。

実際、アチェ王が蓄えている黄金の量はすさまじいものだ。スルタン・イスカンダル・ムダは即位してから既に百バハルを超える黄金を手に入れている。大量の宝石や銀あるいは高価な品物などはそのほかだ。それが祖先から伝えられたものに加えられているのだ。ボーリウはその総量を1千8百万リーブルと見積もった。ヨーロッパの国主の中にそれほどの財宝を築いた者はいない。

アチェという国は興ってからいまだかつて他国に蹂躙されたことがない。つまり先祖 代々蓄えられた財宝は何ひとつ失われることなく残されているということなのである。 スルタン・イスカンダル・ムダはしばしば、わたしに怖い物はない、と公言した。もち ろん神と、そしてトルコのカリフだけは別にして、という注釈が付いた。

アチェの王宮はアチェ王の居所である。その中では、あらゆる仕事が女によってなされる。男が勝手に入ることは許されない。王宮内で行われている王の私生活および公生活も、すべての用が女の手で達せられている。話では、3千人の女が王宮内で生活して

おり、かの女らはめったに宮殿から外に出ない。なにしろ宮殿内にパサルがあり、必要な物はたいていそこで買えるのだ。また自分で作った物をそこで売って金を得ることもできる。

各部門に長がいて、それぞれが独自に統制されているし、決まりを破る者を裁くために裁判所もある。もちろん男の姿があるにはあるのだが、王宮内で働いている男は全員が宦官であり、総勢5百人ほどいるそうだ。

王の妻妾は大勢いて、その中の20人ほどはアチェが征服した国の王女たちだ。最後 に征服した国はペラッで、そこの王妃の美しさは桁外れだったから、アチェ王はそのた めに病気になったそうだ。

宮殿にはその他に奴隷が1千5百人いる。奴隷はたいてい外国人であり、王はだれかに刑罰を与えたり、その者を殺したりするときに奴隷を使う。王宮の警護は女兵士の部隊が行い、王の気に入らない人間を痛めつけたり殺したりするのは奴隷の役割になっている。王宮の奴隷は悪辣残虐な人間として民衆から怖れられている。

アチェの町は城壁に囲まれた都市でなく、そのためにノルマンディの田舎の村のように見える。王宮も金持ちの城のような感じだ。王宮の四周は2キロ足らずの長方形で、周りは30フィートの濠に囲まれていて急な斜面と植栽のために通り抜けるのが困難になっている。土を盛り上げてあるのは、城壁の代わりにするためだ。盛り土の上は竹が密生しているため、人間が通り抜けるのは困難で、また内部を見通すのも難しい。内側からであろうと外側からであろうと、その竹を切ろうとする人間は死罪を覚悟しなければならない。

王の居所に達するまでに四つの大門を通らなければならない。そのうちのひとつは煉 瓦塀で作られ、幅が50歩ほどあるテラスを支えており、その上にいくつかの建物があ る。そのテラスは広大なアルナルン alun-alun の上に突き出た形になっていて、ボーリ ウはそこが武器庫になっているのではないかと推測した。アルナルンは4千人の兵士が

整列できる広さになっており、ボーリウはそこで一度、3百頭の象を集めて行われた儀式を見たことがある。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (14)」 (2020年08月23日)

だがスルタン・イスカンダル・ムダの軍勢は4万人にのぼるのである。この王はその 兵力をいとも容易に動員することができる。だが兵士は銃を持たない。王は銃・大砲・ 火薬を王宮警護兵だけに使わせているからだ。ある情報によれば王は5千門の大砲を持 っているという話だが、ボーリウはせいぜい1千2百門で、すべて青銅製だろうと考え ている。火縄銃は大量に持っているものの、銃身が短く、また大雑把な出来のものばか りだ。この軍勢がよりをかけて誇っているものは9百頭の象だ。しかし、象が兵力を強 化するというアチェ人の観念がボーリウにはよく理解できなかった。

王はそれらの象にすべて名前を付け、もっとも勇敢で利口な象を民に認識させるために、その象が街中に出る時には権威を示す傘を使わせるそうだ。また王はしばしば、疾走する象の背に立ち、一本の杖で象を巧みに操縦する姿を民衆に示すのを好む。

王の心が愉悦に満たされると、王は美しく着飾った姿で二日間狩りに出る。王宮の厩には2百頭近い駿馬がいて、すべての馬に豪華な鞍が置かれている。

アチェ王の軍備は海上にも行き届いている。2百隻近い大型軍船を常備している国は、この近隣には他にひとつもない。その三分の一はキリスト教国で作られる軍船よりも大型だ。船型はアジア型で、ヨーロッパ式設計のものは一隻もない。それらの軍船は6百から8百人の兵士を乗せることができる。

王が出陣するときは、すべての軍事力が動員される。すべての民が王の一声で、三カ 月分の食料を自前で用意して集まって来る。かれらは王国所有の武器を借りて使い、い くさが終わればそれを国庫に返さなければならない。だから、だれが何を借りたのかということがすべて記録されるのである。

動員された男たちの妻や子供、あるいはまだ生きていれば親たちも、は兵士の戦場での働きに関係付けられる。もしも兵士が戦闘を避けたり、あるいは脱走などしたなら、 その者の家族は残虐な処罰を受けて死ぬ。

三カ月でいくさの決着が付かなかったときに限って、王は銃・大砲・火薬と米を軍勢のために送り出す。戦死した民に男児がなければ、王はその一家を王宮に迎え入れる。もし娘があれば、生き残った民に嫁がせる。娘がそれを望まなければ、王宮に迎え入れる。だから王宮にいる女の数が膨大なのだ。父親は一家の遺産を男児にだけ相続する。男児がいなければ、すべてが王のものになる。人間ばかりか、家から家具に至るまで。

王はまた、死刑に処した者の遺産をすべて没収する。外国人が領土内で死んだときも、その遺産はすべて王の物になる。外国人の遺言書は領土内で無効なのだから。外国人が病気になったら、それを聞きつけた役人がやってきてまず家を没収する。そして死去したなら、その者の財産の一切合切を全部王宮に運び込むのである。没した外国人の使用人・友人・奴隷は、死者の黄金・お金・宝石類がどこにしまわれているのかについて尋問される。ただしアチェに商館を設けたイギリス人とオランダ人は例外待遇になっている。

さて肝心のコショウの買付については、民衆から直接コショウを買う許可を求めるフランス人に対して王宮側は、ストックしているコショウが売り切れるまで許可を出さない態度に出た。民衆の価格はバハル当たり32レアルだが、王宮側は64レアルを崩さない。オランダ人とイギリス人は48レアルを提示したものの、折り合いがつかない。

しかし市場では、民衆のコショウが少しずつ流れており、イギリス人がそれを手に入れている。イギリス人はスラッ Surat の商船に商品を売って黄金を手に入れているため、その黄金で市場のコショウを手に入れるという有利な立場に立っている。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (15)」 (2020年08月24日)

1621年5月4日、ボーリウは王に押し付けられて、仕方なくその価格で買うことにした。コショウの重さが計量されて、21バハルをフランス人用に出してきた。ところがなんと、税関長が7%の関税を払えと言ったのである。「王は税金を払えと言っているのか」と港湾長に尋ねると、港湾長は「言っていない」と答えた。市場の倍額で買わされ、さらに税金をむしられるのが最初から分かっていれば、王の押し付けを呑むはずはなかったのに。

税関の役人ひとりひとりも支払いを要求する。かれらは給料をもらっておらず、その 仕事で稼いでいるからだ。おまけに、その稼ぎから王に貢がなければならない。これで バハル当たり金貨一枚が余分の出費になってしまった。

コショウを調べたら濡れている。ボーリウはコショウを用意した男に言った。これは 詐欺だ。おまえの王は交易で詐欺を働く者を許さない。おまえは手足を切られることに なる。

男は顔色を変えて言い訳した。これは置き場所が悪くて雨が漏ったために濡れたのだ。たいへん申し訳ないと言い、ボーリウが更に責めると男は自分のコショウ235バハルを市場価格でボーリウに売った。ボーリウは救われた思いだった。

イギリス人もオランダ人も、王に押し付けられたコショウ300バハルを買わされ、 おまけに税関で追加出費を吹っ掛けられて往生していた。税関はフランス人に与えたの よりもっと過酷な条件をかれらに出していた。 ボーリウ船団の乗組員は大勢が病気にかかり、14人が死亡していた。生き残っている者は病人を含めて65人しかいない。操船に必要な人数にするために、かれはアチェで奴隷にされているキリスト教徒をその主人から金で買った。かれらはゴア・コチン・マラッカから来たヨーロッパ人だ。

7月21日、王はフランス国王宛の手紙を大層な行列と共に送り届けて来た。だがそれは、税関の役人どもに「王への贈り物」をフランス人からむしり取る機会を与えるだけのものでしかなかったのである。

ところがルイ十三世宛のその手紙には、大王としての称号献辞が見られない。160 2年のエリザベス女王からアチェ王への手紙には、女王の大王としての称号献辞が記されていて、これではルイ十三世は大王の膝下にある小王でしかなくなってしまう。ボーリウはアチェ王にフランス国王の地位を説明するために、また王宮に伺うことになった。

アチェを後にした船はクダッ Kedah で積荷を増やそうとしたが失敗に終わり、ふたたびティクに向かった。こうして何とか満足できる積荷を載せた遠征団はスマトラを去って帰国の途に着いた。9カ月の航海の後に1622年12月1日、一隻だけがオンフルール港に帰還したのである。

フランス王国は1664年になってやっと、ルイ十四世の政府が東インド会社を作った。そしてイギリスとオランダの東インド会社の向こうを張るために、オルムズや中国の主要港に商館を開いた。だが東インド会社の商船は三隻しかなく、軍事力はライェ La Haye 提督指揮下の6隻の軍船でロシュフォール Rochefort を基地にし、大砲総数238門、兵員2千1百人が商船の警護に当たった。しかしながらこの海上部隊はコロマンデル沖海戦で粉砕されてしまう。

1670年、フランス東インド会社の遠征団は商船ヴォントゥ―ル Vontour 号でバンテンに向かった。団長はフランソワ・キャロン Francois Caron だ。キャロンはスラッ

で東インド会社所属でない二隻のフランス船を誘い、三隻の船団を組んで1671年7月6日にバンテンに到着した。持ち込まれた商品は小麦粉2百トン、布2千バール、ベチバー根百ピクル、アヘン百ピクルだった。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (16)」 (2020年08月25日)

キャロンのその行為はフランスの威勢を見せつけんがための振舞いと解釈された。その時バンテンにいたイギリス人は次のように書き残している。「キャロン氏はたいへんな華麗さをもって、ここにやって来た。20人の警護兵と一団のラッパ鼓隊ばかりか、ご本人は盛装した騎馬隊を引き連れていたのだから。」

後にポンディシェリ Pondichery を建設するフランソワ・マルトン Francois Martin は皮肉な口調で、「本当は一隻でやってくれば十分だったのだ。キャロンはバタヴィア の表門で新しい強大な勢力の出現を演出したかったのだろう。」と述べている。

キャロンはまずバンテンの港湾長カイツ—Kaytsuの出迎えを受け、船で川をさかの ぼって王宮に向かった。カイツーはムスリム華人だ。王宮では、バンテンの統治者スル タン・アグン・ティルタヤサ Sultan Ageng Tirtayasa への挨拶と贈り物で終わった。

フランス人は上陸してバンテンのプチナン Pecinan (華人地区)に居所を構えた。7月16日、バンテン王は50人の近衛兵を従えてフランス人の居所を訪れた。キャロンは百人の水夫を整列させて王を迎える。キャロンはバンテンにフランス商館を開く許可を願い出た。王はキャロンに尋ねた。フランス人の商業会社の目的は何なのか?船団の目的地はどこなのか?何を買い付けたいのか?持参した現金はどれほどあるのか?

翌日からフランス人の商活動に熱が入った。小麦粉はバタヴィア在住のフランス人フレイバーガーvrijburger (VOCの拘束を受けない自由市民)が買った。バンテンではアヘンの流通が固く禁じられていたため、かれらはアヘンをどうすればよいのかを思案した。

キャロンはダマル樹脂、スラッ製大型机ふたつ、大型鏡ひとつ、銃1ダース、ワインなどの王への贈り物をたくさん持って、王宮を訪れた。そしてフランス人もイギリス人と同様の待遇と特権を与えられることが約束された。王はフランス人に5軒の小さい家屋を与えた。もちろんプチナンの中だ。

キャロンは8月末にヴォントゥ―ル号ともう一隻を率いてバンテンを後にし、スラッに移った。船はバタヴィアの華人から買った砂糖が満載された。バンテンの砂糖はイギリス人が買い占めたために、バタヴィアまで買いに行かざるを得なかったのだ。残ったもう一隻はコショウが満載されるのを待ってバンテン港にとどまっている。

フランス商館はランプン産コショウ2千5百バハルを買付て船に積み、船は10月3 1日にバンテンを出港した。フランス遠征団のお偉方たちもほとんどが去って行った。 商館に残ったのはジョン・バティスト・ギロン Jean-Baptiste Guilhen を筆頭に、もう ふたりの幹部、そしてふたりの商館員と8人ほどの警備兵だけだった。

フランス人は粉コショウを作るための風車を建設し、その新テクノロジーが大評判を 巻き起こした。しかしその一方で、オランダとフランスの戦争が始まるだろうという予 想がバンテンに広がって行った。VOCはバンテン王がフランス人を使ってバタヴィア に歯向かってくることを想定していたのだから。

1672年3月29日、フランスとイギリスは、同盟してオランダと戦うことを決めた。その結果、フランス人はインドとセイロンでオランダと戦争している。そのとき、トリンコマリーTrincomalee とマイラプール Meilapur の沖で行われた海戦でライェ提督指揮下の船隊はレイクロフ・ファン・フンス Rijckloff van Goens の指揮するオランダ船隊に敗れ、大勢のフランス人が捕虜になり、捕虜はバタヴィアに運ばれた。捕虜は

バタヴィア港の埠頭で監禁され、またバタヴィア市内に前から居住していたフランス人 もスパイ容疑で全員が捕らえられた。

華人が寺院を建てて宗教祭祀を行っていることを知ったフランス人は、カトリックの 礼拝所を商館内に作って宗教祭祀を行う許可を王からもらい、ポルトガル人神父アント ニオ・ドゥ・ジェズ・フェルナンデス Antonio de Jesu Fernandes をその仕事に就かせ た。この神父はバンテンがオランダに占領されたときにバンテンを退去している。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(17)」(2020年08月26日)

1672年4月30日、スラッからヴォントゥ―ル号が鉄棒1千本を運んできて、港湾長カイツ―に売った。その船で新フランス商館長ヴィリセル Viricel もやってきた。 新商館長はギロン以外の幹部ふたりを業務に不熱心であるという理由で左遷し、ギロンを副商館長に任命した。

6月末に別のフランス船がバンテンに入港し、荷を得て10月に出港した。そのころ VOCは8~9隻の船をバンテン沖に配備して海上封鎖を行っており、トンキンと台湾 から来たイギリス船3隻が拿捕されている。フランス船は一旦は無事にバンテンから遠 くまで離れたものの、船長が病死してしまったためにバンテン港に戻って来た。その行 為はVOCの鹵獲船を増やすだけのことでしかなかった。

ヴォントゥ―ル号も同じころにバンテンにやってきて、コショウを積み込み、またバタヴィアの華人商人から日本産の銅を買ってバンテンを去った。ヴォントゥ―ル号はVOCの海上封鎖を巧みにくぐり抜けている。

そんな事態をバンテン王宮が黙って見ているはずがない。VOCのバンテン封鎖は交戦国イギリス・フランスへの単なる敵対行動ではないのである。それは独立王国バンテンに通商目的にやってくる船に対する明らさまな妨害行為であり、VOCがバンテンの国力を殺ぐことを副産物にしようとしているのは疑いないことだったのだから。イギリス・フランス以外の船であろうと、VOCの武装船に捕まるとバンテンをやめてバタヴィアへ行くように強制された。

バンテン王国は11月から持ち船の武装強化を開始し、12月に入ると海岸線に2キロに渡って設けられている石造りの防壁の改修工事にとりかかった。サンゴ岩が焼かれて石灰が作られ、それで石をつなぎ合わせるのである。大砲の台座にするため、華人木工屋に木製荷車が何百台も発注された。イギリス人はスルタンに大砲27門と火薬を寄贈した。戦争に従事させるため、身体強健な者の徴兵検査が行われ、同時に戦費を支えるために社会に新税が課された。バンテン在住のVOC代表者は閉門蟄居が命じられ、百人の兵士による厳重な監視下に置かれた。

そのころ、バタヴィアでは抑留されていたフランス人兵士らが少人数のグループで少しずつ解放され始めた。まとめて解放すれば反乱を起こすおそれがあるためだ。だがVOCの本音は多分、無料で食べ物を捕虜に供与する費用を惜しんでのことだったのではあるまいか。

かれらは続々とバンテンにやってきたし、またVOCに雇用されていたフランス人も VOCを脱走してバンテンに来た。オランダ側に就いて同胞に銃口を向けるようなこと をしたくなかったのだろう。

そんなこんなで、1674年2月のフランス商館居住者は50人に達し、更にその年 10月には118人を数えた。その間、事実上ギロンがフランス商館責任者として采配 を振るっている。

だが1674年7月末にVOCがバンテンの海上封鎖を解除したことで、大戦争勃発の危機は回避された。その裏側にはイギリスで議会の突き上げに押された国王チャールズニ世がイギリス=オランダ間の和平条約に調印していた事実があったからだ。だがイギリスが手を引いたからと言って、VOCのフランス人に対する態度も軟化したというわけではない。フランス人に対して、更にはバンテン王国に対して、VOCの圧力は強まりこそすれ、扱いにたいした変化は見られなかった。バンテンに大量に溜まったフランス人はイギリス船でバンテンから運び出されて行った。

1678年9月17日にオランダのネイメーヘンで和平条約が結ばれたが、バタヴィアのVOCがフランス人への圧力を緩めたのは1679年6月であり、和平条約の公表は8月1日にやっとなされた。実際に和平条約がヨーロッパで結ばれても、ほとんど一年間VOCはそれを無視したということだ。バンテンのフランス商館はようやく普通の商活動ができるようになった。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (18)」 (2020年08月27日)

バタヴィアのフレイバーガーで、バンテンに逃れて来ていたエチエンヌ・ジュアンニ Etienne Jouanni がジャワでの取引を再開させる意向をギロンに語り、ギロンは始末に 困っていたアヘンをジュアンニに預けることにした。ジュアンニはそれをジュパラで売り払う計画を立てた。

ところがその道中でジュアンニの隊商は、マカッサルからマタラム王国を荒らしに来ていたブギス人戦闘部隊の攻撃を受けて荷物はすべて略奪されたのである。その損害はフランス商館の損失を肥大させたことから、フランスの本社におけるギロンの評価は悪化した。

1979年12月末、フランス船到来を前にしてギロンは大量のコショウ、種々の布類、龍涎香などを仕入れた。最初にやって来たフランス船はトンキン号で、バンテン経由トンキンを目的地にしていた。他にもヴォントゥール号を含めて二隻がばらばらとバンテン港に到着した。それらの船は陶器・白檀・ミョウバン・銅そして錫と鉛などを積んで来た。ヴォントゥール号の目的地はシアムSiamであり、シアムにフランス商館を開設する使命を帯びていた。運よくその目的は達せられ、シアムの使節がフランスを訪れることになった。

フランス国王夫妻と宮廷そして政府の要人たちのための大量の贈り物を積んだヴォントゥ―ル号がバンテンに戻って来た。贈り物の中には雌雄一対の若い象まで入っていたのだ。だがヴォントゥ―ル号はそんな大量の人と荷物を積んでインド洋を渡るには小さすぎたのである。使節一行はフランスに戻るもっと大型の船がバンテン港を出るまで、待たされた。

ギロンはその高貴な一行を処遇するために、またまた心労と疲労を重ねることになった。一行は9月に大型船でバンテンを去った。

ギロンは病気にかかって業務を休まざるを得なくなった。ギロンの心は故郷フランスへの帰心矢のごとしだったものの、また思わぬ事態の変化によって、かれの帰国は混乱の渦に巻き込まれてしまう。

王位を息子に譲ったスルタン・アグン・ティルタヤサと新王スルタン・ハジの間で抗争が始まったのだ。前王は譲位相手を間違えたと思ったのだろう、新王を退位させて別の息子を新スルタンにしようとしたが、既に新王として即位したスルタン・ハジは王国の主として父親が強いる退位に応じようとしなかった。

抗争は武力闘争に発展して、バンテン市内も戦火にさらされてしまう。バンテン王国 を牛耳ろうとしていたVOCがこのチャンスを放っておくはずもない。VOCがスルタ

ン・ハジをそそのかしたという話もあるくらいで、父親の側に着いた兄弟一族対スルタン・ハジ+VOC連合軍という戦争への道を、事態は歩んで行ったのである。

15万人の住民を擁していたバンテンの町から、住民の姿が消えた。家屋は燃やされ、兵隊か、さもなければ命知らずの男たちによって残されていた財貨が略奪された。 バンテンにいた外国人商人の中には、バタヴィアに難を避けた者も少なくない。だがフランス商館を預かるギロンにそんなことはできなかった。バタヴィアにフランス商館を置かせるようなVOCであれば、バタヴィアの発展など夢物語だ。

町中にある商館は略奪者にとって絶好のターゲットになる。ギロンは海上の方が安全 だろうと考えて、バンテン港に停泊中の船に頼んで商館の財産を預けた。ところが停泊 中の外国船にまで略奪の手が伸びて行ったのである。こうしてバンテンのフランス商館 はあらゆるものを失い、バンテンにおける短い歴史を閉じた。

戦火の下を生き永らえたギロン自身も、1682年5月27日にバンテンを去ってバタヴィアに移った。VOCの操り人形になったスルタン・ハジが出した全外国人の追放命令がギロンのバンテンにおける14年間の歴史さえ奪ってしまったのだ。スラッからバタヴィアにフランス人を迎えに来たヴォントゥ―ル号に乗って、ギロンは東インドを去った。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(19)」(2020年08月28日)

フランスに戻ったギロンは、それでも東インド会社から与えられるであろう表彰と報酬に一縷の望みを託していた。ところがパリの本社でギロンが受けた待遇はかれのあらゆる希望を打ち砕いてしまったのである。

会社役員会はギロンを尋問した。そして全財産を商館に保管してそれを守るための努力を払おうとせず、財産すべてを外国船に預け、おまけにポルトガル船に預けたために

商館の全財産が失われたのだとギロンの処置を非難した。ギロンは会社に対して全損害の弁償を命じられ、14年間のバンテンにおける汗と涙と血の代償は一瞬にして消え失せてしまった。

まだヨーロッパの知識になっていない土地をこの脚で訪れ、その地に暮らすひとびとの営みをこの目で見たいという知性の欲求に駆られて、軍船を降りたフランス海軍少尉が密かな放浪の旅に出た。言うまでもなく、それは脱走行為に該当する。

1740年トゥールーズ Toulouse に生まれたピエール・マリー・フランソワ・ドゥ・パジェ Pierre-Marie Francois de Pages は17歳でフランス王国海軍に入隊し、剣と弾丸の中を何度もかいくぐった経験を持ち、26歳で少尉に昇進した。

パジェの乗った軍船ラデデニューズがサントドミンゴに停泊中、かれは船を降りて無断で旅に出た。1767年6月のことだ。最初かれはアメリカ大陸のルイジアナに向かった。

次いでヌーヴェルオレオン Nouvelle-Orleans を経て西に向かい、テキサスのレッド リバーをも渡った。その間かれはアメリカインディアン・クレオール・スペイン人らと 生活を共にし、ひとびとの暮らしを観察した。メキシコに入ったのは1768年2月2 8日だった。かれはヌーヴェルオレオン以来3千2百キロを踏破したことになる。

3月24日にアカプルコに達すると、太平洋を横断する船を探した。船は4月2日に 出港した。百人を超える乗客が乗った船は6月10日にグアム島に着いた。グアム島は 当時幹線航路から外れた島であり、その船は8年ぶりにこの島を訪れた珍しい船だった ようだ。船は更にフィリピンを目指し、パジェはサマール島で降りてから6月15日に マニラに入った。

7カ月間のマニラ滞在中、かれは原住民と共に暮らすことを望み、その生活を観察した。かれはこう書いている。

ここでは男も女も半裸で暮らしている。かれらの茶色い肌が天然の衣服のようなものなのだろう。家族はたいへん仲が良く、寝る時は全員が同じ部屋で眠る。かれらの顔つきは明るく、節度があり、他人に手を貸すことを厭わない。ただ、好奇心があまりにも強すぎる。暮らしぶりは質素で勤勉であり、礼儀正しく、話す口調も奥床しい。ムスリム海賊の跋扈だけが最大の瑕疵である。

パジェはほんの数日で原住民の言葉や習慣を理解し、そこでの暮らしにあまり困らなかったようだ。

当時のマニラは住民人口80万人の大国際都市で、東インド人・華人・ムラユ人・シアム人・インド人・アルメニア人・ユーラシア混血者・日本人などが入り混じって暮らしていた。街並みは美しく整然としており、平屋の豪邸の並びにはスペイン人が住み、別の場所には賑やかな原住民居住地区がある。華人は広東や金門出身者が2万人ほどいて、カトリック教徒として安全に暮らせるマニラー帯に移住して来た者たちだ。パジェはかれらをトップクラスの商売人と見た。もちろんそこには密輸や闇取引も含まれている。華人は愉快そうなフレンドリー表情で他人を丁重に遇し、どんなことでもすぐに自分の身体を動かして即座にそれを行う。熱帯に住む人間の怠惰さはかれらにない。

マニラには毎年、中国のマカオ・広東・金門間を5~6隻の船が往復し、もう一隻はシアム~インド、更に一隻はバタヴィアに往来している。1769年3月7日、パジェはバタヴィアに向かう船でマニラを去った。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (20)」 (2020年08月29日)

マニラからバタヴィアに向かった船はどこにも寄港せずに4月15日、バタビア港に 到着した。パジェがバタヴィアで受けた印象はマニラと大違いだった。マニラで接した 原住民の暮らしぶりは明るく陽気で、楽しそうに生きているというのに、バタヴィアの 町は硬く重苦しい空気に包まれていたのである。 マニラのスペイン人と違ってオランダ人は原住民と混じり合って生活することができないのだ。オランダ人は虚偽に満ちた、人間性に欠ける極端な統治方法を執り、通商保全のために硬軟あらゆる手を使い、地元民と頻繁に戦争を行い、バタヴィアの周辺社会とも緊張状態を続けている。通商に使われるべきエネルギーが抗争で使い果たされたなら、オランダVOCは早晩この地から消滅するしかないだろう。

パジェの観察は決してかれだけのものでなかった。非オランダ人でかれと類似の観察 をした者は何人もいる。

パジェは城壁に囲まれたバタヴィア城市の内外を歩き回った。城市の外を囲む地区をかれは三つに区分した。ひとつはポルトガル系とインドのマラバルやベンガル系住民の地区で、道路や家屋はオランダ様式の影響を受けている。もうひとつはたいへん広いエリアで、華人街になっている。このエリアはたいへん活発で、また生活技術のレベルが高い。金持ちの家は別にして一般庶民の家屋はたいへん質素であり、ほんのあり合わせで作ったようなものだ。家屋が密集してスラムを形成しているため、道も狭い。住民が作った物があちこちに置かれている。

三つ目の地区は居住者がまばらな、もっと広大なエリアで、そこに住んでいるのは東インド島嶼部のプリブミであり、ジャワや他の島々の原住民やインド人商人たちだ。このエリアの家屋や庭園はオランダ人金持ちのものと違わないくらいきれいでよく手入れされている。原住民の暮らしはたいへんシンプルで、食事は飯と果物を食べる。衣服も質素だ。

オランダ人の家屋は大きく快適で、表にベランダを持ち、庭園は自然が一杯で川が引かれて小島が浮かんでいる。これまでのやり方に反してパジェは、バタヴィアでだけは 原住民の暮らしに入ろうとせず、ヨーロッパ人の家で暮らした。

アジアの女はあまり家から外に出ない。華人はたいてい結婚相手の女性をほとんど知らないで妻にする。結婚が決まった娘がいる家は窓に花を生けた花瓶を置いている。

ジャワ人は身体が大柄で、心優しく、顔つきは柔和だ。フィリピンの原住民よりもジャワ人のほうが高貴な様相をしている。ムラユ人は小柄で太っており、目つき顔つきはあまりフレンドリーでない。

オランダVOCがこの東インド島嶼部をあらかた支配下に収めているというのに、オランダ人は落ち着いて統治行政を行い、通商に精を出すことをせず、原住民との抗争や戦争に明け暮れていることをパジェは不可解な思いで眺めた。かれはフィリピンで見たこととそれを比較する。

スペイン本国とフィリピンのスペイン人は同一宗教である原住民の民生を保護して、原住民と一体になったコロニーを作ろうとしている。そのため、スペイン人と原住民の結婚を庇護こそすれ、阻害したり困難さを与えようとはまったくしない。反対にバタヴィアではオランダ人が優良人種で統治支配者であり、社会の中で劣等人種との間に格式の差を設けている。その人種差別がマニラの顔とバタヴィアの顔の間に違いを生んでいる。

そのパジェの分析はバタヴィアに関する限り、その後の歴史が証明して見せているようだ。1769年8月2日、パジェはバタヴィア港からイギリス船に乗ってインドを目指した。かれの世界一周の旅は1771年12月5日にマルセイユに帰還して終わりを告げた。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (21)」 (2020年08月30日)

パジェより一足先にバタヴィアを訪れたフランス人がいる。それはルイ・アントワン・ドゥ・ブーゲンヴィル Louis-Antoine de Bougainville。かれは元々パリの弁護士

事務所で弁護士をしていた人間だ。その後、フランス王国軍に入り、ルイ十五世の親衛 隊船長を務め、北米でのイギリスとの戦争に従軍した。

かれはマゼランの世界周航を真似たいという念願を抱き、純然たる学術を目的とした 世界周航の実現を国王に説いて賛同を得、国家行事として1766年12月に二隻の船 団による世界周航の途に着いた。

大西洋を縦断してからマゼラン海峡を通過し、42日目にタヒチ島に到着。そこで十日過ごしたあと、マルクへは2カ月の航海だった。その途中、頂上が厚い雲に覆われた5千メートル級の山を擁する山脈が浮かんでいる大きな島の脇を通過した。海岸線は荒れ地で何も栽培されておらず、果実を育む木も見当たらない。島があると乗組員たちはその姿を眺めるために船端に集まって来るのだが、なにしろ45人が壊血病で倒れ、柑橘類とワインで闘病中だったから、船は静かに進んでいるばかり。その島がパプア島だった。

すると突然、両舷側にアウトリガーを装備した手漕ぎの小舟が出現した。真っ黒い男がひとりでそれを漕ぎ、男の鼻には黄金のリングがきらめいている。そばに乗っている数人の男たちは武器として槍を持っている。かれらは少量の水と、かれらの食糧と思われる粉状のものを持って来た。他にも果実や芋類がある。だが残念ながら、それでは少なすぎるのだ。

乗組員たちはハンカチー枚と小さい鏡を一個かれらに代償として与えた。多分かれら にとっては少しも珍しい物でなかったにちがいない。かれらはゲラゲラと笑い転げてい た。

8月31日、セラム島が見えて来たので、二隻はオランダ国旗を掲げた。ところが港に接近してから、陸上の様子がはっきりとわかった。島の中は戦争状態だったのである。原住民がオランダ商館を焼き討ちしてオランダ人を島から追い出した直後に二隻が

やって来たということだ。二隻は仕方なくブル島カイエリ湾に船首を向けた。そこには オランダ商館がある。

カイエリ湾で錨を下ろすと、VOCの軍服を着た丸腰の兵士がふたり、小舟でやってきてかれらの規則を言い立て、来航の目的を尋ねた。VOCの船舶でない船はアンボン島の行政長官の許可なくこの地域に来航してはならない。

建前の演技はそれで終わり、VOC兵士はここの商館長宛に航海経路・現在の状況・ 航海目的などについて手紙を書けと言う。ブーゲンヴィルの書いた説明書を兵士は持ち 帰った。結局ブーゲンヴィルと幹部数名に上陸許可が下り、商館長の事務所兼邸宅に招 かれた。その邸宅はいささか中華風建築様式で建てられ、小川が走る美しい庭園に囲ま れており、そこから海岸へ小道が伸びている。邸内では中華服を着た商館長の妻と娘た ちが中を花などで飾るのに大忙しの態だった。家具類も中華風のものだ。

商館長はバタヴィア生まれで、かれはアンボンの欧亜混血女性を妻にした。晩餐が供され、たいへん強いビールが出された。一行はそこに滞在中、鹿の肉を堪能した。しかしパンはなく、飯で代用せざるを得なかった。この地で作られるパンはサゴの粉を使ったものしかできない。

9月7日、一行はカイエリ湾を出帆してバタヴィアに向かった。スラウェシ島沖を航行し、バタヴィア湾に散らばる1千の島々に達してから港に向かい、バタヴィア城市内の教会の尖塔が視野に入ったのは9月28日のこと。

東風の季節から西風の季節に移り替わる時期が疫病の隆盛期であることを慮って、ブ ーゲンヴィルはしばらく様子を見るためにエダム島の近くで停泊することにした。

[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (22)」(2020年08月31日)

バタヴィア湾にはVOCの船が十四隻ほど停泊している。沿岸警備の小船がフランス 船に近寄って来て、オランダ語の文書をいくつか示し、来航の目的を質問した。

フランス船の目的を知ったファン・デル・ルイス Van der Luys 港湾長はVOC東インド総督に会うよう勧めた。港湾長がオランダ国旗への敬意を表して礼砲を十五発撃つようブーゲンヴィルに求めたので、ブーゲンヴィルも同じことをフランス国王に対して行うよう要求した。港湾長はフランス船のためにさまざまな飲料と食材を用意してくれた。

さて、ファン・デル・パラ Van der Parra 東インド総督はバタヴィア城市から12キロほど離れたヴィラで休養中とのことであり、太陽が昇ると暑くなるから、訪問は朝早ければ早いほどよい、と港湾長は言う。総督はフランス人を歓待してくれた。VOC上級幹部たちもフランス人を公式晩餐に招いてくれた。政務長官、最高裁長官、海軍副司令官たちだ。フランス人一行は家を一軒借りて住み、バタヴィアで唯一の乗り物である馬車を使ってその地を見て回った。馬車は二頭立てだった。

ヤカトラ Jacatra 通りにある上級幹部の邸宅は、すばらしい環境の中だ。運河沿いの 広い道路に大きい街路樹が日陰を作って並び、パリの一級道路に匹敵する素晴らしさで ある。

VOC側の歓待は続き、城市内の邸宅や城市外のヴィラで余興にコンサートや演劇鑑賞まで楽しませてもらった。演劇はオランダ人や華人の芝居だった。オランダ人のヴィラは美しい庭園に囲まれて、中は涼しく心地よい。フランスのヴィラもこれには及ばな

い。ただ問題は城市内の運河を流れる水が腐っていて臭いことだ。おまけに湿気が強くてヨーロッパ人の健康には最悪である。

街並みは整然としている。建物はいつやって来るか分からない地震にそなえて、二階建てのものまでしか建てることが許されない。しばらく前からVOCは社員の私的な取引を禁止した。社員の行う取引はすべて会社のためでなければならないのだ。更にVOCのために働いているすべてのヨーロッパ人は、本国送金をすべて会社を通じて行うよう義務付けられた。会社はヨーロッパへの送金に上限金額を定め、そして8%の口銭をかける。もちろんヨーロッパへ行く人間に、密かに現金を委託することは不可能ではない。しかし東インドVOCが流通させている現金は独自のものであり、すぐに分かる。ヨーロッパで使うことはできず、両替が不可欠になるのだが、両替時に28%が割り引かれるから、馬鹿なまねをする者はいない。

ブーゲンヴィルが見たバタヴィアの印象は、パジェの受け止めた印象とほとんど違わなかった。バタヴィアほど社会階層が明確に区分されている土地は世界のどこにもないだろう、とかれは書いている。

ひとりひとりの人間がそれぞれの社会的ポジションに置かれ、社会的にそれを明瞭に示すシンボルと社会ビヘイビアを世間に表すことが厳格に行われている。ピラミッド構造の頂点は総督であり、イードゥルヒールズ edel-heers の称号で呼ばれる。その下が東インド参議会議員、最高裁判事団、宗教機関トップであり、VOC幹部社員、海軍士官がその下にいて、一般の兵隊たちは最下層だ。軍人がピラミッド構造の上部に置かれたことはない。

その理由は簡単だ。VOCは会社なのであり、軍隊は会社の下部構造における現場の 武力行動を担う機能しか持たないのだから。おまけに兵隊の大半は非オランダ人なので ある。 東インド参議会は総督宮殿で週二回、議会を開く。参議院は総勢18人だが、喜望峰・セイロン・コロマンデル・ジャワ島東部・マカッサル・アンボンなどの地域行政長官が含まれていて、全員がバタヴィアに住んでいるわけではない。

ピラミッドの上部にいるひとびとは黄金で装飾された馬車を持ち、路上を通行するときはふたりの使用人が馬車の前を走って路上の人間を脇へよけさせ、馬車の露払いをするようなことが許されている。路上でかれらの馬車に出会った下層の馬車は、必ず停車して通行の邪魔にならないようにしている。路上にいる人間は男も女も必ず立ち上がって、黄金の馬車に敬意を表さなければならない。総督だけが黄金で飾られた馬車を6頭の馬に引かせている。総督の馬車がやってくれば、自分の馬車に乗っている者も全員が馬車から降りなければならない。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(23)」(2020年09月01日)

バタヴィアで一番人気の役職は港湾長だ。港湾長は外務大臣に似ている。バタヴィア には港湾長がふたりいて、ひとりはキリスト教徒を扱い、もうひとりはインド人や華人 を担当している。つまりはヨーロッパ人とアジア人が区別されているということだ。このバタヴィアというヨーロッパ人コロニーには華人が10万人住んでいる。

ジャワ島にはVOCの直接支配下にない、独立している王国が三つある。マタラム王国、バンテン王国、チルボン王国がそれだ。行政上は独立していても、統治者はVOCに服従している。それらの独立地区にはすべてVOCの出先機関が置かれ、要塞を構えて軍隊が駐屯している。VOCは米・砂糖・鉛・アラッなどをVOCの求める量と価格でそれらの独立地区から買い上げ、アヘンをかれらに売る。これは実に大儲けの商売である。

テルナーテ・ティドーレ・アンボン・バンダ・セラムなどからスパイスがバタヴィアに送られてくる。そしてヨーロッパの需要を満たすに足る量をたくさんの船に積み込んでヨーロッパに積み出す。バタヴィアはその中継港なのだ。その年の分の積み出しが終われば、まだ倉庫に残っているスパイスはすべて焼却される。

各地のオランダ商館を守護する要塞に駐屯している守備隊の戦力は、アンボイナでは 指揮官の大尉とふたりの砲兵士官が兵士 1 5 0 人の指揮を執っている。バンダは大尉ふ たり、少尉ふたり、砲兵士官ひとりで兵員 3 百名を指揮している。テルナーテの守備隊 は大尉ひとりと砲兵士官ひとりが兵員 2 5 0 人を指揮している。マカッサルでも 3 百 人 の兵員を大尉と少尉が各ひとり、砲兵士官がひとり指揮している。

ブーゲンヴィルはその戦力図をVOCの弱点と見なした。そんな防衛力では、本格的な攻撃を受けたときにスパイス産地は容易に敵の手に落ちてしまうだろう。ましてや兵員の多くは外国人傭兵なのであり、しかも不健康な熱帯での不健全な生活で、戦闘もないのに多数の兵士が死んでいる。

そんな脆さにも関わらずVOCがスパイス貿易を独占できているのは、ひとえにヨーロッパ諸国の無知が大いなる援軍をVOCに与えているからだ、とかれは感想を述べている。

巨大な島スラウェシとボルネオはVOCに黄金・絹・貴木・ダイアモンドを提供し、 VOCはインドやヨーロッパ産の鉄や綿その他の商品でそれを手に入れている。

スパイスに関してVOCは、シナモンはセイロン産をメインにし、ナツメグはアンボン、クローブはバンダで、12月から収穫期に入る。1月にバタヴィアから船がやってきて、4~5月にバタヴィアに戻る。

スパイス生産は世界の需要をしのぐ量があり、そのためにVOCは定期的に産地の木を伐採して減らしている。それらのスパイス産地で業務に携わっていた社員が退職するとき、会社は地図・海図・測量図その他の資料をすべて会社に返却させ、文書は何も持っていないことを誓約させてはじめて退職させている。

10日間のバタヴィア滞在でブーゲンヴィルは歓待を愉しんだものの、乗組員がさまざまな熱帯病に倒れて死亡する者が続出したため、このヨーロッパ人の墓場を早く退去しなければ世界周航が果たせなくなると考え、かれは早朝5時に出港した。船隊は1769年3月16日にサンマロに到着し、1766年12月にノンツ Nantes を出て以来2年4カ月をかけたフランス人の世界周航が完結した。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(24)」(2020年09月02日)

フランス人文学者もヌサンタラにやってきた。代表格は詩人アルチュール・ランボーArthur Rimbaud だろう。ランボーの東インド植民地軍脱走物語は拙作「ニャイ~植民地の性支配」 < http://indojoho.ciao.jp/koreg/libnyai.html >に述べられているので、ご参照ください。

ランボーの逃走経路について「ニャイ」では、かれはサラティガからスマラン港まで 徒歩で移動し、スマランからバタヴィアへ船で密航してから、オランダ以外の船に乗っ た可能性が語られているが、かれはもっと危険の少ない方法を選択したそうだ。

ランボーはスマラン港からブラウン船長が指揮するイギリス船 The Wandering Chief 号にエドウィン・ホームズの偽名で乗船し、99日後の1876年12月6日にアイル

ランド南岸のクイーンズタウンで下船した。そしてその年12月31日、かれは出生地 シャルレヴィーレにある一族の家に姿を現したのである。

オノレ・ドゥ・バルザック Honore de Balzac はジャワ島への旅を著わした。183 2年11月に出版された「パリからジャワへの旅 Vorage de Paris a Java」には、ジャワの様子が詳しく叙述されている。

折りしも、ジャワ人画家ラデン・サレがヨーロッパの画壇に登場して大センセーションを巻き起こしていたころであり、ヨーロッパがアジアに目を向けてアジアに関するさまざまな情報知識がブームになりつつあった時代だ。バルザックはこう書いている。

ヨーロッパ人、中でも詩人にとって、ジャワに匹敵する垂涎の地は他にない。まず第一に、ジャワ女性はヨーロッパ人に首ったけなのだ。ジャワ人の家庭を形成しているジャワ女性という魅惑的な存在を描くなら、かの女たちはたいへん色白できめ細かな肌をしており、顔も色白で漆黒の眉毛と茶色の目がアクセントを添えている。髪の毛の美しさは比類がない。ジャワ女性の濃くて香りのよい髪を一度でも撫でて見れば、ヨーロッパ女性が帽子の中に隠しているあの髪への尊重心は霧消してしまうことだろう。ジャワ女性はたいていが金持ちで、未亡人だ。

ジャワ女性たちの感情を押し隠したりあるいは心中に恨みを潜ませる能力は、ヨーロッパのどの女性よりもとびぬけている。かの女たちはあなたを丸ごとわが物にすることを望み、自分の競争相手に対してあなたがちらりとでも一瞥したなら、あなたへの赦しは決して与えられない。そのような快楽はざらにあることでなく、またたいそう危険なのだから、その快楽の深さは十分に想像がつこうというものだ。

その奇跡の島では、すべてが調和し、すべてが生を輝かし、それを呑み込み、そこから戻る者に死をもたらす。ワイン・コーヒー・茶・アヘンは腹にもたらされた衝撃を通

して直接脳に作用する、われわれの精神の抽象性にのみ和合する重要な四つの刺激剤である。

あらゆる快楽はひとつになった。ジャワ女性・花・鳥・香料・太陽・空気・全魂をひとつひとつの意味に注入する詩。わたしが東インドから戻って以来、それらはわたしの言葉に溶け込んだ。

ジャワで死ぬ者は幸いなるかな。言うまでもなく、生の問題は存命期間でなくクオリティ、つまり種々の感覚にある。だから、すべての民族が出会い、永遠の廉価な市場、自ら何層倍もの楽しさを持つ、いつも緑で多様な魅惑の島には、あらゆる種類の伝説の場所がある。情緒および快楽と危険に満ち溢れているため、われわれの心は共鳴する。東洋世界に著作家が少ないのはそのせいだ。

そこでは、他者と交わることができるように、ひとはあまりにもたくさん自分自身のことを考えて生きている。もしもその地にあるのが感情だけなら、考え込んでも何の役にもたたないのだ。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(25)」(2020年09月03日) バルザックの話は続く。

わたしがジャワでまだ長くないころ、この土地の不思議な話を聞いた。地上にあるその種の樹木ではそれが唯一のもの、つまりウパス upas の木の話だ。その実はジャワで行われている慣習の中で、きわめて大きい役割を果たしている。ジャワの伝統によれば、その木は煮えたぎっている火山の中心部に植えられる。その場所で自然は火山にた

いへん危険な元素を排出させ、それが含んでいる毒素はその木に吸収されて継続的な同 化作用が進行する。どんな科学者の空想的な頭脳も大自然に、その木に、そのたった一 枚の葉にすら及ばないのだ。

ナイフをウパスの樹皮に力いっぱい突き立てるだけで、ナイフにはその瞬間にシアン 化水素酸の汚染作用が起こる。その有毒な鋼が人間の皮膚にちょっとでも刺されば、被 害者は痙攣や痛み苦しみを少しも示すことなく、即座に崩れ落ちる。人間に死をもたら すのは鋼を汚染したその樹脂だけではない。その木全体が絶えず猛毒の気体を吐き出し ているため、ナイフをその木に突き立てたい人間は素早くそれを行って木から離れない と、突然死体になっている自分を見出すことになる。そうならないように、風上でそれ を行うのが常識なのだ。吹き抜ける風がその木を通った場合、風は何百メートルも毒素 を運んで行く。風上でナイフを有毒なものにしようとしていたジャワ人も、突然風向き が変わったら生きては帰れない。

鳥も動物も、すべての生き物がその危険を知っており、その死の玉座を冒そうとしない。木の根幹から枝が生えて周囲に広がり、恐怖の領域を拡大して行く。周辺を通る人間はますます減少し、木は自己の領土を確保する。周辺に何もない空間に一本の巨木が鎮座して辺りを睥睨しているのは、あたかも一瞥で不徳の者の生命を失わせる古代アジアの王のイメージを彷彿とさせている。

わたしはその木を見に行った。わたしは可能な限りの用心深さで風下から向かった。 ウパスの木が持つ死の勢力範囲の境界線から木を見たとき、わたしの心は震え上がっ た。あんなにすさまじく怖ろしい光景をわたしは見たことがない。聖書に出て来る死体 投棄場所や文学者が描く空想の屍に満ちたシーンなど、ものの数ではなかった。

あたかも死の大王の権勢を示すかのように、大量の白骨がウパスの木の周りをまるで 壮麗な王冠のようにびっしりと取り巻いていたのだ。幹の近くには、白骨がまるで積み 上げられているかのようなものもあった。屍は分解する地虫もいないまま、ただ風化の 時を待っているばかり。白骨は東インドの強い日差しを受けて、光を反射していた。陽 光はさらにすくみ上がるような怖ろしさを現出している。天を見上げて呪いを発してい るように見える死体の眼はまるで燃えているように輝き、歯は無念の悔しさをかみしめ るかのように固く結ばれている。このサーカスの輪に入れ。観衆も、ましてや演者もい ないこのサーカスに。

世にも怖ろしい静寂を、白骨の擦れ合う音が破る。こんな光景を世界の他の場所で探して見るがいい。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (26)」 (2020年09月04日)

オノレ・ドゥ・バルザックはジャワへの現実の旅をしたことがないのは、つとに知られていることだ。かれはその時代に集められるだけのジャワに関する情報を集め、椅子に座って空想の翼を羽ばたかせたのである。

ちなみに upas というジャワ語は毒を意味している。この毒の木 pohon upas の伝説がはじめて世に登場したのは、1318年ごろにローマ法王の命によってアジアを旅したフランシスコ修道会の修道士オドリコ・ダ・ポルデノーネ Odorico da Pordenone の旅行記の中だ。

数人の旅人が休息しようとして、広い場所にある巨木の下にやってきた。ところがほんの一分も経たないうちに、ひとりが倒れて死んだ。ほかの旅人たちは蜘蛛の子を散らすようにそこから逃げ出したが、ひとり、またひとり、と巨木からあまり離れないうちに地面に倒れて死んだ。

その巨木、ウパスの木の話はヨーロッパ人に格別のセンセーションを感じさせたようで、何百年にも渡って再生産され続けた。17世紀後半にはドイツ人植物学者ルンフィウス George Eberhard Rumphius がVOC社員時代にマカッサルでウパスの木の幹のサンプルを入手した。かれの歴史的大作「アンボンの植物」にもウパスの木が登場する。

この木の周囲では空気がひどく汚染されるため、鳥が飛んできて木の枝に止まっただけで、その鳥は意識を失い、地面に落ちて死ぬ。

ヨーロッパ社会にウパスの木をもっとも広範に広めたのは、1783年のロンドンマガジンにドイツ人ファース John Nichols Foersch が書いた記事だった。かれはジャワに住んだことがある。

囚人は頻繁にウパスの木の樹脂を取って来るよう命じられてその場所に赴く。十人に その仕事が命じられても、戻って来るのはひとりだけだった。

イギリス人文学者 Erasmus Darwin が 1 7 9 1 年に出した詩集 The Botanic Garden に ウパスの木は、死をもたらす怪物を生み出す聖なる木として描かれている。

本当にジャワにそんな木があるのだろうか?ジャワを征服したトーマス・スタンフォード・ラフルズはアメリカ人自然学者トーマス・ホースフィールド Thomas Horsfield にウパスの木について調査を命じた。そして明らかになったのは、ウパスの木はその樹脂が猛毒を持っているだけであり、周囲の空気まで猛毒というのが大げさな話であることが分かった。ただし樹脂の毒性はすさまじいものであり、ホースフィールドはその事実に驚いている。

ニワトリと犬にその毒を試してみたところ、ニワトリは即死し、犬はおよそ8分後に 死んだ。原住民はこの事実を十分に理解していて、敵を殺すためにその樹脂を使ってい る。この樹脂の毒に触れたら、ひとは痙攣して死んで行く。原住民はこの毒について熟知しており、マカッサルやボルネオ、あるいは東部地方の島々の民衆は竹の吹き矢に塗って敵や獲物を倒す。

1812年のホースフィールドの調査報告には、そのような内容が記されている。このより科学的な観察報告によって、その後の学者たちはヨーロッパに数百年間語り伝えられてきた伝説が根拠のないものであることを啓蒙し始めた。

ウパスの木に関するわれわれの知識は、この話を故意にヨーロッパ社会に広めようと した者たちの怖ろしい虚偽であり、同時に実体のないホラ話を信じようとする、偏見を 抱く者たちの過大な先入観が作り上げたものであると啓蒙者のひとりは述べている。

インドネシアには、いまだにこのウパスの木が存在している。ジャワでの名称はアンチャルの木 pohon ancar、学名は Antiaris toxicaria となっている。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (27)」 (2020年09月05日)

フランス人と言えば、バタヴィアのレイスウェイク通り Rijswijkstraat を忘れてはなるまい。東インドの諸所を占領支配していた会社 (VOC) が破産してオランダ王国がその債権債務を引き継いだとき、東インドはオランダの植民地になった。

その辺りの状況をもっと正確に述べるなら、16世紀後半に近隣諸国の支配下から脱した低地七州が作ったネーデルラント連邦共和国 Republiek der Zeven Verenigde

Nederlanden が1795年にフランス革命の影響を受けてバタヴィア共和国 Bataafse

Republiek に変身した中で起こったことだ。

オランダ王国の誕生はフランス帝国皇帝ナポレオン一世が弟のルイ・ボナパルトをバタヴィア共和国の王位に就けた1806年のホラント王国 het koninkrijk Holland 成立ととらえることもできるが、現在のオランダ王国 Koninkrijk der Nederlanden の王朝を継承するオラニエナッソーOranje-Nassau 公家による王国設立は1813年になる。

ホラント王国は1810年にフランス帝国の領土とされて、オランダの地にあった独立国は消滅する。すなわち東インドのジャワ島は最初ネーデルラント連邦共和国の中に作られた会社であるVOCの支配下にあった。ところがVOCは会社活動の衰退によって民間株式会社として破綻をきたしてしまったために、1796年にバタヴィア共和国が国有化した。ジャワ島はこのときに国有会社を通してオランダという国家の所有物になったと言える。

そして1799年12月31日に会社は解散してしまうが、VOCに帰属していた資産はバタヴィア共和国政府の直接管理課に移される。それはルイ・ボナパルトのホラント王国に引き継がれ、更に1810年にオランダの地の直接統治者になったフランス帝国の掌中に最終的に委ねられたというのがその流れになっている。

1810年にジャワ島がフランスの植民地になったというのは形式上の話であり、バタヴィア共和国誕生以来、ジャワ島は既にフランスの間接支配下に入っていたというのが実質的な話だろう。

フランス帝国がジャワ島を敵国イギリスに渡すまいとしてナポレオンにとっての懐刀であるダンデルスを総督の座に送り込んだ話は拙作「ヴェルテフレーデン」に見られる通りだ。イギリス軍は1811年にジャワ島でフランス=オランダ軍を打破して降伏させ、ジャワ島をイギリス領にした。

1815年、イギリスは対ナポレオン戦争の間に奪ったオランダ植民地を新設されたオランダ王国に返還したため、ジャワ島でのイギリス統治時代は幕を閉じることになる。20年間にわたってオランダの統治から離れていたジャワは、あらためてオランダ植民地時代に入って行ったのである。

レイスウェイク通りはハルモニー社交場が完成した後、モーレンフリート南端からコニングスプレインやタナアバン地区に向かう小道が整備されて作られたようだ。そのころ、ハルモニー社交場を西端にするレイスウェイク地区は総督宮殿や高級ホテルが立ち並ぶ新バタヴィアの第一級地区であり、ハルモニー社交場の南側に隣接するいくつかの商店と住宅地区は当然のようにバタヴィアの第一等地区とされた。その西側を通るレイスウェイク通りの向こう側にできた商店街もバタヴィア最高級ショッピング街のステータスを与えられた。

そこでは、パリ最新流行ファッションを取り入れた軍人や市民向けの服の仕立てから、フランスの薫り高い靴やケーキ、更にはピアノまで買うことができた。それらの事業主の多くはフランス人であり、フランス人はまたレイスウェイク地区近辺のホテルオーナーにもなった。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (28)」 (2020年09月06日)

事業が大当たりだったかどうかは別にして、バタヴィアのヨーロッパ人社会で名前の知られたフランス系一族には、ルロー家 Leroux、パスカル家 Pascal、スフェール家 Seuffert、クレソニエ家 Cressonnier、コメール家 Comert、バスチエール家 Bastiere、ジラドゥ家 Giradeau、ランソン家 Rinchon などがある。

レイスウェイク通り商店街北端の店が当時バタヴィア最高の仕立屋だったオジ・フレール Oger Freres だ。フランス人の兄弟がふたりで1823年に開店したこの店は正装紳士服を仕立てるバタヴィア最高の店で、パリ最新流行を敏感に取り入れて最新ファッションを顧客に提供する技術は並ぶ者がいないと絶賛された。オジ・フレールは百年以上にわたって同じ場所でそのビジネスを継続した。

ルロ一家は1852年にパリスタイルのパンとケーキの店を開いた。ジョン・スフェール Jean Nicolas Justin Seuffert は1857年に靴屋を開き、ジョン・コメール Jean-Baptiste Marie Comert にその事業を売った。バスチエールは仕立屋の一家だった。ニコラス・パスカル Nicholas Pascal はパリファッションの靴店だった。バタヴィアで唯一の眼鏡店デュレ Optiek J. Duret は1866年から1888年までレイスウェイク通りの一角を飾った。

ルイ・クレソニエ Louis Cressonnier はエチエン・ショロン Etienne Chaulan がオーナーだったホテルプロヴォンス Hotel Provence を 1 8 6 0 年に買い取ってホテルデザンド Hotel Des Indes に変えた。バタヴィアでトップクラスのホテルになったデザンドは、世界各国から東インドを訪れる貴賓たちの宿舎になった。

バタヴィアで一旗あげようとやって来たフランス人の中には、舞台役者や演劇関係者たちもいた。このひとびとにとっては、バタヴィアのヴェルテフレーデン地区北端でパサルバルの南側のブロックに作られたヴェルテフレーデンシアター—Schouwburg Weltevreden の存在がきわめて大きい役割を果たした。現在ジャカルタ芸術館 Gedung Kesenian Jakarta になっているヴェルテフレーデンシアターは恒久建造物になってから1821年に使用が開始されている。

このシアターがフランス人演劇関係者らのホームグラウンドになるのは1830年以降だ。かれらの中に、フランス語教室やダンス教室を開設する者が何人も出たし、女優の中にこの第一等ショッピング地区にブティックを開く者もあった。

「バタヴィアで一旗」組の中に、フランスの演劇人デプラース Z Berger-Deplace がいた。かれはヴェルテフレーデンシアターの演劇界情報を中心にした新聞の発行を思いつき、フランス語新聞ラロルニェット La Lorgnette を 1 8 7 5 年 1 0 月 1 日から 1 8 7 6 年 2 月 2 5 日まで毎週月曜と金曜に 4 3 回発行した。そのスタートは、折りしもフランスでヒットしたオペラやミュージカルコメディなどをバタヴィアで上演するためにパリから劇団がやって来た時期に当たっている。

デプラースは最初、その劇団にバタヴィアでのマネージメントをオファーしたが、準備万端整えて来たのでバタヴィアで新たな人間を雇う必要はないと劇団側はそれに答えた。かれは仕方なく引き下がったものの、それに代わって新聞発行のアイデアが脳裏に浮かんできたということらしい。

新聞には劇評や演題などの案内、あるいは文化関連記事、そして広告が紙面の広い部分を占めた。1部50センの値段で販売され、バタヴィアのフランス人やベルギー人、そして

フランス語を解する文化愛好ヨーロッパ人たちがそれを買った。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (29)」 (2020年09月07日)

ラロルニェットはシアターの中や出入り口、シアター内でフランス人が開いているカフェなどで販売され、売れ行きは上々だったようだ。「マスク劇の悲劇」と題する連続

小説が掲載されていたり、詩の一節やエスプリの利いたフランス人好みのバタヴィア批評なども読まれ、さらにコミュニティ内で役立つ広告もあったから、内容的にも悪いものではなかったにちがいない。

ところが第39号まではとんとん拍子に進んで来たというのに、フランスの劇団が直近で上演した「ロッシーニ音楽とウイリアム・テル」と題する芝居がデプラースの眼にたいへんな愚作であると映った。かれの演劇批評スピリットはそれを黙って見過ごすことができず、痛烈で辛辣な批評がラロルニェット第40号に掲載された。

劇団側の逆鱗に触れたラロルニェットの流通がシアター内で禁止されることになる。 バタヴィア人にとって文化的クオリティの切磋琢磨よりもビジネス上の成功の方がはる かに重要事項であったことは疑いもない。それはバタヴィア誕生以来、現在のジャカル タに至るまで連綿と継続している栄枯不滅の鉄則なのである。

デプラースは第43号まで発行を続けたものの、売れなくなってしまったラロルニェットは回復のきざしを見せず、デプラースは終に諦めて休刊宣言を出した。しかし復活の日はやって来なかった。

ラロルニェットに掲載された宣伝広告の中には、次のようなものが見られた。

- オジ・フレールではパリの最新ファッションレース製品、シャツ、靴下、女性 靴などが入荷しています。
- ガンプチェノガン Gang Pet jenongan のマダム・デュフォール店は女性服の仕立てと、シャツ・カラー・ネクタイ・子供服・仕立上がり服・スーツ・スコットランドスカート・シーツ類など豊富な商品を販売しております。
- パリの著名テーラー、マダム・タバーディは全バタヴィア女性に日用服やパー ティドレスの仕立てをお任せくださるよう、お願いします。
- マダム・コードレー店はフランス製の新着女性下着を取り揃えております。

- 金箔・絵画・銅加工・絵画と家具修理の C. ベイリーで浴室鏡・支え具・透写紙・大理石・透写用ビロード・皮革などをお求めになれます。
- 音楽レッスン。ファン・デン・ボシュ防衛線(ブグルブサール Bungur Besar)の海軍司令部裏の管弦楽団長Aマルタンはバイオリンと歌のレッスンをお引き受けします。
- レイスウェイクの香水店ペクーは女性へアデザインの専門家です。

バタヴィア居住者人口の中でヨーロッパ人はヨーロッパ系プラナカンを含めて5%に満たなかった。人口のマジョリティは東インドのプリブミであり、しかも地元ブタウィ人よりも外来種族のほうが圧倒的多数を占めた。現代ジャカルタでブタウィ種族がほぼ消滅しかかっている状況は何百年も前から始まっていたと言うことができるだろう。

外来種族のムラユ、ブギス、バリ、アンボン人たちはたいていが同一種族コミュニティを作って居住した。バタヴィア一帯の域内で同種族カンプンは12カ所に分散した。 一方、非プリブミとしての華人はバタヴィア総人口の25%に達し、華人コミュニティのメインはグロドッ Glodok とパサルスネンを華人カンプンにした。

インド人コミュニティはパサルバルで絹布を含む布販売の主流を握り、アラブ人コミュニティはプコジャン Pekojan とタナアバンを主テリトリーにした。[続く]

「**ヌサンタラのフランス人 (30)** I (2020年09月08日)

バタヴィア郊外の私有地はヨーロッパ人とたまに華人がオーナーになり、法外の地と されて犯罪者に潜伏場所を提供した。私有地オーナーは自己の保安警備のためにジャゴ

アン jagoan を飼って私兵部隊を持てたが、バタヴィア都市部住民にとってそんなことが容易にできるわけがなく、かれらは行政が持つ保安機構に頼るしかなかった。つまり私有地に潜伏する犯罪者たちにとって、バタヴィア都市部は私有地よりもはるかにおいしい稼ぎ場所になっていたということだろう。したがって私有地制度はバタヴィア都市部の治安を悪化させる根本要因のひとつだったと見ることもできる。

都市部で夜間、不審な人間の往来を取り締まるために、バタヴィア行政はプリブミに身分証明書を持たせ、また夜間外出には必ず灯りを携帯するよう義務付けた。居住地区では夜間警備のシステムが一般化し、見回り班はクントガン kentongan を必要に応じて叩きながら担当地区を見回った。

バタヴィア行政区域内にせよ郊外部にせよ、健康的で安全性も高いエリアは支配階層であるヨーロッパ人やプリブミ貴族あるいは金持ち階層が占拠したため、一般のプリブミが住むカンプンには湿地帯や地勢の劣る場所しか残されていなかった。流行病がはびこったとき、圧倒的な数でプリブミがその被害者になったのは単に人口が多かったためではない。1864年のマラリアエピデミックで240人のヨーロッパ人が死んだとき、プリブミの死者数は二倍にのぼっていた。

裕福な家庭では西洋料理とヌサンタラ料理の両方に巧みな料理人がもてはやされ、ヨーロッパ純血の御主人と欧亜混血のその妻、あるいは純プリブミであるニャイの舌を満足させる能力は料理人の就職先を確保するのに役立った。インドネシア料理とされているレイスターフェル Rijsttafel が創造され、完成されて行ったのはこの 19世紀である。

フランス人シャイエ=ベル J. Chaillet-Bert は 1 9 0 7 年にジャワ島を訪れて調査を行った。フランス人は植民地主義にあまり熱心でなかったために世界覇権競争に取り残されていたのだが、スペインとポルトガル、イギリスとオランダが取り残した土地に

遅ればせながら植民地を作り始めたことから、当然ながら植民地経営の諸技術を会得しなければならなくなった。そのための先達には事欠かない状況だったから、イギリスやオランダがどんなことをし、それが現地でどんな形を生み出しているのかを学んで参考にしようと、シャイエ=ベルはアジアの各地を巡った。

オランダ政府植民地大臣もフランス一流の知識人が行う観察報告書に期待をかけていたためだろう、ジャワ島でのかれの調査旅行はたいした障害に会わずに終始したようだ。折りしも日露戦争の結果、日本が世界覇権競争に強者としての姿を示しはじめた時期でもあり、西欧列強によるアジアの植民地経営にダークホースが出現したことで現地にどのような影響がおよぶかについて、シャイエ=ベルは考察を加えている。

シャイエ=ベルの記録には、ジャワ人のメンタリティがこのように分析されていた。

ジャワ人の礼儀作法については、それを実見したことのないひとを誤解に導くだろう。われわれのデモクラシーはその比較素材にできないのである。それは切り詰めた衣服や外した仮面、あるいは色あせた洗練さといったわれわれのデモクラシーが持っている問題とは異質の、精神の中にあって性格の基盤をなすものであり、自己の核に浸透し、魂に入り込んでいるものであるためだ。退屈さ・性急さ・死・不安あるいは欲望ですら同様に、ジャワの名士は客人の前に決してそれらを示さない。悲哀や歓喜を表出するのに、かれはひとりきりになるときをひたすら待つ。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (31)」 (2020年09月09日)

オランダ人の到来にもかれらは元来のその性質を維持し、それどころか自己卑下すら 示して来航者を心地よくさせようと温かい姿勢を見せた一方で、自分の意見はしっかり

と保持した。原住民にとって来航者は大切な対象であるために、かれら生来の習慣になっている沈黙で自分の信念を保持するのである。傲慢な言葉や酷薄な振舞いの来航者たちはブルジョア的と見なされ、その評価は口伝で広まった。来航者たち自身はそんなことをたいして気にも留めなかっただろうが、時には黄色い顔に浮かべられた微笑みに驚かされることもあった。それが敗者を包んだ怨恨からの報復だったのである。ヨーロッパ人の嘲弄・高慢・侮蔑・粗野な扱いに対するジャワ人の丁重さは、ヨーロッパ人をして自らの偽善性に思いを致さずにはおかない。

ジャワ人は沈黙を選び、自分と一緒にいる人間を好ましい人間に仕立てる。誰しも、好ましい人間と一緒にいたいものだ。かれらは自分の主人の心をつかむのが巧みだ。ヨーロッパ人はそれを偽善と言い切れるだろうか?偽善とは自分の利益のためになされる悪行だが、ジャワ人が他人の前で自分の感情を秘匿することは悪行を行っているように見えない。他人の気持ちを心地よくする意欲や教育はかれらにとって当たり前のことであるかのようだ。かれらは本能でそれを行い、自分と一緒にいる人間の心を裸にするのである。

卑怯者のモラルに加えて、かれらの最悪の弱点はビューロクラシーへの情熱である。 過去三世紀の貴族性にもっとも誇りを抱く者は一番の金持ちで自分の居所周辺に広大な 土地を有し、富を運営する一族との取引が大好きで、行政面での自分の地位や政府機構 内の職位に少しも満足していないひとびとだ。それを駆るのは民衆の苦難や野望などで なく、傲慢さなのである。ひとは権力者になったと認められるまで権力を追求する。ひ とはかつての父親の地位を受け継ぐだけだったり、それより一段上に上昇したくらいで は満足しない。同等の者たちの前で自己の威厳を低下させるようなことはしないのだ。 そして誰もがそのような思考パターンの中にいる。 ジャワ社会では、ひとびとは行政やかれらの宗教から教育を受ける。社会階層は過去の遺物のままだ。三人の息子たちはそれぞれが異なる道を歩む。長男は最初から行政機構に入って、将来は父親の役職を継承する。次男はモスクの学校に入って将来はメッカ巡礼を行い、更に聖職者になるためのイマムの大学に学ぶ。兄たちがそれぞれの道を歩む一方で、末っ子は育った家庭環境の中でただ結婚し、一家の財産を運営管理する。

社会に大きい影響をもたらす征服者の精神をかれら三人が持っていないなら、かれらは自由に振舞い、偏見に満ちた上位階層から賞賛を与えられるだろう。自分の階級から逸脱したと判断された者には、貴族性の評価が低められる。そうなれば、遠い祖先から受け継いで来た社会への影響力が失われる。

この社会は農耕を卑しい仕事と考えている。商業も工業も同類項であり、また学問知識をも重視しない。文学さえも、やむをえず宗教を受け入れるまでかれらは認識していなかったと言える。宗教をかれらは外面的に半身で行っているだけであり、迷信を相変わらず信じている。かれらがありがたがっているのは政治権力だけなのだ。

かれらと金銭の話をしてはならない。かれらはそれにまったく関心を払わないのだから。かれら以上に金遣いの荒い人間が世界のどこにいるだろうか。最高の地位にいる者から末端庶民に至るまで、全員が首まで借金に浸かっている。それは内政に影響を与えるが、しかしながら・・・・。

かれらが得るのは金銭なのだろうか?商売で得られるものは何か?華人にとってはそうだ。利子は?アラブ人にとってはそうだ。工業からは?ヨーロッパ人にとってはそうだ。貯金からは?マドゥラ人の中に何人かいるが、そんなことを考える人間がどれほどいるだろうか。違うのだ。尊敬される金、ありがたい金、それは政府から得られる金であり、税から得られる金である。それがかれらの信条なのだ。われわれはそれを変えようと努めているが、遅々としてはかどらない。ジャワの最下層はいまだに役人の影響に満ちている領域なのである。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (32)」 (2020年09月10日)

宗教者の数はきわめて少なく、ましてやモラルを持つ者においておや。反対に、大部分が迷信を信じている。歴史と自然が一体と化してかれらを襲ったために、信仰を持たない者はいない。ヒンドゥ・ムラユ・中華の伝統によってその三種族が続けざまに形成された。

世界でもっとも豊富な空想力と伝説に満ちた三種族だ。かれらの神話がジャワ人に下って来た。もちろん自然も大きな役割を果たした。獰猛な生き物を擁するジャングルや火を吐く山々が住民の生命に恐怖を満たし、信じることを容易にした。先祖がワニであることを信じる者。国政指導者たちがトラを尊敬し、部下たちは当然のようにそれに従う。龍がこの大地を守護している。・・・

男は優しくて善き夫であるという現象がこの領域での常識であり、妻たちは完璧にイスラムの教えに支配されている。しかし仕組みによって定められたものを慣習が壊している。

同等階層の者同士の婚姻でないケースに出会うことは滅多にない。同じ社会ステータスの妻が夫の傍らにはべるのである。東部地方に行けば残酷な男の話に事欠かないのだが、ジャワでは部屋の鍵を妻が握る。妻が家庭内を整え、商売し、家計を統括する。妻が出費を統御し、寄付金を出し、そして不平を言い立てるのである。

かの女たちの歩く姿を見てみるがいい。閉鎖的なひとりの女の姿。時にはショールで 頭を包み、イタリアの処女たちのような優雅さを示すが顔は隠さない。短いサルンは脚 と腕と腰を歩きながら垣間見せる。この地方の宗教がイスラムであっても、イスラム国家の女奴隷とまるで異なるものをあなたはそこで目にするだろう。そこにはキリスト教の影響が及んでいるようだ。

これから述べるヨーロッパ社会とオランダ植民地生活というのは多分大げさすぎる表現のように思われる。ヨーロッパと呼んでいる内容のほとんどがオランダ人なのだから。範囲をもっと狭めてみよう。1千人台のドイツ人、2~3百人のイギリス人、フランス・スイス・ベルギーなどはだいたい同数で、残りは全部オランダ人なのだ。それですら、2千5百万人を数えるジャワ島総人口のどれほどと言えようか?

オランダ人の存在は三世紀に渡っているが、植民地化はおよそ60年前に始まったばかりなのだ。オランダ人のジャワでの活動は昔からVOCの名前で呼ばれていた。公式な植民地化は1830年以降であり、本質的なそれはファン・デン・ボシュ総督の有名なシステム¹⁰が危殆に瀕し、東インドに移住するオランダ人が増加するようになる1860年からである。移住者は最初少なかったが年を追って増加して行き、今や6万人となってヌサンタラ全域に場所を得、ジャワ島だけでも5万人を数えている。

ジャワ島の5万人の中には、植民地官僚や軍人だけでなく、商人や農園主なども含まれている。1895年の統計調査によれば、行政官僚4,934人、公証人・医師・弁護士など独立プロフェッショナル376人、商人・実業家・工業技術者3,344人、農業関係者4,143人、その他諸職種1,349人、東インド政庁元高官や元役人の年金生活者3,101人。軍人は1万8千人が全国に散らばっている。

フランスの植民地であるコーチシナと比較すると、あちらはヨーロッパ人が2,40 0人いて、1,100人が行政官僚だ。しかもサイゴンというひとつの町に1,700 人が住んでいる。それは何を意味しているのか?フランス人は植民地で新たな人生を始

¹⁰ 強制栽培制度

めようとしていない。かれらは商業や役人といったそれまでと同じような仕事をし、植 民地に土着してその豊かな自然を踏まえた暮らしをしようとしていないのである。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (33)」 (2020年09月11日)

ある島を端から端まで行き当たりばったりに歩いてみると、オランダ人がオーナーになっている農園に遭遇する。広大な土地の所有者は遺産としてそれを受け継いでおり、たいていは会計士・VOC・ダンデルス総督・イギリス時代に土地の権利を譲渡されたものだ。中には政府のコンセッション下にある場合もある。

数千へクタールの土地を所有し、その土地が何千人もの農民から地代をかき集める。 もっとも一般的なのは一年ごとの借地耕作だが、数年間の契約も行政の許可を得て行われる。土地を持っている原住民は、自分の土地を他人に譲渡することができない。かれらはその土地でタバコやサトウキビを栽培する。土地持ち、長期借地人、短期借地人のすべてがたいていその土地に家を建てて住む。

贅を尽くした御殿に住む農園主の日常生活はまるでおとぎ話のようだ。かれらの暮らしにまさるものはきっとこの世界のどこにもないだろう。澄んだ水と太陽の光が作り出す美しい大自然の中で、邸宅からそれほど遠くない農園と、そこからほど近い場所にある工場を監督するのがかれの務めである。そこでの暮らしはかれの健康を最適状態に保ち、かれの知性は適切に満たされ、かれの創造性も農園と工場経営の中で妥当に発揮される。

かれの一日は早朝から始まる。朝起きると、オランダ人ニョニャが愛情をこめて用意 してくれた素晴らしい味わいのコーヒーを飲む。トアンはあたかもそのすべての味わい を一杯のコーヒーにこめて、そのカップからすすっているようだ。

厩舎から引き出された馬にまたがると、農園内の数カ所ある要所を見回るために出かける。農園を回ったあと工場に立ち寄り、工場内の様子を観察し、技術者やマンドルと親しく会話して冗談を言い合い、そのおよそ二時間の日課を終えて帰宅する。

その間ニョニャは台所で料理人たちに豪勢な朝食を作らせ、トアンが戻る時間を見計らって大きな食卓に料理を並べさせる。食卓の上には白い蓮の花が飾られ、それが表す 歓びと清楚な白が幸福な一日の始まりを感じさせてくれる。

フレッシュな生命と快活さを発散する子供たちを目にすることもトアンに歓びをもたらすものだ。子供たちの肌は貧血症を思わせるものの、血液自体は健全だ。

使用人のひとりが邸宅からほど近い事務所へ行って、手紙を取ってきた。外界の様子を伝えて来る今日最初の情報だ。特定の日にはヨーロッパからの手紙や新聞、新刊書などがもたらされる。読書サークルに入っていれば、多種の刊行物や書物が回覧されてくる。娯楽としてはもとより、それらは知識を涵養するための重要な源泉になっている。

朝食を終えると、トアンは再び農園を巡回して早朝に与えた指示が適切になされているかどうかをチェックし、追加の指示を与える。更にもう少し離れた農園に見回りに行ったり、あるいは新たに開墾している場所の様子を見に行ったりして数時間を過ごす。

仕事を終えて帰宅する途中、かれは隣人の家に立ち寄って世間話をし、その日の晩餐に隣人を招く。他にも招きたい知り合いがあれば、家に帰ってから電話する。同じ階層のひとびとは互いに自宅に招きあって親睦を深めるのである。広い食堂、大きな食卓、テラスの安楽椅子の脇に置かれた小テーブルにはよく冷えた飲み物。贅を競うようなメ

インホールには、さまざまな芸術品がセンス良く並べられている。家によってはすべて 偽物という所もあるのだが。

パーティともなると、どこで葉巻を吸おうがだれも苦情せず、ウイスキーソーダやパイッpait(ジャニパーとビターを混ぜたアルコール飲料)が休みなくグラスに注がれ、客室には音楽が流れて娘たちがそこに集まる。客人たちが乗って来た馬は表庭につながれて、落ち着きなくいなないている。雲の切れ目から銀色がかった月が現れて、まもなく黄金の魔法の光を浴びせるぞと予告している。あたかも、静かな明るい夜は愉しい夢を見ながら眠れ、と誘うかのように。オランダ人はそのような穏やかさを愛しているのだ。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (34) | (2020年09月12日)

かれらは農地の地主兼商人になった。かれらがジャワにやってきたとき、ジャワ人は みんな農民だった。それがオランダ人の進路に影響を与えた。オランダ国民の中に、都 市生活者であるにもかかわらず農園主の暮らしに憧れる者がたくさんいた。と言うよ り、農園用地など欲しくないと言う人間はいなかったのだ。

都市部でも、村落部と同様に広大な土地の上で生活が営まれているものの、あれほど の贅沢さとは無縁だ。かれらは有り余る豊かさの上で生活しているが、生活そのものは シンプルで、すべてが計算しつくされている。

都市部から数時間離れた村落部に住んでいる、とある植民地官僚の昼食メニューをご紹介しておこう。チキンスープ、白ワインとライムで茹でた貝、飯とフライドチキン、 仔牛とキノコ、ローストビーフ、サヤインゲンとアスパラガス、ジンジャーソース、果 物、コーヒー。そしてデザートのアイスクリーム。夜も似たようなメニューで、夜には モーゼルやボルドーのワインまたはシャンパンが出る。

島の果てから山地に至るまで、どんな遠隔地であっても、男の使用人がまったく感情を表情に表さないまま、色の塗られた大きなヤシの葉を休まずに動かして風を起こしている。女性たちは一様に、ライムの葉を浮かべたフィンガーボールにそっと指を浸し、濡らした指の腹で唇を拭く。わたしの知っていることは他に何かあっただろうか。

この二十世紀にアジアに住んでいるヨーロッパ人の弱点は次のようなものだろう。ヨーロッパが信じて疑わないことのひとつに、オランダはこの熱帯の地に作った植民地を維持し続けて行くだろうというものがあるが、それは間違いだ。6万人という十分大量の人口を擁しているとはいえ、インドの植民地にいるイギリス人は10万人を超えている。インドシナのフランス人は6千人だ。ジャワ島を巡っているときわたしは、25年間ヨーロッパの土を踏んでいないと言うひとびとに何人も会った。かれらはそれを誇っていた。

わたしがヴェルテフレーデン軍大病院を訪れたとき、アチェから移送されて来た負傷者たちを大勢目にした。かれらは身体を洗われ、治療を受け、最善の医療技術とたっぷりの同情心に包まれ、何ら不自由のない環境に置かれているというのに、かれらの表情には哀しみの色が浮かんでいた。わたしは案内の医師に尋ねた。「かれらはなぜあんなに哀しそうにしているんですか?」医師はふたつの言葉を口にした。「故郷の喪失です。」

かれらはヨーロッパへの望郷の思いに焦がされ、しかし心は東インドをもさまよっている。かれらは帰国するとき、ジャワにさよならを告げる。そのとき、後悔が心をよぎる。オランダへ帰ってから、ジャワで体験したような楽しい暮らしが果たしてできるのだろうか。オランダで待っているのはどんな暮らしなのだろうか。

ョーロッパ人がジャワで暮らすとき、本人は適応する意志があるのだから問題ないが、子供たちはどうなる?教育を受ける年齢に達したとき、芸術・高い文化・宗教・理想・祖国などに欠けている社会の真っただ中に置かれた子供たちの将来は不安に包まれる。だから子供たちをオランダに送って高い教育を受けさせ、愛国主義を、ナショナリズムを心に植え付けるのである。東インドでの暮らしの空虚さを埋めるために、子供たちはオランダに帰す。子供の教育という名目が親たちを祖国に引き寄せる。

ジャワに住む植民地主義者や行政官僚は永続性のない客人だ。かれらは滞在期間をできるだけ短くしようと心掛ける。巨額の報酬、年金生活のための先掛け、そして帰国。 微笑みあふれる、広範な生活が可能な、容易に成果が得られる東インドを惜しむ気持ちなどさらさらない。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (35)」 (2020年09月13日)

ところがほんの数年前までヨーロッパ人がめったに話題にしたことのない日本という 国が、世の関心を集めるようになった。それまで日本人というのは何人かの個人的知り 合いや、曲芸師、娼婦しか見たことがなかったというのに、今やその数は急激に増加し ている。曲芸師はまだいるにはいるが、娼婦は激増し、商店を開く商人も増加し、経済 面以外の分野にまで不安を拡大させている。

日清戦争で日本が勝利したことにヨーロッパ中が驚き、他国を征服したことでその極東の民族が西洋パワーのレベルを突然凌駕したことを認識した。ヨーロッパ人は警戒心を向け、心は不安に包まれた。

ジャワには強力な軍隊がおり、知性豊かな指導者がいて、要塞と軍事基地が散在し、 鉄道線路網が走っている。2万5千人であろうが5万人であろうが、いかなる敵が進攻 してきても、ジャワ島を奪うことはできない。それはわたしひとりの意見ではない。と はいえ、欧亜混血のリーダーたちが日本を特別な位置に祭り上げる可能性も計算に入れ なければならない。日本人への監視を強めることは、十分に理由のあることなのだ。し かしまた、別の要素もある。

最近日本は通商分野でいくつかの大国と重要な条約を結んだ。日本人はヨーロッパ人並みの待遇を受けることになった。その条約の結果、日本はヨーロッパ諸国と相互に拘束し合える立場に立った。こうして日本人が滞在しに来たり、会社を設立しに来ることを阻む理由がなくなり、日本人に特別の課税をすることも、日本人の活動分野を制限することや大っぴらに監視を行うことすらできなくなった。オランダは日本と条約を結んだ国のひとつである。

日本が台湾を併合したことに関連して、その状況は特別の意味を持つようになった。 台湾が日本領になったために、台湾の中国人が日本国籍を持てるようになった。その中 国人が日本と条約を結んだ国に滞在するとき、かれらは日本人として契約を行うことが できるのである。相手が原住民でもヨーロッパ人でも同じように。

台湾に住んでいる一部中国人が、在来の中国人と同じような性格とプロセスとチャンスを持ってジャワにおけるビジネスを行うとき、中国人に対して行っているような取締りをかれらには行えなくなり、ヨーロッパ人と同じ取扱いをしなければならなくなる。ジャワに近い台湾は危険な場所になった。

ジャワに1万7千人、外島部に8千人いるアラブ人は経済分野でも宗教分野でも不運 を嘆いている。経済分野については、いくつかの点を華人と比較することができるだろ う。農業や商業で成功する者もある。かれらが何も産しない土地に住んでいたとはい

え、それでも資金の運用はできるのだ。物品を仕入れ、金利を乗せてそれを売るクレジット販売で利益を増やす。時に金利はとてつもなく高かったりする。かれらはヨーロッパ人に依存することもあるが、ジャワ人への依存はもっと確実だ。そのどちらの状況においても、宗教が役立つツールになる。かれらアラブ人のほとんどはイエメンから移住して来た。イエメンはメッカに近く、宗教的な意欲はたいへん強い。かれらは自分を有利にする教義を前面に押し出して、あらゆる分野に宗教をからめる。

宗教に対するかれらの信仰はあまり純粋なものでないようだが、イスラム社会において宗教は、それが正統であろうが異端であろうが、自分たちが上位に立つためのツールであるということが熟知されており、それがために敬虔な信徒である姿をかれらは情熱的に誇示しようとする。経済と商業の分野でそれは大きなチャンスをかれらにもたらす。

プリブミはあのような暮らしをしており、教義実践を厳格に、時にはファナティックに行っている。それは時としてヨーロッパ人支配者に不安をもたらす元凶になっている。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (36)」 (2020年09月14日)

華人問題はさまざまなアスペクトを抱えている。ヨーロッパ人よりも勤勉・倹約・技能優秀であらゆる面での競争相手になっているという唯一の欠点を持つかれらを敵視するための理由付けに傾くわれわれの偽善性は、もっと広い心で対処するように変えるべきだ。われわれがかれらを性質の頑なさ、生命力の旺盛さ、モラル欠如型ライフスタイ

ルや強要的といった角度から批評するのは、抑圧され恐怖におびえている種族に対して 行われる悲劇だろう。

華人はたくさんの能力を持っており、東インドでわれわれが見出す様々な状況にすぐに自己を適応させる。かれらが就く職業のもっとも一般的なものは職人と商人だ。しかしカリマンタンでは苦力になり、スマトラでは鉱夫にもなり、そして庭師もすれば土砂運び人足もし、村落部で建築作業者にもなり、またそのオーナーにもなっている。

トンキン、香港、上海に住む者の中には、サービス業従事者や家庭プンバントゥになってヨーロッパ人社会の中に身を置く者もいる。かれらは雇用者に対してとても注意深くまた巧みに仕えるので、かれらのサービスを知った後、他の種族を雇うヨーロッパ人はいなくなる。

ところがジャワ島にいる同じ種族の人間はヨーロッパ人に仕えることを拒む。ホテルの職員やルームボーイになる者はいない。反対にかれらはスタッフ、会計係、監督人などになる。オランダ人はかれらを怖れている。政府はかれらに対して警戒している。ところが銀行や大会社で華人の掌握する支店を地方部に持たないところは、真の大会社や大銀行とは言えないのだ。華人たちはそんな場所で、適切な注意を払い、妥当なサービスを穏やかに行っている。

華人が就く仕事の中で、ジャワ人やヨーロッパ人と競合しない分野もある。それは阿 片農園であり、馬交換ポストや貯水槽を持つ農園、ギャンブル性が高く忠実さを求めら れる職業、家畜屠殺場などだ。われわれはそのような分野における原理を知っている。 コンセッションや入札によって、たいてい政府に一定の税を納めるのがその特徴であ り、農園主には独占権が与えられる。政府が農園から税を徴収するときはたいへんな苦 労が待ち受けている。そのような方式を執らない場合は国有会社が取って代わったり、 あるいは直接税方式にされる。

プリブミ社会と混じり合って生活する巧みさで、華人の右に出る者はいない。プリブミの言葉を話し、分かち合い譲り合って生活し、信頼を受けるのである。かれらは自己の欲求の充足に向かって精力的に動き、挙句の果てに決まりを破るためにより重い条件が課される結果を招くのが普通だ。

もっとも嫌気がさすのは、華人大商人たちだ。かれらはたいてい、この地にやって来 て最底辺の仕事からキャリアを開始し、そしてたいがい新興成金になり上がった。

故国を去ってジャワのどこかの地方に移住し、そこの華人社会に入って同種族の者たちと一緒に苦力になったり、見習い奉公をしたりして、移住に要した旅費その他の借金の返済にあてる。それは18カ月から24カ月かかる。その間にかれらは仕事の要領を覚えてしまう。借金が返済され、見習い奉公が卒業できたら、次は貯蓄に移る。自立するための商売の元手を作ろうとして、倹約生活に励む。そして一番売れ行きの良い商品を華人やヨーロッパ人から仕入れるのである。現金一括払いもあれば、分割払いもある。

それからは、その商品を担いでいくつかの地方を巡回販売する。重い荷を担ぐ苦労 も、門前払いする消費者も、かれの意欲をくじくものではない。かれは朝から晩まで歩 き回り、微笑みを絶やさず、消費者の心をつかもうと努力し続ける。そうしてもっとも 人気のある巡回商人として、その地方で定評を得るに至る。[続く]

「ヌサンタラのフランス人 (37)」 (2020年09月15日)

そうなれば、次のステップは自分の店を開くことだ。加えて別の店への商品供給も行う。そうやって商売仲間を作り、そのうちに仲間の仕入れや販売に影響力を振るうに至る。ヨーロッパの産品を売って利益を得、プリブミの製品を買って利益を取る。金がう

なり始めれば、遊ばせておく法はない。かれらは銀行分野や金貸し分野に入って行く。 遠慮もなければ自主規制もなく、へどを吐く職種もなければ軽蔑するべき職業も存在し ない。大きいビジネスを追求するのは当然のことだが、細かいビジネスを軽視すること もない。

ヨーロッパ人は事業が成功して財が蓄えられたなら、その事業から離れる。しかし華人はとどまる所を知らない。自分の職業で世の通常でない巨額の財を築くために、かれは真剣に働く。資産は往々にして不動産の形を取る。都市部にある美麗な大邸宅はたいてい華人のものだ。ただし外見はそれほど華麗な姿にしない。一見、質素な装いになっているものの、中に入れば贅沢この上ない内容が現れて来る。バタヴィアやスラバヤの路上で何台もの高級大型車を目にしたなら、そのオーナーはまず華人だと思って間違いない。

わたしにとって幸運だったのは各地の行政官僚の手助けを得たことであり、そのために言葉の問題が大きい障害をもたらす事態に遭遇しなかったことだ。オランダ政府が各地の行政官僚に担当地域の地元言語を修得することを命じていたのは、個人生活や職業生活でかれらが与える諸指示のための便宜といったものをはるかに超えた、政治的な意味合いを強く持っていたのではあるまいか。つまり政庁は原住民が統治者の言語をマスターすることを好まなかったというのがその意味するところだ。あらゆる真理を述べることが常に良いとは限らず、書かれたものがすべて読解されるのが常に良い結果をもたらすとも限らない。オランダ語の書物・パンフレット・新聞の中に、虐げられている原住民に読ませるべきでないものは有り余っているのだから。

オランダ人のやり方はフランス式とまったく異なっている。フランスでブルジョア階 級の子供たちはすべて中等教育を受け、そこでヒューマニズムに触れる。オランダで

は、その種の子供たちはブルジョア教育の学校で小学校レベルから上級中等レベルまで 学ぶ。

それはフランスの大臣が提唱した特別教育とよく似ている。言語と科学のふたつの柱を根底に置いた教育だ。どんな職業であれ、将来部下としての仕事をするだけの生徒たちに適切なものであり、もしも知識や能力をもっと拡大して幹部や上級の位置に上ろうとする生徒たちや、アントレプルヌールとして成功しようとする生徒たちにも、それは将来の発展性を助けるものになる。

だが平均的な頭脳の持ち主で、社会や行政の最前線で活躍したい希望を持つ者には適切でない。実用的知識がかれの思考パターンを形成するがために、適用と調整の能力に欠けてしまう。行政機構で働く者にとって必要不可欠な哲学を修得するのに困難が生じる。政治教育は与えられないのだ。

東インドの官僚候補者は行政官としての知識をほんの少ししか与えられない。そんな知識だけで行政機構の末端から中級までの役職に就くのである。一方、頂点の座に着くべきひとびとは政治と行政の十分な知識を持たずには済まない。かれらの役割はただ組織を統率するだけでなく、もっと広いスケールにおいて命令を下さなければならないのだ。そんな知識は小学校でも、オランダのブルジョア階級向け実業学校でも教えていない。東インド上級官僚向けの教育は技術面の教育だけでなく、実際面におけるものでなければならないのである。

イギリス・フランス・スペインの各国に、かれらが植民地にした土地の原住民に何を してやったかを尋ねてみなさい。教育を与えようとしたのか、そしてどのような教育 を?この直接的な質問に対して、かれらは直接的な回答をしない理由を常に持ってい る。かれらは原住民を愛おしみ、監督し、教育したいと思っている。ところがその実行 を阻むいくつかの障害に遭遇するのだ。かれらは宗教のプロパガンダと聖職者たちの世 俗権利を尊重する。原住民社会からの偏見や憎悪がどうあれ、かれらは征服と平穏を優 先する。[続く]

「ヌサンタラのフランス人(終)」(2020年09月16日)

ところがオランダだけはそんな障害から免れている。オランダ人は欲するがままに、何でも行うことができる。かれらは三百年にわたってジャワを支配してきた。かれらの財政は長期間繁栄し、今でも満足できる状況にある。オランダ本国は教会の支配を受けない。

イスラムを信仰する原住民は科学に心惑わすことがない。教育を受けた唯一の階層は オランダ人と徹底的な抗争をしたことのない指導者層であり、争いどころか、かれらは 友好的な姿勢を示す。

ダンデルスはジャワ人への教育構想を抱いた。1808年に出された決定書には、ジャワ島の各地方行政長官は青年層に対する社会教育・慣習・法・宗教知識に留意し、必要な学校を建設し、有能な教員を職に就かせるようにという指示が出されている。しかしそれは紙に書かれた命令でしかなく、そして紙の上での命令にとどまった。各地方行政長官はその命令にまったく意を払わず、その命令に拘束されていないように振舞ったのが実態だ。民衆への教育事業を本気で手掛けることがかれらにできただろうか?

教員をどこで探せばよいのか?学校運営をどのようにさせればよいのか?1808年の決定書の内容はいまだに紙の上から地面に降りてこない。1818年、1820年、1827年、1830年・・・同じことは何度も繰り返されている。地方行政長官にできることはなく、かれらは何もしない。1849年にジャワ島にあった政府の学校はわ

ずか二軒だけで、その主導性で名を知られた行政長官がいた地方でのみ起こったことだ。ジュパラとパスルアンである。1851年になっても、ジャワ島内の政府の学校は5軒にしかならなかった。

それらの学校はどんな様子だったのか?教育内容にはクオリティがなく、生徒たちは 学習意欲を持たず、教員たちは教育指導能力が不十分だった。真の意味における学校と いうものはひとつもなかったということだ。

子供たちは行政長官邸に定期的に集められ、教員や知識人父兄、あるいは長官の友人が子供に本を読み聞かせたり、あるいはアルクルアンの内容を説明したりした。その集まりは長官の私費で営まれた。長官の私費は、建てた学校の営繕費にも使われた。住民も学校維持のための会費を負担した。生徒は金を納めなくてよいというのが原則だ。金持ちの子供は教員にプレゼントをあげた。貧しい子供たちは教員のために手伝い仕事をした。

その動きは徐々に進展して、教育現場に広がりが見られるようになる。1852年には15校になり、1865年には58校に増えた。国がそれらの学校に補助金を与え、教員雇用の責任を持つようになる。1873年から1882年までの間にジャワで111、外島で138、合計249の新設校がオープンし、1884年に政府の学校は512校になった。しかしジャワ島の経済状況の悪化から後退現象が起こり、1896年の学校数は407に減少した。

その407の内訳は政府の運営する学校205、生徒数37,103、政府から補助金を受けている学校116、生徒数14,212、補助金を受けていない学校86、生徒数71,176。東インドの子供たちの何パーセントが教育を受ける機会を得ているのだろうか?

最後にシャイエ=ベルは次の文章でこの報告書を締めくくった。オランダ政庁はあらゆるものを監視しようとしている。公的通商から私的通商、原住民の商売から植民地行政に至るまで。ヨーロッパから来た行政官僚たちは瑣末事の中に溺れており、祝福を忘れたかのような見方で問題を眺める。植民地の地方トップ層は自分の用事を邪魔する監視を受け入れることができず、また問題解決をややこしくするだけの中央集権を嫌悪している。

原住民の大半も、政庁がかれらに与えている保護をありがたがらない。いまだに継続 しているファン・デン・ボシュ制度が生み出した高物価がかれらの懐を軽くすることへ の不満の方を強く握りしめている。

原住民貴族層も先祖伝来の諸権利が取り上げられたことで不満をかこっているように見える。地方部の県令たちだけは、かれらの必需品を部下たちが満たしているために今のところ満足しているようだ。しかしその部下たちが今の県令に成り代わって県の統治者になろうと考えて動き出している現状から、県令は部下が自分の競争相手に変化しつつある状況の進展を不安の眼で眺めるようになっている。現県令たちの仕事がこれまでのように安楽に行えなくなる不安、そして自分の地位が動揺していく不安・・・・

「ヌサンタラのスエーデン人」(2020年09月30日)

1743年12月9日、スエーデン船ヨテボリ Goteborg 号がバンテン港に入った。 この船はスエーデン東インド会社 Svenska Ostindiska Companiet SOIC の武装商船だ。

1743年12月13日のバタヴィア城日誌 Dahregister には、バタヴィアのVOC 総督宛てにバンテンのスルタンが送った三人の使者が報告書を携えてやってきたことが 記録されている。アストラ・プラナ、ドゥタ・ウィナタ、スラヤ・ディナタという三人 の使者はVOC職員に迎えられ、総督からの返書を持ってバンテンに帰って行った。バンテンはVOCの敵に協力しないという条約をバタヴィアと結んでいるから、やってき た船が敵国船かどうかをバタヴィアに確認しなければならない。

イギリスと戦争中のVOCにとって、スエーデンは友好国であるから無下に扱うこともできないが、かといってSOICはビジネスでの競争相手になるわけで、甘い顔ばかりするわけにもいかない。VOC総督はスルタンにスエーデン船への補給を行うよう命じた。

1743年12月22日、ヨテボリ号乗組員ニルス・ストロームとアンダース・クテンのふたりがバタヴィアにやってきた。ふたりはVOC職員に対してヨテボリ号が求めている補給内容について説明した。地元産のアルコール飲料アラッ arak、薪、そして火薬だ。VOCはそれらの要請に応じて物資を与えた。火薬は20袋だった。風待ち状態に入っているヨテボリ号はその間、乗組員のアラッの需要を満たすのに大わらわだったようだ。

ヨテボリ号がジャカルタ湾に投錨したのは1744年1月9日のこと。ヨテボリ号は 大型船だったためにバタヴィアのハーフェンカナールに乗り入れることができず、バタ ヴィア港までは短艇を使わざるを得なかった。

当時バタヴィア住民の中にルーテル派新教徒は少なくなかったが、ルーテル派の神父はおらず、教会もまだバタヴィア内に作られていなかった。ヨテボリ号にルーテル派の神父がいることを聞きつけた住民はペッター・ホルマート神父に礼拝の集いを司ることを求め、了承された。時のVOC第27代ファン・イムホフ Gustaaf Willem baron van Imhoff 総督もルーテル派だったから、話はとんとん拍子に進んだのだろう。

バタヴィアで初めてのルーテル派の礼拝の集いはバタヴィア城市城壁内南部の高官邸で催された。現在の国鉄ジャカルタコタ駅に近い辺りだそうだ。ルーテル派教会は1749年にバタヴィア市庁舎前広場 Stadhuisplein 北側の、現在カフェバタヴィアのある建物群の辺りに設けられたものの、19世紀に取り壊されてしまった。インドネシアにおけるルーテル派キリスト教活動の発端にスエーデン船が関与しているのは、まぎれもない事実である。

ヨテボリ号は1744年4月26日、バタヴィア号沖で錨を上げ、広東に向けて出帆 した。千人を超えるバタヴィア在住ルーテル派新教徒は涙を流してペッター・ホルマー ト神父が去って行くのを岸壁から見送っていた。

「ヌサンタラのドイツ人 (1)」 (2020年10月01日)

ヌサンタラに関わったドイツ人は、初期の時代にはたいていVOCとの関連で足跡を 印している。フランス人との大きい違いは多分それだろう。

ヘッセン Hessen 出身のドイツ人ギオーグ・イーバーハルト・ルンプ Georg Eberhard Rumpf はVOCのアンボン地区ナンバーツーを務めた人物であり、同時にアンボンの植物カタログ「アンボイナ植物誌」Herbarium Amboinense を遺した植物学の大家だ。かれは Rumphius という名前でも知られているが、これはルンプのラテン語式表記であり、インドネシアではもっぱらルンピウスという名で呼ばれていて、ルンプの名前は一般的でない。

かれはVOCに入社して軍務に就き、1653年7月にバタヴィアにやってきた。そして1654年アンボンに移って技術将校のポジションにあったが、文民職への異動を申請して二級商務員に移された。1662年に一級商務員に昇進している。そのころからかれはこのスパイス諸島の動植物に興味を抱いてカタログの作成を開始している。

1666年、ヨーン・マーッサイカーJoan Maetsuycker 第13代総督はかれを総督 直属のアンボンナンバーツーに指名した。つまりアンボンのVOC組織内でかれはトップの地位に就いたことをそれは意味している。

1668年、かれのVOCとの雇用契約期限が来たが、かれは自分のライフワークを 投げ捨てて故郷に帰る意志を持たなかった。かれの研究がアンボンの風土病の治療に効 果をもたらす薬用植物発見につながるものであるからには、VOCにとっても大きな意 味を持つものに相違なく、無理やりそれをやめさせることは社会的な損失につながる。 VOCはこのドイツ人元社員の継続滞在を認めた。

1674年2月17日、中華正月祝祭期間が終わりに近づいたころ、激しい地震と巨大津波がアンボン島とセラム島を襲った。かれの居宅は壁が倒壊し、妻とふたりの娘が

その下敷きとなって死んだ。その災害の犠牲者は2,322人で、巨大津波は高さ80 メートルに達し、インドネシア史上最大のものとされている。かれはそのときの様子を アンボイナ植物誌の中に書き残した。

1千2百種の植物を集めたアンボンの植物カタログは27年の歳月をかけて1690年に完成した。時にルンピウスは63歳になっていた。かれはそれをバタヴィアのVOC本部に送り、ヨハネス・カンパウス Johannes Camphuys 第15代総督はその複写を作らせてからVOC本社に送った。バタヴィアからオランダに送られたのは1697年であり、複写作りは7年かかったことになる。

ところがVOC本社はその内容が敵を利することになると考えて、公開を禁止した。 その間に制作者のルンピウスは世を去ってしまう。自分の生涯をかけた作品がVOC本 社の倉庫の中でただ眠っているだけであることを、かれは知っていたのだろうか?

ルンピウスのアンボイナ植物誌が出版されたのは1741年だ。この大作の公開はほぼ44年間の休眠のあとでやっとなされたのである。印刷部数はわずか5百部で、セット価格100フルデンで販売された。現在のユーロ価に直すと2万ユーロになる。アムステルダムの医者の年収の三分の一だったそうだ。[続く]

「ヌサンタラのドイツ人 (2)」 (2020年10月02日)

VOCバタヴィア総督にもドイツ人がいる。ファン・イムホフ Gustaaf Willem baron van Imhoff 第27代総督がそのひとだ。かれのドイツ語名は Gustav Willhem

Baron von Imhoff で、オランダ国境に近いレア Leer の町で生まれた。Imhoff という名称は Imhof あるいは Im Hof と綴られたこともある。領主として爵位を与えられていたファミリーの出身だったようだ。この一族はヌーレンバーグ Nurenberg を本拠地にしていた。

かれは20歳でオランダのVOCに入社し、東インドで二級商務員の履歴をスタートさせた。翌年には一級商務員、そして上級商務員へと階段を上り、更に港湾監視官、バタヴィア参事会特別顧問などを歴任した。31歳でセイロン行政長官に任命された後、1740年3月、4年間務めたセイロン行政長官の人事異動で業務を後任者に引き継いだかれば、バタヴィアに戻った。

セイロン行政長官はバタヴィア総督の直属の部下になり、人事異動権はバタヴィア総督が持つ。VOC管轄地域の本拠地がバタヴィアなのだから、ケープタウンから出島まで各現地支部の人事権がすべてバタヴィア総督の手に握られていたのである。

ファン・イムホフがセイロンからバタヴィアに戻されたのは、現地政策が地元民族寄りだったために危険視されたという話があり、一方でかれの政策が現地でのかれの人気を高めたことへの不快感がバタヴィア総督に生じたという説もある。そのときのバタヴィア総督がアドリアン・ファルケニール Adriaan Valckenier だ。

折りしも、アドリアン・ファルケニール第25代総督の華人対策がきな臭い雰囲気を高めつつある時期に当たっていた。ファルケニール総督はバタヴィアで増えすぎた華人の人口調節を行おうとし、南アフリカやセイロンに華人を強制移住させつつあった。ところが華人社会で扇動的な噂が流れたのである。

移住させると言ってVOCの船に乗せられた華人は、沖に出たあと海中に投げ込まれてサメの餌食にされているのだという噂話だ。その結果オランダ人に対する華人の反抗

行動が起こり、50人ほどのオランダ人が殺害された。1740年10月9日、ファルケニール総督はバタヴィア防衛軍に対抗行動を指令した。

武力鎮圧の姿勢を見せれば反乱者はおとなしくなるという総督の思惑は完全に的が外れた。華人の武力反抗は一層盛んになり、バタヴィア防衛軍はますます殺りくを繰り返すことになって、その後の数日間で5千から1万人の華人を主体にするバタヴィア居住民が殺され、史上に名を遺すバタヴィア華人大虐殺事件(インドネシア語では geger pecinan, 華人街騒乱)に発展してしまう。

バタヴィア防衛軍の銃と剣の下をくぐり抜けた華人反乱者たちは中部ジャワへ逃れて行く。在ジャワ島華人とVOC間の戦争の導火線がそのバタヴィアの騒乱だった。華人兵力はマタラム王国のスナン・パクブウォノ二世に接近してVOCに対する共同戦線を打ち建て、1741年8月にスラカルタのVOC要塞に対する総攻撃が開始された。VOC本社の重役会がファルケニール総督のこの失政を黙って放置するはずがない。

ファン・イムホフはファルケニール総督の近くにいて、総督が40年10月9日にバタヴィア防衛軍に下した指令をいさめようとした。すると総督はファン・イムホフを逮捕させてVOC本社に送還したのである。

総督はファン・イムホフの本社重役会に対する影響力を軽視したにちがいない。重役会の査問にファン・イムホフの答弁がどのような色彩を帯びたかは想像にあまりある。 1741年11月にファルケニールは総督職を解任されてヨハネス・テーデンス第26 代総督にその座を引き継ぎ、本社に呼び戻された。

ところがファルケニールがオランダへ向かっていた途中のケープタウンで、本社からの別の指令がかれを待ち受けていた。バタヴィアでかれに対する裁判を開くというのがその内容だった。本社重役会への弁明の余地も与えられないまま、かれはバタヴィアへ回れ右せざるを得なかった。[続く]

「ヌサンタラのドイツ人 (3)」 (2020年10月03日)

1742年8月12日、バタヴィアに戻ったファルケニールはそのままバタヴィア市 庁舎で牢獄生活に入った。裁判のための取調べが始められたものの、プロセスはだらだ らと進められて何らの結論も出されずに10年が経過し、ファルケニールは1751年 6月20日に囚人として56歳の生涯を閉じた。

ファン・イムホフはヨハネス・テーデンスの後を継いで第27代総督の座に就いた。 かれの総督在任期間は1743年から1750年までであり、ファルケニールの捕囚期 間と並行している。

ファン・イムホフには色めいたエピソードもある。ボゴールのプンチャッ Puncak 峠を越えて南側のチアンジュル Cianjur 県に下ってしばらく行くと、チボダス Cibodas 植物園に曲がる道があり、その少し先にチパナス Cipanas 宮殿がある。

チパナス宮殿はインドネシア大統領のための7つの宮殿のひとつであり、建物の歴史 は古い。ちなみにインドネシア大統領のための宮殿とは、次の7つを指している。

ジャカルタの国家宮殿 Istana Negara

ジャカルタの独立宮殿 Istana Merdeka

ボゴールのボゴール宮殿 Istana Bogor

チパナスのチパナス宮殿 Istana Cipanas

バリのタンパッシリン宮殿 Istana Tampaksiring

ヨグヤカルタのグドゥンアグン宮殿 Istana Gedung Agung

パプアのグドゥンヌガラ宮殿 Istana Gedung Negara

チボダス植物園はボゴール植物園長だったヨハネス・エリアス・テイスマン Johannes Ellias Teijsman が、他所から持って来た植物をボゴール植物園に植える前にこの地域の気候に順化させる場所として1852年に設けたものだ。ボゴール植物園がボゴール宮殿の庭園として作られたのとは異なり、チボダス植物園とチパナス宮殿はそのような関係になっていない。

現在チボダス植物園には桜園があり、この熱帯の高原では桜が毎年1~2月と7~8月に開花する。桜園が作られたころには、「わざわざ日本まで花見に行くことはないよ。このチボダスにおいで」という宣伝がなされていて、わたしも花見に行ったことがある。

チパナス宮殿建物は最初、バタヴィアの貴顕ファン・ヘイオツ Van Heots が海抜 1千 1百メートルの高原にヴィラとして 1 7 4 0年に設けたものだった。かれは多分そのグデ Gede 山麓の地主になっていたのだろう。その土地には三つの天然硫黄温泉があって、それがチパナスという地名の由来になった。

1742年8月にファン・イムホフはその地を訪れてたいそう気に入り、既存の母屋に建て増しするよう命じた。その建設工事のために、中部ジャワのトゥガル Tegal やバニュマス Banyumas から木工職人が集められて建築が進められた。ファン・イムホフは工事の進捗状況を見守りながら、高原の温泉に浸かりに来ていたにちがいあるまい。

ファン・イムホフはこのヴィラを建てる一方で1744年にボゴール宮殿も建てているのだから、同時期にふたつのプロジェクトを並行して進めた観がある。

ファン・イムホフの主侍医は、鉄分と硫黄分を含んでいる原泉の水と牛乳を混ぜて飲むようかれに勧めていたそうだから、かれのチパナス参りは複数のメリットをもたらしていたにちがいあるまい。[続く]

「ヌサンタラのドイツ人 (4)」 (2020年10月04日)

そこにもうひとつのメリットが加わった。中部ジャワの木工職人たちは自分たちの疲れを癒すためのマッサージ女を連れて来ていたのだ。総督職に就いたファン・イムホフに取り巻きがマッサージを勧めたことは想像に余りある。多分、一番見目の良い女が選ばれたのだろう。ファン・イムホフ総督はこの女もチパナス参りのメリットの中に加えてしまった。

女が妊娠すると、洗礼を受けさせられたようだ。かの女にはヘレナ・ピータース Helena Pieters という名前が与えられ、ヘレナはファン・イムホフの子供を3人産んだ。

後年のファン・イムホフ総督はチパナスの家に入り浸っていたようだ。かれがそのヴィラで1750年11月1日に没したとき、かれはまだ総督職に就いていた。かれの遺体はバタヴィアのタナアバンに埋葬された。

その後、このヴィラは歴代の総督が使うようになり、総督たちは温泉浴を愉しんだだ ろうが、マッサージ女が付いたかどうかはよく分からない。日本軍政期には日本人高官 たちがジャカルタとバンドンを往復する際に一泊する施設として使われた。 共和国独立後、スカルノ大統領はオランダ総督の持っていた権利を引き継いだ。必然 的にチパナス宮殿は大統領のための国家資産となり、以来インドネシア共和国大統領の 一族は国費で高原温泉ヴィラを楽しめるようになっている。

東インドに関わったドイツ人貴族の中には、1849年に東インド植民地軍司令官になったヘルトフ・ベーンハード Hertog Bernhard という人物もいる。この人物については拙作ヴェルテフレーデンの中で紹介してあるので、そちらをご参照ください。度欲おぢさんのサイトでどうぞ。

http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/Kawan-27Weltevreden.pdf

また20世紀初期に東インドで事業を行ったドイツ人もいる。20世紀前半の時代というのは、在留ドイツ人の密度において日本を除くアジアの中で蘭領東インドが最大の国だったのである。

1878年、ノイシュタット Neustadt an der Haardt の実業家の家系に生まれたエミール・ヘルフェリッヒ Emil Helfferich は東南アジアでのビジネスにチャレンジするため、1899年にヨーロッパを去った。ペナンで一年と少し働いてから、1901年にスマトラ島南部のトゥルッブトゥン Teluk Betung に移った。イギリス領からオランダ領へ足場を変えたことになる。

細々とした資金でビジネスを続け、やっと事業への確信を得たかれはドイツに戻って 資金集めを行い、それを携えてバタヴィアにやってきた。ヘルフェリッヒカンバニーを 興して念願の自分のビジネスに邁進する。1909年、ストレーツ&スンダシンジケー トの総取締役になる。1915年にはバタヴィアでドイツ語雑誌 Deutsche Wacht の発 刊を開始。

かれは独身で一生を過ごしたが、人生の伴侶は得ていた。つまり結婚はせず、子供も 持たなかったが愛情生活はつかんでいたのである。かれの生涯の伴侶はオランダ人将軍 とジャワ人の妻との間に生まれた欧亜混血女性で、1939年にかの女が没するまでふ たりの間に別れは訪れなかった。

船上でのかの女との出会い。そのころ、ヘルフェリッヒはオランダ語がまだうまくなかったためにふたりはフランス語で会話した。最初かれはその女性をインドシナに向かうフランス系のひとと思ったが、「わたしの父を知っているか?」と尋ねられ、言われた名前がオランダとドイツ系のものだったことで誤解が明らかになった。[続く]

「ヌサンタラのドイツ人 (終)」 (2020年10月05日)

1932年からヒトラーとの関係が始まり、かれはナチスを支える諸組織の役員を務めるようになる。1940年には東アジア協会会長として東京を訪れ、講演を行っている。

かれの事業の一つ、西ジャワのチコポ Cikopo に設けた茶農園の話は拙作「南の島の Uボート」の中で触れられているので、それをご参照ください。これも度欲おぢさんの サイトでどうぞ。

http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/Kawan-33U-boats.pdf

20世紀前半の時代のドイツ人で忘れてならないのはバリ島のヴァルター・シュピース Walter Spies だろう。ヴァルターはドイツ人外交官の父とドイツ人貴族の母の間に 1895年、モスクワで生まれた。しかし他の情報によると、父は実業家であったり、

あるいはドイツ人の祖父がロシアに帰化し、父はロシア国籍でドイツの名誉領事だった というものもある。ドイツ人の項に加えて良いものかどうか迷うところだ。

モスクワで暮らしていた一家は共産革命によって貧困生活に叩き落とされ、ヴァルター自身もバシュキール bashkir 地方へ流刑された。三年間のバシュキール時代にかれは底辺層のひとびとと交わり、どん底生活の中で絵画を始める。展覧会のためにドレスデンへ行き、更にアムステルダムに移ったが、バシュキール時代の生活はかれのヨーロッパ社会に対する観念を根こそぎ覆してしまっていたのである。かれは自分がヨーロッパ社会の一員であることを嫌悪し、ヨーロッパの中にいる自分を消滅させることに憧れるようになる。

1923年にかれはヨグヤカルタを訪れ、スルタンの依頼でヨーロッパ式管弦楽団の編成を行った。あるときバリを訪れたかれはそこに自分の存在の場所を見出して、1927年にウブッ Ubud での暮らしを開始する。

自然主義者で同時に画家・音楽家・作曲家など多彩な才能を持ったかれは世界に向けてバリ文化を発信する立場に立つことになり、その関連でマーガレット・ミードやチャーリー・チャップリンらがバリを訪れて休日を楽しむようになった。

1937年、かれはカランガスム県イセ Iseh に山小屋を建てて住み、種々の芸術活動を行ってバリの著名人になる。植民地官憲は危険なドイツ人に対する監視を強め、折りしも行われた同性愛者取締りに関連して1938年にヴァルターを逮捕した。マーガレット・ミードをはじめとする世界的著名人たちの人脈が、1939年にかれを牢獄から放免した。

だが第二次大戦の勃発でナチスドイツがオランダを占領したために、東インド植民地政庁は在留ドイツ人を数千人抑留キャンプに入れた。戦争前には東インドに8千人のドイツ人がいて、その中に芸術家が159人いたという記事もある。

日本が東インドに対して軍事行動を開始すると、抑留キャンプのドイツ人はセイロン島へ移されて行った。1942年1月にスマトラ島西海岸のシボルガ Sibolga を出港したKPMの貨客船ファン・イムホフ号はそのプロジェクトの最後をしめくくるための航海を478人のドイツ人を乗せて行った。ヴァルターはその中のひとりだったのである。

ところが沖合に出たとき、ファン・イムホフ号は日本軍爆撃機に発見されて攻撃を受け、爆弾が命中したために航行不能になって沈没が始まった。ファン・イムホフ号乗組員は互いに助け合いながら脱出したが、抑留者ドイツ人は見捨てられた。オランダ人はかれらに救援の手を差し伸べなかったのだ。ドイツ人は自力で脱出を試み、2百人ほどが船を離れたものの、最終的にニアス島にたどり着けた者は66人だけで、他の者は不帰の客になった。66人の生還者の中にヴァルター・シュピースはいなかった。[完]

「ヌサンタラのスイス人 (1)」(2020年10月16日)

1876年、チューリッヒの北でドイツとの国境にある町ハラウ Hallau でハインリッヒ・ズーベック Heinrich Surbeck は生まれた。1895年から1900年までチューリッヒテクニカルカレッジで学んだハインリッヒは、化学技術学士号を得たものの肺の病を患って1902年に北スマトラの山岳部に向かった。その時期のかれの足跡はよく分からない。だが空気の澄んだ高原地帯で勤労にいそしむ日々を送っている間に、かれの病は完治してしまったようだ。

1906年、かれはアサハンのグヌンムラユ Gunung Melayu にガンビル gambir の工場を作った。ガンビルというのはカギカズラ属の植物で、カテキンやタンニンを含んでおり、葉や枝から湯に浸出させたものを凝固させて作る。

インドネシアで太古からの習慣になっているシリを噛むときに使われてきたが、化学技術の発達によって医薬素材としての効能が認識され、胃炎・下痢・傷・やけど・また口内をきれいにするといった用途に使われている。インドネシアでの工業生産はほとんどが西スマトラ・リアウ・南スマトラ・ブンクル・西カリマンタンで行われ、国内消費以外にインドやシンガポールに輸出されている。

ガンビル工場が稼働を開始するとかれはプマタンシアンタル Pematang Siantar に移り、発電所、ホテル、そして別の工場をそこに設けた。NV I js Fabriek Siantar と命名されたこの工場では、製氷と飲み物が生産された。かれはさらにパダンシデンプアン Padang Sidem-puan にも進出して発電所と工場を作った。

1916年に作られたシアンタル製氷工場で生産された飲み物は炭酸飲料とマルキサ markisa の果汁で、マルキサは Marquisa Sap の商品名が付けられて国内主要都市から スイス・オランダ・ベルギーにまで輸出された。

1970年代前半にジャカルタのメスでよく出された飲み物のひとつにメダンのマルキサシロップがあったのは、ひょっとしたらその知名度によってマルキサとメダンがジャカルタのひとびとの深層意識の中で結び合わされていたせいかもしれない。インドネシアのいたるところで旺盛に繁茂するマルキサの樹がメダン特産物であるはずもなく、古い時代にマルキサの商品化がメダンで行われたことがずっと後まで尾を引いていたのではないかという気がわたしにはする。

あのころ、マルキサはメダン、サラッ salak はバリというのが通り相場になっていて、メダンやバリに出かけるひとはたいてい通り相場のお土産を頼まれたものだが、今どきそんな地元特産物の話をしても、地元民の間ですら真に受けるひとはいないだろう。

炭酸飲料の方はBadakのブランドが付けられて北スマトラ地方からジャワ島にまで販売網が広がり、一世を風靡した。最盛期には月産3万5千クレートがスマトラとジャワの販売網に流されている。コカ・コーラが東インドに入って来たのは1927年であり、バタヴィアで現地生産が開始されたのが1932年のことだったから、バダッはたいした競争相手のない大平原をその名のごとくまっしぐらに突進していたにちがいない。

ズーベックがプマタンシアンタルに工場を作ったのは、氷のための良質の水を得る面で利点があったことに加えて、周辺エリアまで含めたこの高原地帯にたくさんの農園が作られており、裕福な階層の生活圏が形成されていたのだから、その旺盛な消費パワーを当て込んだのも理由のひとつと見られている。[続く]

「ヌサンタラのスイス人 (2)」 (2020年10月19日)

バダッ印ソーダ飲料は、ソーダ水に始まってオレンジ・グレープ・サルサパリラ sarsaparilla 味のバリエーションが生産された。地元のプマタンシアンタルやメダン で、バダッ炭酸飲料の愛好者はいまだにたくさんおり、かれらの間ではサルサパリラが もっとも好まれ、ひとびとはそれをサルシと短縮して呼んでいる。

サルサパリラというのは中南米原産の植物で、19世紀に米国で飲み物に使われて普及した。ヨグヤカルタの王族貴族たちはこのソーダ飲料をジャワコーラと呼んだそうだが、サルサパリラ自体をジャワ人はサパレラ saparella と発音した。ルートビアーroot beer にも使われているそうだ。

ジャカルタではすでに炭酸飲料マーケットから脱落した印象のあるバダッだが、ムア ラカランのレストランに置かれているのを見たと語る工場関係者もいる。

日本軍政期に入っても、この製氷工場は従来通りの形で生産を続けた。日本軍から監 視官が派遣されて常駐したものの、工場はそれまで通りの形態が維持された。

共和国独立宣言のあとオランダの復帰が開始されると地元青壮年が反オランダ武力闘争を起こし、ズーベックはそのターゲットにされて1945年に殺された。ズーベックのふたりの子供はなんとか難を免れて、ヨーロッパに避難することができた。

その子供のひとり、1909年にグヌンムラユで生まれたリディア・ロサ・ズーベック Lydia Rosa Surbeck がプマタンシアンタルに戻って来たのは1947年のことだ。 ズーベック一族が不在の間も工場は操業を継続しており、戻って来たリディアに経営の手綱が渡された。その後リディアはプマタンシアンタルでオットーというオランダ人と 結婚した。

オットーとリディアの夫婦が工場経営に奔走しているとき、共和国政府のオランダ資本接収の動きが始まる。オットーとリディアは工場経営からすっぱりと身を引き、1959年に大番頭格のエルマン・タンジュン氏に工場経営をゆだねた。夫婦は1963年までインドネシアで暮らしていたが、最終的にスイスに移って新たな生活を始めている。

エルマンは1938年に17歳でこの工場の平社員として入社した叩き上げの人物であり、その後ハインリッヒの側近のひとりにまで伸びあがった。エルマンにとっては、たとえ経営をゆだねられたとはいえ、工場資産はズーベック一族のものだという考えが頭から離れなかったに違いあるまい。

バラッ通商会社のオーナーであるユリアヌス・フタバラッ氏と知り合った時、エルマンはユリアヌスに工場売却の話を出してみた。ユリアヌスは興味を示した。エルマンは密かにオットーから売却に関する指示をもらって交渉を進め、1969年に売却がなされたのである。支払いは1971年に完済して、工場オーナーはユリアヌスに代わった。

会社名は PT Pabrik Es Siantar とインドネシア語化されたが、エルマンは 1 9 8 7 年まで工場経営の采配を振るった。そのあとはユリアヌスの息子が工場経営を受け継いでいる。

会社名が変更された後も、この工場はプマタンシアンタルの産業界を代表するほどの 地位にあった。プマタンシアンタルの町への電力供給も自前の発電所から行われた。町 の映画館は工場に敬意を表して、7つの座席を工場用の貸し切りにし、会社名を書いて 一般客用とは別扱いにした。工場から座席を使うという連絡が入れば上映時間は無視さ れて、工場関係者がやってくるまで映画は始められなかったという話だ。 バダッ炭酸飲料の生産は今日まだ続けられているものの、生産量は最盛期の半分に低下している。製品バリエーションは炭酸水とサルサパリラだけに絞られた。炭酸飲料業界はさまざまな逆風を乗り越えるために、針路を模索している状態だ。[続く]

「ヌサンタラのスイス人 (終)」(2020年10月20日)

プマタンシアンタルのスプラッマン通り JI WR Supratman には、シアンタルホテルが今でも営業している。ロビーにはピアノが置かれ、壁には昆虫や植物標本の入った箱が6個飾られて、ホテル経営者が自然に深い興味を抱いていることをうかがわせている。ところが、それはただの興味どころではなかったのだ。

ハインリッヒ・ズーベックが建てたこのホテルに飾られているすべての標本箱は、その創始者が手ずから作ったものだったのである。化学技術の学士号を持つ技術屋の心の 底には大自然に向けられた強い愛情が流れていたにちがいあるまい。

オランダの国立植物標本館 Nationaal Herbarium Nederland の解説によれば、ズーベックは1914年からスマトラ東海岸レシデン区のスガイタルアン Sungai Taroean、アサハン Asahan、アイェルサコル Ayer Sakor、バンカラッ Bangkalak、ウラッブタル Oelak Boetar などで動植物の採集活動を開始し、そのあとトバ湖周辺に移ってカバンジャへ Kabanjahe、グヌンリアリア Gunung Ria-ria、テレ Tele、シディカラン Sidikalang 等々で原生の動植物を採集してまわった。しかし日本軍の占領によって、西洋人のかれが自由に山野を渉猟できる機会は閉ざされてしまう。

日本軍がやってくるずっと以前に、1914年から17年までの間に作ったシダ類の標本を携えてかれはチューリッヒに赴き、母校の教授に紹介したものの反応は芳しくな

く、諦めてしばらく様子を伺っていると、別の教授がやってきて買い上げてくれた。その教授はズーベックの標本を全部買い上げており、それらは今でも大学の植物標本庫に保管されている。以後、ズーベックの作る標本はチューリッヒ、レイデン Leiden、ボゴールに置かれるようになった。

しかし1941年に作られた標本は日の目を見ることなく消えてしまった、とズーベックの傍らに仕えていたエルマン・タンジュン氏は語る。

「日本軍が来るので、ズーベックさんは標本の描画を行っていました。標本が壊されたり無くなったりすることを心配して、画に描いておこうと考えたようです。その仕事を始めると、部屋の中にこもりっきりになるのです。画ができあがるとわたしを呼んで感想を求めました。本物そっくりに描かれていましたよ。画は4百枚くらいできていました。ところが、その力作がどこにしまわれたのか、探しても見つからないのです。あれが残っていれば、たいへん価値のあるものだろうと思われるのに、本当に残念なことです。」

ズーベックの娘のリディアが1947年にプマタンシアンタルに戻って来たのは、父親の事業を継ぐことだけが目的ではなかった。この娘は父親のライフワークだった標本作りをも引き継いだのである。

オランダ国立植物標本館にはリディアがスマトラ東海岸レシデン区で採集した標本にはじまり、かの女が機会を見つけては作り続けた作品が保管されている。1953年にはプマタンシアンタル周辺で、1954年にはパラパッ Parapat とシマルグン Simalungun で、1955年にはポルセア Porsea、スリブドロッ Seribu Dolok、リマプルッ Lima Puluh などで採集された標本が作られ、ヨーロッパに送られた。リディアが制作した標本も、かの女が愛し、尊敬した父親のものと共に、チューリッヒとレイデンに保管されているのである。[完]

「ヌサンタラのイギリス人(1)」(2020年10月21日)

ヤン・ピーテルスゾーン・クーン Jan Pieterszoon Coenによるバタヴィア建設の歴 史には最初からイギリス人がからんでいた。元々両者はバンテンに商館を開いてビジネ スを行っていたが、オランダ人が商館をバンテンからジャヤカルタ Jayakarta に移した とき、イギリス人もオランダ人の後を追ってジャヤカルタでのビジネスをも取り込もう とした。イギリス人はバンテンの商館を維持したまま、その拡張を目指したという違い だ。その時期、両者はすでに武力抗争状態に入っていた。

当時のジャヤカルタの街はチリウン川(今のカリブサール)とクルクッ Krukut 川にはさまれた洲の上に作られており、オランダ人はチリウン川東岸のジャヤカルタの街の外に商館建設の許可を得て建築を開始する。その一帯はプチナン Pecinan (華人居住区)になっていた。

最初に建てられたのは掛け値なしの商館であり、しかも十分な建築資材が得られなかったために見すぼらしい小さいものしかできなかった。それを商館だと言いながら実際には城 kastil に改築したのがクーンであり、かれのその行動は腹の中でアジアにおけるVOC商業帝国の野望が既に固まっていたことを証明するものだろう。

ジャヤカルタの支配者はオランダ人と抗争状態に入り、後追いでやってきたイギリス人と同盟を結んでオランダ人に対抗した。そのためにイギリス人はチリウン川西岸のジャヤカルタの街の中に商館建設の許可を得ている。そして川をはさんでカスティルと対面している、現在のVOC造船所の跡地にイギリス商館の建設を開始したのである。

イギリス人も商館と言いながら頑丈な建物を建設して大砲を置いた。戦闘の際の陣地 が意図されていたのは明白だ。だがその陣地が完成する前の1618年12月23日夜 に、オランダ人はカスティルから船でカリブサールを渡って夜襲をかけ、未完成の建物

を燃やして灰にした。1618年12月23~25日の間、ジャヤカルタの随所で市街 戦が繰り広げられた。しかし圧倒的な兵力差のために、オランダ側はカスティルでの籠 城を余儀なくされる。

海上でもトーマス・デイル率いるイギリス側の優勢な軍事力のためにオランダVOC 船隊は叩きのめされて、クーンがマルクに逃走する結果になった。その当時VOCの本 部はマルクに置かれており、オランダ側の軍事力はマルクに集中していたのである。

イギリスに反撃するためクーンはマルクから十分な軍船と陸戦部隊を連れてジャヤカルタに戻って来た。そして海上のイギリス軍を打ち払い、陸上でもイギリスとジャヤカルタの連合軍に打撃を与えてオランダの立場を回復させた。そうこうしているうちにバンテン軍がジャヤカルタの治安を掌握して戦争状態は終わりを告げた。ジャヤカルタはバンテンの属領なのであり、自国内の騒乱を属領だからと放置する支配者はいない。

こうなればイギリス人はジャヤカルタから引き上げざるを得ない。イギリス人はバンテンでの商売に専念することにしてジャヤカルタを去った。クーンにとっては思うつぼだ。状況が落ち着いたあとVOC軍はバンテン軍への攻撃を開始し、ジャヤカルタの街中からすべての原住民を追い払うと町のすべてを焼き払い、そこにアムステルダムに似せてヨーロッパの街を建設した。

そこにいたのがクーンでなかったなら、あるいは捲土重来してきたクーンがイギリス との戦闘に敗れていれば、インドネシアはイギリスの植民地になって今頃はコモンウェ ルスの一員の道を歩んでいたかもしれない。[続く]

「ヌサンタラのイギリス人 (2)」 (2020年10月22日)

1685年、イギリス人がスマトラ島南部西岸のブンクル Bengkulu に取り付いた。 VOCは1664年にそこに駐在員を置いたのだが、6年後に駐在ポストを閉めた。その地で得られるものは駐在員を置くだけの価値がないと判断したようだ。とはいえ、VOCの船は時によってそこに立ち寄っていたから、まったく等閑に付していたわけでもない。

イギリス人はそのチャンスに乗じた。1685年にイギリス東インド会社EICの船がやってきて現地の状況を調べ上げると、地元スルタンとの交渉に入る。北からアチェが覇権を南に拡大していた時期であり、16世紀と17世紀にアチェとブンクル間で戦争が行われている。

1695年にイギリス側が商館開設・コショウ売買独占・裁判権などを手に入れる内容の条約が結ばれ、イギリスは支配を内陸部へと広げて行った。イギリス人はブンクルをベンクーレン Bencoolen と呼んだ。しかし原住民反乱が頻発したため、イギリスは1718年にマルボロ要塞 Fort Marlborough を建設して防衛力を高めはしたものの、1719年の反乱の結果、ブンクルの将来性に見切りをつけて全イギリス人がそこから退去した。

イギリス人がブンクルに戻って来たのは1724年で、内容を軟化させた条約をその年4月にスルタンと再度交わしている。それからちょうど100年後の1824年3月17日、イギリスとオランダの間で領有地の交換が行われた。それぞれが支配している面上にある相手の点を交換して、一面を完ぺきに自分のものにしようというのがその目的だ。その結果、ブンクルはオランダが手に入れ、オランダはマラッカをイギリスに譲った。

ナポレオン戦争でヨーロッパが激動に見舞われ、オランダ本国がバタヴィア共和国に なってフランスにすり寄ったあと、ナポレオンは弟を国王にしてオランダを属国にす

る。弟の失政でナポレオンがオランダを併合し、そこをフランスの一州に変えたとき、 オランダの海外領土を奪取する公然たる理由をイギリスはつかんだ。海外覇権におくて のフランスはイギリスに赤子の手をひねられてしまうことになる。ジャワだけでも死守 しようと試みたものの、頼みの綱のダンデルスをフランスに呼び戻してしまってはアリ の一穴が起こるしかあるまい。

イギリス東インド会社インド総督のミント一卿は1807年に、インド洋のフランス =オランダ権益を総なめにすることを計画した。モーリシャス Mauritius からジャヴァ Java まで、がかれのスローガンになった。

サミュエル・オークマティ Samuel Auchmuty 中将指揮下のイギリス東インド会社ジャワ島進攻軍は大型軍船 4 隻、フリゲート 1 4 隻、スループ 7 隻、クルーザー 8 隻、輸送船 5 7 隻に 1 万 2 千人が分乗してカルカッタとマドラスを発進した。この一大軍事行動は大英帝国がアジアで行った史上最大規模のものだった。もちろん、第二次大戦を除いてはということだ。第二次大戦までその記録は破られることがなかったのである。

この大船隊はまずペナンに達してから南下してバンカ島に立ち寄り、更にジャワ海をジャカルタ湾へと押し出して行った。イギリス人はバンカ島をセントヨーク St York 島と名付け、ムントッ Muntok の町をミントー卿にちなんでミントと呼んだ。地元民の中にその町を Minto と呼ぶひとがいまだにいるそうだ。[続く]

「ヌサンタラのイギリス人 (3)」(2020年10月23日)

イギリス軍は1811年8月4日夜間にバタヴィアから15キロほど東方のチリンチン Cilincing 海岸に上陸を開始し、全軍の上陸が完了したのは8月7日だった。完璧な無血上陸だ。前衛部隊は既に海岸沿いを旧バタヴィア城市に向かって進軍しており、続々とダンデルスが見捨てた過去の都に入って行った。ダンデルスによって城壁が撤去

されてあった旧バタヴィア城市にイギリス軍は難なく進入し、バタヴィア市庁舎 Stadhuys に軍司令部を置いた。

フランス=オランダ側は北岸部の住民を安全地帯に移動させており、退避命令に応じない原住民には飲用水を余分に持たせないようにした。敵兵をどうやって苦しめるかは 戦略の基本だろう。

イギリス軍はたいして間を開けずにヴェルテフレーデンへの攻撃を開始する。モーレンフリート沿いの道を騎馬と歩兵が突進して行った。あちこちで散発的な交戦が始まる。するとダンデルスの後を受けたヤンセンス Jan Willem Janssens 第37代総督は、早々とヴェルテフレーデン防衛部隊をメステルコルネリスに引き上げさせて背水の陣を固めた。

南往き街道をメステルコルネリスに向けて進軍するイギリス軍は、街道沿いに設けられたフランス=オランダ軍の砦に悩まされながらもメステルコルネリス要塞に向けて接近していく。1811年8月26日に要塞が最終的に陥落した後、中部ジャワに逃走したフランス=オランダ軍にはイギリス軍と対等に戦う能力が残っておらず、イギリス軍が行う掃討戦に敗れて白旗を掲げる結末が相次いだ。イギリス軍に捕らえられたフランス=オランダ軍兵は6千人にのぼった。

こうして1811年9月18日にスマラン地方で行われた最後の決戦で敗れたフランス=オランダ軍はスマラン郊外のトゥンタン Tuntang 村で降伏文書に調印し、イギリスの勝利が確定した。イギリスはジャワとパレンバンそしてマカッサルの統治権を手に入れたのである。

そのジャワの統治権をイギリスは1816年8月15日にオランダに返還し、マレー 半島経営に専念するようになる。ジャワの統治に心血を注いでいたラフルズ第40代総 督はその返還に反対したが、大英帝国の思惑は違う所にあり、ラフルズの希望と夢は潰 えてしまう。落胆したラフルズは心機一転してシンガポール島の開発に乗り出し、今日

のシンガポールの礎石を築いた。返還がなされずラフルズの手腕が振るわれ続けていた ら、ジャワ島は・・・・シンガポールは・・・・?

1819年、ロンドンミッショナリーソサエティの牧師がジャカルタのコニングスプレインの南東でチキニ地区の北端部に土地を買い、質素な教会を建てた。現在トゥグタニ Tugu Tani と呼ばれているモニュメントと道路をはさんでちょうど真向いにその教会がある。この教会は1829年に改装されて豪壮な建物に変わった。アングリカン教会AII Saints Church/Anglican Church と呼ばれているこの教会の墓地にはイギリス軍将校たちが埋葬されており、1811年の戦争の際の戦没者も含まれているという話だ。[続く]

「ヌサンタラのイギリス人(4)」(2020年10月26日)

帆船による大航海時代に名を遺した船長たちもバタヴィアを訪れた。1770年4月にエンデバー号による航海でオーストラリアの南東海岸部をはじめて発見したヨーロッパ人として著名なキャプテンクックはその後オーストラリアから東インドに向かい、バタヴィアに寄港した。スリブ群島 Kepulauan Seribu の中のひとつでVOCの造船所と船舶修理施設が完備されているオンルスト Onrust 島で船の修理を行う間、船長はバタヴィア城市内南部の、今日トコメラ Toko Merah と呼ばれている建物に宿泊した。

このトコメラは現在の西カリブサール通り JI Kali Besar Barat 南詰にあるバタヴィアチャータードバンクビルからほぼ百メートル北に位置している、表が全面的に赤色で塗られている建物で、周りが一様に白塗りだから遠くからでもすぐに分かる。トランス

ジャカルタバスのコリドール12に乗って西カリブサールバス停で降りれば、トコメラはすぐそばだ。

この建物は1730年にファン・イムホフが第27代総督になる前に建てたものだった。2,471平米の土地にかれは豪壮なヴィラを建てた。ファン・イムホフのあと第28代のヤコブ・モッスル Jacob Mossel 総督 (1750?1761),第29代のファン・デル・パッラ Petrus Albertus van der Parra 総督 (1761?1775),第31代レイニア・デ・クラーク Reinier de Klerk 総督 (1777?1780),ニコラス・ハーティン Nicolaas Hartingh やフォン・ホーエンドーフ Baron von Hohendorff ら高官たちも本人や家族がそこを居所にした。

1786年から1808年までそこはヒーレンロジメン Heeren logement として使われた。VOCにとっての貴賓用宿舎だ。アムステルダム本社のヒーレンが出張して来たり、諸外国の高貴な人物が訪れたときに使われたと思われる。キャプテンクックが泊まったのはその前だから、多分ファン・デル・パッラ総督の賓客として泊まったのだろう。

その時期、この宿舎には客用の馬車8台、馬16頭が建物裏に用意されて、客の外出の用を足した。もちろん、西洋社会においては自動車が発明されるまで馬と馬車が個人用交通機関だったのだから、宿舎として使われる以前も以後もその建物に厩舎とガレージがあったことは十分に想像される。それに加えて表のカリブサールにはスンダクラパ地区のバタヴィア港との往復のために小船が6艘用意されていた。主に荷物の運搬に使われたようだが、ひとも運んだのではあるまいか。

1743年に総督になったファン・イムホフは、海員養成学校 Academie de Marine をこの建物に開いた。学校は1755年まで続いたそうだ。VOCの船に乗組んで指揮を執る人材の養成が、バタヴィアおよび東インドの諸都市に住む青少年を対象にして行われたのである。この学校はその種のものとしてアジア最古だと謳われている。

1809年から13年までアントニー・ナケア Anthony Nacare がそこに住み、その後さまざまなひとの手から手に渡された後、1851年になって華人カピタンのウイ・リオウコン Oey Liauw Kong の手に落ちる。ウイは建物の表を赤塗にしてそこを商店にしたため、世上でトコメラと呼ばれるようになった。だからキャプテンクックの時はまだトコメラになっていない。

しかしトコメラという名前の由来を1740年10月の華人街騒乱 Chinezenmoord に結びつける者がいる。華人を見つけ次第皆殺しにせよという命令を受けたVOCバタヴィア防衛軍が華人居住者の多いバタヴィア城市内西側の南部貧困地区で一大殺戮を行ったことから、カリブサールの水が真っ赤に染まった。そのイメージが建物に結び付けられたというようなことを匂わせる話になっている。この種の話をわたしは最初、華人がかれらの被害者意識を泣訴するためのものというように感じていたのだが、最近ではどうもその反対ではないかという気がしてきている。華人憎悪者が華人に向けた嫌悪感を裏側に秘めているような気がしてならないのである。[続く]

「ヌサンタラのイギリス人(終)」(2020年10月27日)

グヌンサハリ Gunung Sahari という道路名は一日で華人の屍が山になったからだ。ジャティヌガラのラワバンケ Rawa Bangke という地名は、華人の屍が池を埋めたためにそう呼ばれるようになったのだ。アンケ Angke という地名は漢字「紅渓」の福建語読みであり、アンケ川の水面が華人の血で朱染めになったことに由来している。云々・・・・

歴史的な考察を加えればそれらが史的事実から逸脱していることは明白なのだが、それでもそんなことを言うのは、「だからお前たち華人は気を付けな」という意図を裏に 隠しているように思えて仕方ない。

日本軍政期にはジャワ軍政監部衛生局がこの建物を使ったようだ。

ところで、トコメラにも妖怪譚がある。二棟から成るこの建物は一階に16室、2回に4室、3階に5室と多くの部屋があり、そのどこかの部屋で時折窓から外を見ているオランダ娘の姿を見ることがあるというのがその話だ。そのオランダ娘は華人大虐殺のとき、外で繰り広げられている暴虐を見て被害者を助けようとし、オランダ兵に殺されたのだという説や、この館では昔、オランダ娘を折檻することが行われていて、それで生命を落とした娘もおり、今でも館内ではふっと娘の忍び泣きする声が聞こえたり、悲鳴が聞こえたりするという説もある。また館内見学の少女たちの中で、突然憑依現象に襲われる者がおり、気絶したり、暴れてオランダ語を流暢に喚き散らす者があるという話もある。もちろん本人にオランダ語の素養などない。

キャプテンクックの他にも、イギリス人船長は何人かトコメラに宿泊している。著名人物としてはバウンティ号反乱事件で有名になったキャプテンブライがいる。1789年4月28日にバウンティ号を乗組員に乗っ取られたブライ船長以下19人は、全長9メートルのランチに乗せられ、タヒチ島海域で大海の中に放り出された。

一行はヨーロッパ文明が存在する東インドのティモール島を目標に定めて、大海を小船で渡る6千7百キロの冒険行を開始したのである。キャプテンクックの薫陶を受けたブライ船長は常人の及ばない航海術を駆使し、47日をかけてその距離を踏破してティモール島クパン Kupang に1789年6月14日に到着したのだった。

クパンからバタヴィアに到着したブライ船長は日記にこう書いた。「バタヴィアでは、他の場所に宿泊してはならない外国人の宿舎があり、そこに泊まった。このホテルはたいへん汚く、ろくにメンテナンスがなされていなかった。」

バタヴィアにやってきた他の船長たちは、ニューブリテン島を発見したウィリアム・ダンピア William Dampier が1700年に、1766年にジョン・バイロン John Byron、そしてフィリップ・カートレット Philipe Carteret などと多彩な顔触れになっている。

南太平洋を走る船はバタヴィアが外すことのできない寄港地になっていたようだ。た とえどれほどコレラやマラリアで生命を落とすリスクが高かったとしても。[完]

「ヌサンタラのロシア人(1)」(2020年11月16日)

ロシアの歴史の中にインドネシアが初めて登場したのは17世紀末のころだ。ピョートル大帝の時代に語られていたオストロヴニツァ Ostrovnitsa という地名がヌサンタラを示していたことは今や共通の見解になっている。

ロシアのふたりの世界周航家イヴァン・クルゼンシュテルンとユーリ・リシャンスキーは1806年にスンダ海峡を通って東シナ海に抜ける航路を取り、そのときヌサンタラ住民とロシア人の接触が史上初めて起こった。それ以来、ロシアの船は相次いでオランダ領東インドを訪れてケロシンや工業製品を住民に売り、コーヒー・茶・タバコ・コプラ・スパイス・鉛などを住民から買った。

1876年、ボゴール植物園の植物誌とスンダ及びジャワの原住民の生活や慣習を記した5冊の書物が出版された。その著者がロシアの民族学・人類学者ニコライ・ミクルホ-マクライ Nicholai Mikluho-Maklai である。

かれは1870~80年代にニューギニア島に入って調査を行った。島の東北部と西南部を訪れて調査し、ニューギニア島東半分のイギリス領と西半分のオランダ領の両方で情報と資料を集めた。その島にかれが最初に上陸したおよそ百キロの長さを持つ東北部の海岸はロシア語版世界地図にミクルホ・マクライ海岸と書かれている。最初は西洋諸国の地図にも Maclay Coast が記されていたものの、第一次大戦後オーストラリアがその海岸の名称を Rui Coast に変えた。パプアニューギニアのひとびとはそのロシア人学者をいまだに尊敬しており、海岸の名称をミクルホ・マクライ海岸に戻す議論がときどき巻き起こっている。

ニコライ・ミクルホ - マクライはノヴゴロドのラジュデスヴェンスコイェで1846 年に生まれた。父親は鉄道技師で、サンクトピテルブルク⇔モスクワ間の鉄道線路敷設 に関わった。11歳で父親を失ったニコライは1863年にサンクトピテルブルク大学

の数学物理学部に入ったものの、政治運動に関わったため放校された。かれはロシアを 去ってドイツに向かった。

ハイデルベルク、ライプツィヒ、イエナの諸大学で哲学・人類学・民族学・動物学を 修得して学士号を得、スペイン・イタリア・イギリスなどを歴訪して各地の学者と交流 してから、調査研究に発心してカナリー諸島・モロッコ・スエズ・紅海を遍歴した。シ アキンとジッダで奴隷市を目の当たりにしたかれは、そこで感じた人道的な怒りを日記 に書きなぐっている。

ロシアに戻って調査研究の成果を発表したかれは、次にニューギニア島に向かい、さらにマラッカ半島に入ってトレンガヌ・クランタン・パハン・ジョホールを訪れ、奥地に入ってスマン族とサカイ族を観察した。それからフィリピンを経て南太平洋の島々やオーストラリアに行き、民族学・人類学・地理学・気象学などさまざまな分野で成果を残した。

その中で、かれの興味はパプアニューギニア人にもっとも深く注がれたようだ。滞在した土地で動植物や地理を観察し、また原住民の生活に密着してさまざまな秘密を解き明かそうとした。1871~72年、1876~77年、1883年と三度もその島を訪れて滞在し、島の東北部海岸地区と西南部地区のパプアコウィアイ Papua Kowiai で調査研究にいそしんだ。[続く]

「ヌサンタラのロシア人(2)」(2020年11月17日)

1871年の最初の訪問の際、かれはサンクトピテルブルク港からコルヴェット艦ヴィティヤス号に乗ってロシアを離れた。艦は各地に寄港しながら世界周航ルートをたどり、1871年9月18日にニューギニア島東北部のアストロリャビア湾に停泊した。

近郷にあるゴレンドゥ、ボング、ボガティムの村々の住民は、これまで見たこともない煙を吐く大きな船がやってきて、色の白い人間が上陸して来るのに驚いた。最初は武装した8人の原住民がニコライに向かって矢をつがえ、矢先はかれの顔と胸に向けられた。ニコライは敵意の全くないことを示しながら親しみを込めて悠然と応対し、徐々に緊張はほぐれて原住民は矢をおさめた。

ニコライが最初に知り合った原住民は名前をトゥイと言い、トゥイとその息子はかれにとって終生続く友情で固く結ばれることになった。ニコライとトゥイは手をつないで、そこから一番近い村に向かった。原住民の間で顔を知ってもらうためだ。出会う村人のひとりひとりにニコライは土産物を与えてあいさつした。

ひとわたり村人に顔を見知ってもらったかれは、上陸地点に戻った。海岸のボング村 寄りの場所にヴィティヤス号の船員たちがニコライのための家を建てていた。その家 で、かれはスエーデン人の鯨漁師ウルソンとポリネシア人少年の二人と共に暮らし始め た。

陸上での成り行きを確認するために、ヴィティヤス号は数日間停泊した。色の白い人間が敵対行動をしかけてこないのに安心した原住民は、手土産を携えてヴィティヤス号に接近し始めた。ヤシの実・バナナの房・熱帯のさまざまな果実・・・。中には豚一頭をプレゼントした者、あるいは犬を二頭持って来た者もあった。かれらは興味津々と艦上に上がって来て、好奇心満々に艦内を見て回った。ロシア人士官や船員がかれらを歓迎したのは言うまでもない。

この大自然の下で生きている未開の人間たちの姿の中に、ニコライというひとりの人間を作り出している文明なるものの原点をかれは見出したのだろうか。それは人間としてのかれ自身の原点に二重写しになるものであったにちがいあるまい。故国から遠く離れたニューギニアの地でかれはやっとそれに出会ったということなのだろうか。

かれはそこでの暮らしの中で原住民との平和共存をはかり、原住民はかれを受け入れてさまざまな祝祭や慣習行事に招いてくれた。原住民の暮らしを細かに知るうえで、それが大きなメリットになった。さまざまな種族の言葉にも、かれは精通するようになった。

かれはまた、文明社会が持っている多様な知識を原住民に指導し、病人や怪我人にできるかぎりの治療を施し、釘の使い方や釣り針で魚を捕ることを教えた。原住民が釣り針で捕った魚をかれの家にしばしば持って来た。かれは日誌に書いている。「毎日、同じようなことを繰り返している。朝は動物学者になり、病人が出れば医者になり、薬剤師になり、料理人になり、洗濯人になる。要はマスター何でも屋だ。」

そんな何でも屋はイラストも描いた。原住民の肖像、石斧や鍬などの道具類、崇拝する神像、そして原始のまま息づいている風景。

ニューギニア人が昔は金属の製法を知っていた時代があり、一時期は文明の発展階段 の上位に立っていたことがあるという仮説をかれは立てている。しかしその英雄的時代 は終わり、かれらは自然の中で生きることに方針を変えた。

耕作や漁労で食糧を得、慣習を単純なものにし、人間同士が愛し合い、いたわり合って平和に暮らす道を選択した。ニコライはこう書いている。「わたしは原住民たちの礼儀正しさと穏やかな人間関係に感嘆する。妻子に対する親睦感情はたいへん大きいものだ。家族の間でいがみ合いや喧嘩が起こったことをわたしは見たことがないし、また、村の中で盗みや殺人が起こったことなど聞いたこともない。生活共同体の中にはボスがおらず、そして貧富の差もない。だから嫉妬も憎しみも存在しえないのだ。

現地の娘たちの倫理性もヨーロッパの娘たちに十分匹敵するものだ。偽善の中で教育され、人為的な偽善に満ちているヨーロッパの娘たちの倫理性がここの娘たち以上のものであるとは言い難い。」

[続く]

「ヌサンタラのロシア人 (3) I (2020年11月18日)

ニコライの消息が絶えて月日を重ねたことから、イギリスのマスメディアがニコライ 死亡の憶測を流した。それに驚いたロシア人が、事の真偽をたださんとしてイズムルッド号を派遣した。

船がアストロリャビア湾に到達したとき、ニコライの家は何事もなかったかのように 建っており、そして原住民がいて、その間にいるニコライが手を振っているのが見え た。そのとき、船内に「ウラー」の大合唱が湧きおこった。

ニコライがその地を去ることを伝え聞いた周辺の村々から、引き留めようとする意向 を携えた原住民がひっきりなしにやってきて、嘆願し、口説いた。再会を約束してニコライは船上の人となった。

船はかれをマルクのティドーレとテルナーテに運んだ。そのあと、船はさらにフィリピンのマニラに寄港し、ニコライは山中に住むネグリート族の生活を観察した。小柄なネグリート族がニューギニア原住民とよく似た性質を持ち、類似の生活習慣を営んでいることが明らかにされた。

その後、船はジャワ島のバタヴィアに入り、ニコライはバイテンゾルフの植物園を見 学したが、そのとき東インド総督がかれにバイテンゾルフ宮殿に滞在するよう勧め、宮 殿敷地内のパヴィリオンをかれに提供した。

1883年にニコライが三度目のアストロリャビア湾上陸を実現させたとき、原住民は男だけでなく女も子供を連れて海岸へやってきて、歓喜にあふれたお祭り気分を湧き立たせた。ひとびとはかれの住む家を建て、周辺の土地をきれいにし、船から下ろされ

るかれの必要品を大喜びで家に運び込んだ。そのとき、かれはこれまでに増して大きな 意味を持つ研究成果を得ることができた。

1884年2月、かれはまたニューギニア島を訪れたが、そのときは南西部のパプアコウィアイが訪問先だった。しかし健康状態が悪化したために、かれはそこを引き上げてバイテンゾルフに向かい療養に専念することを余儀なくされた。

バイテンゾルフ宮殿のパヴィリオンのひとつがかれに提供され、総督の客人としてそこに逗留したが、そのときに総督の娘のひとりとの恋愛譚が噂された。そういう記事がロシア人の署名入りでコンパス紙に掲載されている一方、同紙の別の記事によれば、ニコライが生涯の伴侶を得たのはオーストラリアに滞在中のことで、学者仲間のジョン・ロバートソンの娘マルガリータと1884年2月27日にオーストラリアで結婚したという内容が記されている。オーストラリアからロシアへの帰途にバイテンゾルフに立ち寄ったとしても、新妻を連れたかれに上のような話が起こるとは考えにくい気がする。帰国後、この夫婦はサンクトピテルブルクに居を構えて、男児を二人育て、ニューギニア原住民のように仲睦まじい家庭を築いたとその記事には記されている。

ニコライはまたニューギニア島東半分を領有しているイギリスの現地統治官に手紙を書き、アメリカ人の探検計画を批判し、またドイツの南太平洋における行動を人道主義の観点から非難した。イギリスおよびオランダの現地統治官に対して、古来から続けられて来た原住民の生活慣習に干渉する原住民政策への強い批判をもかれは行っている。かれは1888年4月14日に病気で世を去ったが、1886年に帰国してから没するまで、かれはロシアの著名な学者のひとりとしてマスメディアに取り上げられるスターになっていた。かれの労作である学術諸論文を集めたものは1923年から発行されるようになった。[続く]

「ヌサンタラのロシア人 (4)」(2020年11月19日)

ニコライが調査研究を行った地域の諸村は先祖代々語り伝えられてきたタモルス Tamo Rus (tamu Rusia)の話を集合記憶として保持し続けており、ニコライが連れて来た一対の牛が子孫繁栄して牛の群れになっていたり、またかれが教えたトウモロコシ栽培も原住民の食糧確保の一助として維持されている。

その諸村で使われている地域語の中にロシア語源と思われる単語すら見つかっている。西瓜は abrus、トウモロコシは gugurusa、牡牛は byika といったものだ。またマクライという名が学名に付けられた果樹植物もある。

ロシア帝国の高位にあるひとびとも、バタヴィアを訪れている。バタヴィアは第二次 大戦勃発まで、東南アジア有数の文明化した大都市だったのであり、東南アジアの重要 な寄港地のひとつになっていた。

1890年、まだ皇太子だったロシア帝国最後の皇帝ニコライニ世が極東訪問航海の途中でバタヴィアに立ち寄っている。1911年にはボリス・ヴラジミロヴィチ大公がシアム王の宮殿における戴冠式に列席したあと、バンコクからの帰国の航海でバタヴィアに立ち寄っている。

1894年、ロシアはオランダ領東インドとの貿易拡大を望んで、バタヴィアに領事館を設けた。初代の駐バタヴィア・ロシア帝国領事として赴任したのはモデスト・バクーニン Modest Bakuninであり、かれは有名な無政府主義者ミハイル・バクーニン Mikhail Bakuninの叔父に当たる。バタヴィア領事は1899年に帰国したが、その後任者はやってこなかったらしい。かれは1902年に「Tropical Holland~ジャワ島の5年間」と題するモノグラフを出版した。多分それが系統的にヌサンタラの住民とその生活や習慣、地理や自然などをロシアに紹介した事始めだったようで、ロシアにおける

インドネシア学の礎石となった。その中にはおよそ5百語のムラユ単語がロシア語の定義を添えて記されている。またパントゥンに関する解説も詳しい。

1917年、ロシアにボルシェビキ革命が起こってロシア帝国は崩壊し、共産ロシアが誕生する。インドネシアは第二次大戦を経て独立宣言を行い、オランダ領東インドから脱皮した。第二次大戦後、米ソ二大陣営の対立構造が激化し、同時に起こったアジア・アフリカの民族主義と反植民地主義の動きに関連して、ソ連はそれをバックアップする立場に回った。

1930年にモスクワ東洋学院の学者アレクサンドル・フーベル Alexander Huber はオランダ領東インドの社会経済概説に関する279ページの論文を書き、オランダ領東インドと呼ばずにインドネシアと記した。地理学上の学術名称が政治的な領土に対してはじめて使われたのが、このロシア語の論文だったと言われている。

1949年8~12月のオランダとインドネシアのハーグ円卓会議のあと、1950年1月26日にソ連はいち早くインドネシアの独立国家承認を行った。1950年9月28日のインドネシアの国連加盟にもソ連は早くからそれを支持する立場を表明している。

その年の2月3日にソ連はインドネシアに対して外交関係を結ぶことを求めて来た。 インドネシア共産党とイスラム系勢力との間で、その賛否をめぐって国会は大揺れに揺れた。

最終的に1954年、インドネシアとソ連はそれぞれの首都に大使館を開設することに合意した。駐モスクワインドネシア共和国初代大使はスバンドリオ、駐ジャカルタソ連初代大使はズコヴDA Zhukov が任じられた。

それから1965年までのオルラレジームでは、インドネシアとソ連の蜜月時代が続いた。ソ連はインドネシアに対して軍事援助経済援助を惜しげもなく注ぎ込んだ。おかげでインドネシアの軍事力は大きく進展し、中国に次ぐアジア第二の軍事大国になった。

スカルノ大統領は1956年以来四回もソ連を訪問した。スカルノが北京とモスクワを訪問して社会主義陣営への接近をあからさまに示した時、米国外交筋はインドネシアを強く批判し、スカルノを共産主義者呼ばわりした。スカルノはそれに関してこう語っている。「全能の偉大なる神が作ったこのわたしという人間を、かれらはコテコテの共産主義者だと言うんだから・・・」

[続く]

「ヌサンタラのロシア人(5)」(2020年11月20日)

スカルノはパンナム機に乗ってモスクワを訪問した。空港で飛行機が停まり、スカルノがタラップを降りる時、パンナムの青い制服を着た金髪の美人スチュワーデスがタラップの両側に整列した。すると地上で150人の楽隊と合唱団がインドネシアラヤの演奏と合唱を始めたではないか。感動で涙がこぼれたとスカルノはそのときのことを追想している。完全独立をやっとのことで達成した一新興国にここまで手厚いことをしてくれるのかという感慨にかれは襲われたのだろう。ソ連の心情作戦はたいへんに効果的だったようだ。

大統領訪問の前準備で先にモスクワを訪れていたナスティオン国軍総司令官国防統括 大臣はそのときフルシチョフ首相と共に大統領を迎えるために空港で待っていた。首相 がナスティオンに皮肉を言った。「将軍、インドネシアの娘たちはみんなきれいですな あ。」将軍は切り返した。「首相がインドネシアにお越しになれば、もっと美しい黒髪 の娘たちをたくさんご覧になれますよ。」

スカルノの最初のソ連訪問時に、レニングラードでかれは中央アジア風の青いドーム を持つこぎれいな建物を目にした。好奇心に駆られて、かれはそこに立ち寄るよう運転

手に命じた。着いてみると、そこはただの倉庫だった。かれはその辺りにいるひとびと に尋ねた。これは一体何なのかと。

昔これは美しいモスクだったのだが、共産主義がこの国を支配するようになって、すべての宗教施設は閉鎖を命じられたため、この建物もモスクとして使われなくなったのだ、というのがスカルノの得た裏話だった。

レニングラードからモスクワに戻って来たスカルノに、フルシチョフ首相が訪ねた。「レニングラードはいかがでしたか?あの美しい町をお楽しみいただけましたか?」 スカルノは答えた。「あなたのおっしゃるその町をわたしはろくに見なかったし、楽 しくもなかったですよ。」

「そんな馬鹿な。世界的にも美しいと言われているあの町に閣下は何日か滞在された でしょうに。」

「いや、問題はね、わたしはモスクを探したのに、モスクが見つからなかったということです。」

スカルノが帰国してからフルシチョフはレニングラードで何があったのかを調べさせ、そして青いドームの建物を宗教施設として再開させるように命じた。レニングラードのムスリムは驚き、その措置の陰にスカルノの名前があったことを知ってスカルノを尊敬するようになった。そういう話が伝えられている。

1957年に7人のインドネシア人学生が国費留学生として迎えられたのをきっかけにして、多数のインドネシア人留学生がソ連のあちこちの大学に迎えられた。その数は通算して5千人を超えている。ソ連は西欧の植民地から独立した新興国家への援助の一環として各国から青年の留学を受け入れる方針を取った。その中でインドネシア人留学生は最多数に上ったのである。ソ連在留のインドネシア人留学生が2千人いた時期もある。1960年代のインドネシアの都市部では、ソ連への留学が社会現象になっていた。

そのインドネシアとソ連の蜜月時代に作られた施設のひとつがジャカルタのスナヤンスポーツコンプレックス Gelora Bung Karno であり、そのメインスタジアム Istoraだ。スナヤンスポーツコンプレックスはインドネシアが 1 9 6 2 年 8 月に第 4 回アジア競技大会を主催するときに建設された。[続く]

「ヌサンタラのロシア人 (6)」 (2020年11月23日)

その建設のためにスカルノはソ連に資金と技術の支援を要請し、ソ連はそれを受けて 1,250万米ドルの資金と建築技術者派遣の協力をインドネシアに与えた。スカルノ はソ連のルジュニキ Luzhniki スタジアムのデザインをたいそう気に入り、スナヤンに も同じものをと望んだことから、あたかもロシア人がルジュニキとスナヤンに双子のス タジアムを作るような結果になった。

ソ連の援助で作られた施設はもっとたくさんある。東ジャカルタのプルサハバタン病院 RS Persahabatan、チルゴン Ci legon の製鉄所(現在のクラカタウ製鉄所)、チラチャップ Ci-lacap の肥料工場、そして郵便局、電話局、銀行なども作られた。また、アンボンのパティムラ大学への地理学と海洋学の専門家派遣も行われている。

中部カリマンタンのパランカラヤ Palangkaraya⇔タンキリン Tangkiling 間の道路を地元のひとびとはロシア道路 Jalan Rusia と呼んでいる。全長34キロ、幅6メートルの直線道路はロシアの援助で作られたものだ。

なぜこんな場所に外国の援助で一級道路を作ろうとしたのか?それはスカルノ大統領が抱いた首都移転構想に沿ったものだったのである。スカルノは植民地支配者の歴史が刻み込まれているジャカルタを捨てて、新興国家にふさわしい新しい首都を作る夢を抱いた。そして、その当時森林原野でしかなかったパランカラヤに新しい首都を設けるこ

とにし、新首都とサンピッ Sampit、そして更にパンカランブン Pangkalan Bun までの 1 7 5 キロを結ぶ一級道路建設の支援をソ連に求めたのである。

1957年7月17日、ダヤッ族居留地パハンドゥッ Pahandut の森の木にスカルノは 斧を振るった。それが新首都建設の鍬入れ式だった。大人が両腕で抱えてもまだ届かな いくらい太い巨木が林立していたそうだ。

町の構造はカハヤン Kahayan 川を北端にして、行政地区・商業地区・住宅地区が分離され、南東にあるバンジャルマシンと南西にあるサンピッ間の交通を陸路と水路の二本立てでつなぐ構想になっていた。

神聖・高貴・偉大なる場所という意味を持つパランカラヤと名付けられた未来の首都 はこうして建設が開始されたのである。一方、ソ連に要請した道路建設も1962年に 準備が整って開始された。十数人のロシア人技師がやってきて、現場で工事の指揮を取った。ダヤッ人数十人、そしてこの工事のためにジャワからやってきた百人を超えるジャワ人が、ロシア人技師の指図に沿って作業を行った。

公共事業省道路建設専門家は、そのときたいへん丁寧な仕事がなされた、と語っている。ロシアとは地質のまるで異なった泥炭土に覆われている中部カリマンタンに最高の道路を作るため、技師たちは泥炭土の層をすべて取り去る方法を採ったのだ。どんなに深かろうと、道路幅の分だけ泥炭土はすべて除去されて、そこに硬い基盤を底にした水路が出現した。その水路は石・砂・高密度の土で埋められた。1962年12月17日にそれが終わると、排水設備・土固め・アスファルト舗装の工事が続けられた。たいへんな手間と時間を費やす作業だったが、その効果は50年以上が経過したいま、だれもが明白に感じることのできるものになっている。

このロシア道路は現在、カリマンタンの海岸部を端から端までつなぐトランスカリマンタン道路の一部になっている。トランスカリマンタンは至る所で穴が開いたり、褶曲

したりしているのだが、ロシア道路の34キロ区間だけは何の瑕疵もない、継続的に高 速走行が楽しめる道路になっているのである。

他の区間はたいていインドネシア人が建設したものだ。即席が大好きで、早く結果が 出ることを尊ぶ民族性は、即席に完成し、そして即席に壊れて行く道路を国中に作って いる。壊れた道路を補修するのに予算が支出され、毎年同じことが繰り返されて、業者 は受注の絶えることがない。

公共事業省専門家は、ロシア人のやり方はインドネシア方式の3倍のコストがかかると言う。しかしそのやり方で作られた道路はインドネシアの一般的な道路よりも5倍長持ちするのだそうだ。[続く]

「ヌサンタラのロシア人(終)」(2020年11月24日)

その素晴らしいロシア道路は当初計画の二割しか作られないまま終わってしまった。 1965年のG30S政変がその結果を招いたのである。それは同時に、スカルノの夢 だった首都移転をも粉砕してしまった。

G30S事件の知らせがロシア人技師たちに届くと、かれら全員がすぐさまインドネシアを離れた。その工事に関わっていたインドネシア人たちも、即座にソ連のプロジェクトとは無関係であるという風を装った。工事現場は一転して無人の境に変わってしまった。たとえ一介の労務者でしかなかったとしても、中国やソ連のプロジェクトに関わっていたと赤狩りの連中に騒がれたら何をされるか分かったものではないし、オルバ行政に政治犯の烙印を捺されるのも怖ろしい。

その後遺症はいまだに続いていて、2009年にコンパス紙がトランスカリマンタン 特集を組んでロシア道路の取材を行った時も、建設に携わった体験者を探したがほんの わずかなひとにしたインタビューができなかった。

フルシチョフ首相は1961年にインドネシアを一度訪れている。1962年の西イリアン解放戦争では、インドネシア国軍はソ連のバックアップを受けてオランダとの戦争を繰り広げ、米国の調停によって西イリアンをインドネシアの領土に編入した。

西イリアン解放戦争の勝利を記念して、スカルノ大統領はモナス広場南東の、メンテン地区北部とスネン地区を結ぶ道路西詰の緑地帯に記念碑を建てさせた。銃を持ち、ジャワの農夫がかぶるチャピン caping (編み笠)をかぶって立っているひとりの男とそれに食べ物を渡しているカインクバヤ姿の女性の像はロシア人彫刻家のデザインと制作によるものだ。

二人のロシア人彫刻家は構想を練る中で、インドネシアで耳にした出征する息子に祝福を与える母親の話に感銘し、そのデザインを採用した。この像はソ連政府がインドネシアにプレゼントし、1963年にスカルノの希望通り現在の場所に設置された。公式名称は英雄の像 Patung Pahlawan となっているが、農夫のイメージが強いことから農夫の記念碑 tugu tani と呼ばれることも少なくない。

1965年のG30S政変でインドネシアとソ連の蜜月関係は終焉した。ロシアや東欧にいたインドネシア人学生や社会人に新政権は即時帰国を命じたが、さまざまな事情でそれに従わなかった者もあった。赤狩りで行われた大殺りくの噂に帰国を怖れた者もいた。従わなかった者たちは国籍を喪失し、政治亡命者になった。かれらの運命はインドネシア語のさまざまな小説の中に描かれている。赤狩りにおけるジェノサイドや故国喪失の被害者の話は、この民族が担わなければならない伝説となるだろう。

1989年になって、スハルト大統領はソ連を訪問して国交を回復させた。1991年12月のソ連崩壊の三日後に、インドネシア共和国はソ連の後継者たるロシア連邦共和国を公式承認している。こうして両国は互いにイデオロギーを抜きにした国交を展開するようになった。

2007年9月5日にはヴラジミル・プーチン Vladimir Putin 大統領が二日間のインドネシア公式訪問を行い、フルシチョフ首相以来、実に半世紀近い空白期間を経てロシアの要人の公式訪問が実現された。インドネシア側もスハルト大統領のあと、レフォルマシレジームに入ってメガワティ、SBY, ジョコウィ、と歴代の大統領がロシアを公式訪問している。[完]